アルマニアナイツ

大野はるたか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルマニアナイツ

【Ｎコード】
Ｎ０７８２Ｄ

【作者名】
大野はるたか

【あらすじ】
四人の騎士からなるアイリス小隊が国王から魔王討伐の任を受けて旅立った。アイリス小隊は最初の都市で一人の乞食と遭遇する。これは乞食の少年と四人の騎士の物語である。

プロローグ

プロローグ　1

一陣の風が通り抜け、乾いた大地に砂塵が舞った。
一人の騎士が歩いていく。
威風堂々、風を切って歩を進める。一歩一歩、確かに大地を踏みしめて。
空は有明。染まり始めた朝焼けに、まだ残る月が霞んでいる。
視線の先には一人の宿敵。騎士にとっての倒すべき敵。
交わす言葉はもう絶えた。今更語る事などない。
旅が始まり、幾多の困難を乗り越えた。一つ一つの戦いを経て、そして残った確かな想い。
騎士は静かに立ち止まる。
宿敵は身動き一つとらぬまま、ただ泰然と騎士を待つ。
風が止まる。
万物全てが眠りに落ちたかのように、世界は静寂に包まれた。
騎士と宿敵、二人の呼吸が世界に響く。
最後に立つのは己か敵か。いまだ昇らぬ朝の日を、望める者はただ一人。
騎士と宿敵が、同時に一歩を踏み出した。
最後の闘いが始まる。

第一章　第一話『私と同じ夢を見ている』（第二稿）

第一章　カシャワック・ミートアゲイン
第一章　私と同じ夢を見ている

1

王暦三〇九年。アイリス・ヘリオトロープは幼い頃から憧れていた王国騎士になることができた。

しかし、アイリスはまだ未熟だった。

アイリスは王国騎士の家系に育ち、家族ぐるみで王家と付き合いがあったという理由だけで騎士に任命されたのだ。

すでに亡き父親がかつて騎士団長だったということもあり、初めは多くの騎士がアイリスの面倒を見てくれた。しかし彼女に何の実力もなく、実戦経験など一度もないことが明らかになっていくと、騎士達の視線は冷たいものになっていった。

十七歳の少女。訓練を積む事には積んでいたが、その剣の実力は余りにも稚拙（ちせつ）だった。

先輩騎士達に稽古をつけてもらっても、アイリスは一度たりとも相手に打ち込めた事がなかった。いとも簡単に攻撃は防がれ、毎日のように青痣を作っていた。初めは期待され、辛抱強く面倒をみられていた彼女だったが、やがて同期の新米騎士が確かな戦果を挙げていくようになると、見向きもされなくなっていった。

先輩騎士に従って初めて任務に赴いた時も敵兵の勢いに怯え、アイリスはまともに剣を振るえなかった。結局一人も敵を倒す事がなく、先輩騎士に守られ続けていただけだった。共に戦場に立った同

期の騎士はそんな彼女を尻目に十分な戦果を残していた。
その同期の騎士とアイリスはよく比べられた。彼女はその度に惨めな思いを味わった。
親の七光り。影で自分がそう噂されていると知ったのは、アイリスの初任務から一週間ほど経ってからだった。
分かっていた。偉大な父と違い、自分には何の才能もないということは。毎日毎日、血と汗を流しながら訓練をしても一度も先輩騎士に剣を打ち込めた事は無かった。悔しかった。兜の下にある稽古相手の目の色が、日を経る事に暗くなっていく事が辛かった。
ベッドの中で泣き続けた事もあった。自分の惨めさに、自分の情けなさに、父親の活躍と自分の現状を比べられる度、自己嫌悪が津波のようにアイリスを襲った。
「戦闘で役に立てないなら、せめて他の仕事はこなしてみせろ」
いつだったか、任務に同伴した先輩騎士がアイリスに言い放った。その先輩騎士はアイリスが騎士になった当時、熱心に彼女を指導してくれた騎士の一人だった。
王国騎士が任務に赴く際、荷馬の世話や騎士達の食事の準備などを行う雑用夫が雇われることがよくあった。騎士が任務に集中できるよう王国騎士団全体で推奨されていることだ。とはいえ、雑用夫は騎士の自費で雇う事になっていた為、金に余裕のない騎士にとっては痛い出費となっていた。
アイリスが同伴したその任務では雑用夫は雇わなかった。
なぜならその必要が無かったからだ。
先輩騎士と同期の騎士、そしてアイリスの三人が担当する任務で、彼女は一人で荷馬の世話をし、食事を作り、夜の見張りを行った。睡眠時間を削ってあらゆる雑務をこなし続けた。彼女は不平や不満は一切洩らさなかった。自分の未熟さがこの結果を生んでいるのだと痛々しい程に理解していたからだ。
夜になって、仲間が寝静まっている中、アイリスは昼間にできなかった訓練を行った。月の光の下、睡眠不足で朦朧とする意識の中、

ひたすら剣を振り続けた。
戦場に辿り着くと、先輩騎士と同期の騎士は敵陣に切り込み、華々しい活躍をみせた。一方、残されたアイリスは荷物の番をしていた。彼女は戦いが終わるまで真っ白になるほど拳を握り締めながら、声を押し殺して涙を流した。
「役立たずが」任務を終えた同期の騎士は、アイリスに向かってはっきりと言い捨てた。
それから任務に赴く度、アイリスは雑用係を押し付けられるようになった。根が真面目な彼女が行う雑用は下手な雑用夫を雇うよりも効率が良かったからだ。一人の騎士が「いっそこっちを本職にしたらいいんじゃないか」と笑いながら言った。
以前よりも任務に同伴する機会は増えたが、それが決して喜べない事は言われるまでもなく分かっていた。
強くならなくてはならない。しかし、その為の時間は雑用ばかりで削られていく。
日々は過ぎていく。親の七光りと影口を叩かれる事はなくなった。代わりに、『下っぱアイリス』という呼び名が騎士達の間では広がっていった。
雑用ばかりの日々が続いた。
いつからか剣を握る時間が少なくなっていた。
なぜ騎士を目指したのか。もはやその理由さえ忘れてしまっていた。
すっかり輝きを失った瞳に写る空は、いつも霞んで見えていた。

アイリスが騎士になって一年が過ぎた。
アイリスは自分が『下っぱアイリス』と呼ばれ、雑用係であることに、違和感をほとんど覚えなくなっていた。自分が王国騎士であるという自覚すらほとんどなくなっていたのだ。
もう王国騎士を辞めよう。アイリスはそう考えながら、任務と任務の間のわずかな休暇を過ごしていた。

雑用仕事に疲れ果て、訓練をしようという気さえ失せていた。何をするでもなく、ただ当ても無く都市を歩いた。何かを考える事もせず、ぼんやりと雑踏を眺めていた。
人通りの少ない路地に差し掛かった時、アイリスははっと目を開いた。
アイリスの目の前で、乞食の少年が三人の少年に暴行を受けていたのだ。
乞食の少年は抵抗できずに、殴られ、蹴られ、転がされていた。
アイリスは自分の感情が混乱しているのが分かった。心のどこかで火がついた導火線がしかし、どこにも繋がらず途切れてしまっていた。
アイリスは無意識に拳を握り締めていた。どこかで燃え上がる炎に体内を焼かれながら、それでもその炎が広がっていく事が無い。何かが欠けてしまっている。
駄目だ。アイリスは思う。あの少年を助けなくてはならない。
しかし足が動かなかった。
アイリスの見ている前で少年達の暴力は続く。いつの間にかアイリスは、何も抵抗できない乞食の少年に、何もできない未熟な自分を重ね合わせていた。
どれだけ努力しようとも報われない事がある。
どれだけ耐え忍ぼうとも何も得られないのだから、いっそもう――。
その時、一人の少年が悲鳴を上げた。暴力が止まる。
悲鳴を上げた少年の足に乞食の少年が噛み付いていた。
アイリスは魅入られたように乞食の少年を見つめていた。
やがて足を噛まれていた少年が路地の奥へと逃げ出していき、二人の少年が残された。
乞食の少年がゆらりと立ち上がった。乞食の少年が発する覇気に、二人の少年は思わず後ずさった。
「舐めんな、ガキ共っ！　お前らみたいな、何も考えないでちんた

ら生きているガキ共に負ける俺じゃねえ！」
乞食の少年が全身の痛みを意に介さず、ゆっくりと一歩踏み出した。その片目が青痣で潰れかかっているのが見える。体の節々に擦り傷がある。汚れきって、打ちのめされて、もう勝ち目などないはずの少年がしかし、燃え滾（たぎ）る何かで輝いて見えた。
「俺には確かな夢がある！」
乞食の少年は堂々と胸を張った。
「俺は必ず這い上がる！　覚えておけよ、馬鹿ガキ共――」
この場の誰もが乞食の少年の言葉に聞き惚れていた。聞く人の心を奮わせる何かがそこにはあった。
「俺は必ず騎士になる！　お前らなんぞ、顎で使う身分になってやるんだ！」
言い放った大言壮語に、乞食の少年はふんと鼻で笑った。
不意に、視界が大きく広がった。
やっと思い出した。
あの少年は、私だ。
私と同じ夢を見ている。
大きかった父の背中。尊敬していた騎士の姿。ただ純粋に憧れていた。私もいつかああなりたいと願っていた。
私が今に至る理由。騎士を目指したその思い。ただ過ぎて行く毎日に疲れ果て、忘れてしまっていた。見失ってしまっていた。どうしようもなく幼稚で単純で簡単な想い。
はっと我に返った少年二人が、生意気な口を叩いた乞食の少年に殴りかかる。覇気はあったが体力なんて残っていない。乞食の少年は成す術も無く地面に押し倒された。
「やめろ！」
突然の第三者の声に少年達は振り返った。
アイリスは無意識に叫んでいた。心ではなく身体が勝手に動いていた。
「見るに耐えない一方的な暴力。抵抗できない相手に拳を振るって

満足か？」
　アイリスは路地を横切って少年達の元へ近付いていった。
「な、なんだよアンタ！」
　リーダー格の少年が虚勢を張った。もう一人の少年が目を伏せている中、強気な態度でアイリスに向き合う。
「人に名前を尋ねる時は、まず自分から先に名乗るべきだ」
　アイリスは言った。そして、一呼吸おいて威を発する。
「――お前の名前を聞かせてもらおう！」
　太陽が瞬く。建物と建物の間から一瞬だけ光が強く放たれた。
「え」
　アイリスの覇気に気圧され、少年は口ごもった。
「答えられぬならそれでいい！　どうせ名もない小物だろう！」
　ばっさりと切り捨てられた少年は身じろぎする。
　アイリスはゆっくりと少年達に一歩踏み出した。土を踏みしめる音が路地に大きく響く。
　私は誰だ？　そう問う声がどこかで聞こえる。
　いまさら迷う事もない。二度と見失う事もない。
「我が名はアイリス・ヘリオトロープ。アルマニアの王国騎士だ！」
　アイリスの言葉に、少年達はあんぐりと大口を開けた。アルマニア王国に十五人ほどしかいない最強の精鋭が、こんな路地裏に現れるとは思ってもいなかったのだ。
「うわあ」
　アイリスの言葉を疑う事も無く、少年達はなりふり構わず逃げ出していった。王国騎士を相手に並の人間が敵うはずがない。まして子供なら尚更だ。少年達は情けない悲鳴を上げながら姿を消していった。
「アンタ、騎士なのかよ？」
　逃げていった背中を見送っていたアイリスに、横から声がかけられる。
　勇敢に耐え忍んだ乞食の少年だ。

アイリスはふっと微笑みながら少年に向き直った。
「ああ、そうだ」
その言葉に迷いは無かった。自分が何者であるのかはっきりと理解している者の声。
少年は青痣で埋もれた顔に不敵な笑みを浮かべ、アイリスを指差した。
「じゃあ、待ってろ。いつかそこまで行ってやる」
腫れてしまい、ほとんど閉じてしまっている瞳には強い光が宿っていた。
アイリスは優しく頷いた。
「ああ、待っている。私は君が来るまでに、君の夢に恥じない騎士になっておくよ」
アイリスの言った言葉の意味が分からなかったのか、少年は眉をひそめた。
アイリスは恥ずかしげに頬をかきながら弁解する。
「騎士は騎士だが、私はまだまだ見習いでな。――だがもう大丈夫」
不意にアイリスの表情が真剣なものに変わる。
「もう、立ち止まる気なんて無くなった。立派な騎士になってみせるさ」
「ンだよ。見習いかよ」
少年は呆れたような声を出した。アイリスは苦笑するしかない。
「それじゃ」
言って、少年は背中を向けた。路地の奥へと歩き始める。
「あんがとよ」
少年がさり気無く残したその言葉は、アイリスの胸に優しく染み込んでいった。
礼を言うのはこちらの方だ。
そう口の中で呟いてから、アイリスは晴れ渡った青空のような心持ちで次の任務へと向かっていった。

それから四年の月日が流れた。

2

「待て、泥棒ッ！」

慌てて叫んだ露天商の声を背中で聞きながら、リック・クロビスは路地裏へと駆けていった。その手には真っ赤な林檎（りんご）が二つほど、抱え込まれている。

王暦三一三年四月十五日。アルマニア王国領の開放都市カシャワック。

リックの髪は栗色でぼさぼさになっていて、眉は太く、一見すると純朴そうな印象を与える。その身なりはみすぼらしく、小汚いぼろきれを巻きつけているだけだった。十八歳のリックは同世代の平均的な男性と比べて、頭一つ分は身長が低かった。

いつものように食料を盗み、路地裏を逃げていく。もはや庭といってもいいほど慣れ親しんだカシャワックの裏通りだ。追手を振り切るのも簡単なことだった。

リックは息を切らしながら、狭い道を辿り、空き家を通り抜け、そして人っ子一人いない静かな路地に躍り出た。

ここまで来ればもう安心だ。リックはほうっと溜息をついた。

リックは疲れ果て、ぜえぜえと肩で息をしていた。

額（ひたい）の汗を拭いながら手に持った林檎を見つめる。一切手をつけていない真っ赤な林檎だ。そのまま林檎を口に運び、ざくりと歯を立てる。その途端、果汁がじんわりと口内に溢れ出した。

「ンまい！」

リックは思わず青空を見上げて声を上げた。ぎゅっと目をつむって、一噛み一噛みを大切に味わっていく。じゃくじゃくと果肉が潰れる度に瑞々（みずみず）しい味が舌に伝わり、空っぽだった胃袋に抵抗なく林檎が収まっていく。

一仕事働いた後の食事は格別だった。
満足気に林檎の芯を放り投げたリックは、悠々と風を切って歩き出した。

日のほとんど差さない路地裏。建物と建物の間。饐(す)えた臭いが漂っていて、乱雑に積み重ねられたゴミの隙間には虫が這い回っている。
リックは散らばった木箱や転がった酒瓶を踏み越えて奥まで進んでいった。いくらも進まぬうちに、ある程度整理された一角に辿り着く。
ここが現在のリックの家だった。
地面に敷かれた莫蓙(ござ)の上に薄い毛布が一枚畳まれている。他には何もない。何も持っていない。ただ座り、眠るだけの場所だ。
「あ、ローじいさん」
リックは自分の寝床の隣に同じように莫蓙を敷いている白髪の老人に声をかけた。ローはリックに何の反応も見せず、静かに虚空を眺めていた。
ローの年齢をリックは知らない。数年前に出会った頃から今と同じように皺くちゃで猫背になっていた。身なりは思ったよりも清潔で、毎日のように衣服を洗っているらしい。
リックは彼をローと呼んでいるが、それが彼の本当の名前であるかは分からない。そもそもリックは彼の事をほとんど何も知らない。知る術がなかった。
ローは生まれつき耳の聞こえない聾唖(ろうあ)だった。耳が聞こえないので話す事はできないが、唇の動きを読む事で他人の言葉を聞くことはできた。その事に気付くまでリックはローとの付き合い方が分からなかった。
リックはローの視界に映るよう、彼の正面に回った。
「いま戻ったぞ、ローじいさん」
ローはリックの口の動きを読み取り、静かに頷いた。これといっ

た表情は浮かばない。ただ当たり前のようにリックの姿を認めただけだった。
リックとローは同居人として長い付き合いがある。もはや家族といってもいいほどの関係だ。リックはローに親しげに頷き返した。
「これ、お土産」
リックは笑みを浮かべながらローに林檎を差し出した。
ローは林檎を一瞥した後、リックを訝しげに見つめた。いいのか？　と言っているのだろう。
「お土産だって」
リックはローに林檎を押し付け、自分の寝床に腰を下ろした。
建物によって細く区切られた青空を見上げる。流れる雲の動きが変化の無い風景の中で唯一変わり続けている。
隣からしゃくりと林檎を齧(かじ)る音が聞こえてくる。
身寄りなど無いカシャワックの地でたった一人でも自分を知っている人間がいる。それだけで安心する事できた。だから、このままでもいいかとも思えてくる。
きっとも明日も今日と変わらない。何一つ変わる事無く俺はこのまま埋もれていく。
リックが夢を口にしなくなってから長い月日が流れていた。

3

アルマニア王国の首都、王都アゲラタム。その中枢であるアルセオラリア城で、王国騎士アイリス・ヘリオトロープは王国の政策を決める十人議会の会議室に立っていた。
艶のある金髪に、陶磁のような白い肌。意志の強そうな翡翠色の瞳は変わることなく、その身が放つ空気は凛としている。二十二歳となったアイリスは何一つ恥じる事の無い一人前の王国騎士となっていた。

アイリスは居並ぶ議員達を見据えながら口を開いた。
「先日、魔族が大陸北方、帝国領土の都市ピッツバルグを攻め落としました。その話はご存知ですか？」
「知っている。ふん、好都合ではないか。我ら王国が手を下すまでも無く帝国と魔族で相打ってくれているのだからな」
アイリスは苛立ちを隠さずに議員達に向かって吼えた。
「魔族が王国も帝国も関係なく、無差別に人民を殺戮しているのはご存知でしょう？　一刻も早く帝国と休戦協定を結び、共に魔族へ立ち向かうべきです！」
「君もしつこいねえ。帝国との休戦などあり得ないと何度言わせれば気が済むんだ」
一人の議員が不快感を顕わにアイリスに言った。
「魔王を放置しておけばいずれ大陸全土が魔族の侵略を受けます。その時になってからでは遅いのです」
アイリスは猛々しく議員達に訴えた。もう何度目になるだろう。アイリスは同じ事を繰り返し議会に訴え、その度却下されてきたのだ。
「……ふん」
アイリスの発言を静かに聞いていた一人の議員が口を開いた。禿げ上がった頭と恰幅の良い腹。十人議会の実質上の長であるルーベルト・ブラウンである。
「そこまで言うならいいだろう。君に魔王討伐の任を与えてやる」
「ルーベルト議員？」
一人の議員がルーベルトの言葉に動揺して疑問を投げかけた。帝国との戦争を止め、魔族討伐を行う事など完全に十人議会の意向から外れてしまう。魔族が帝国にも侵攻している今こそ帝国領土を奪う好機だと十人議会は考えているのだ。
ルーベルトに期待の視線を向けたアイリスは、そこでルーベルトの冷たい視線にぶつかった。
「ただし王国軍を用いる事は許さない。君一人で魔王の首を取って

もらう」
「……どういう事ですか？」
震える声でアイリスが尋ねる。
「王国軍に君はいらない、という事だ。幾ら実力が高かろうと自分の意見だけに固執し、周囲の和を乱すだけの人間は邪魔なだけだ。お高く留まった王国騎士など軍には不要なんだよ」
アイリスは歯を食いしばった。
「王国騎士を侮辱する事は国王陛下を侮辱する事だぞ、議員！」
「時代は変わっていくんだよ、アイリス・ヘリオトロープ。騎士の時代はもうじき終わりだ。これから必要とされるのは一人の騎士より百の兵なんだよ」
ルーベルトは氷のように冷たい瞳でアイリスをねめつけた。アイリスは何かを言い返そうと口を開き、しかし何も言う事ができずに頭を振った。
ルーベルトはやれやれと言いたげに溜息をついた。
「いいじゃないか。私は別に君を罷免しようと言うのではない。そもそもそんな権限は持っていないのでな」
アイリスは腹立たしげにルーベルトを睨みつけていた。
「それにこれは正当な任務でもある。成功した暁には更なる昇進が待っているだろう。何せ、たった一人で魔王を倒すというんだからな」
ルーベルトはそう言って、腹を揺らして笑い出した。何人かの議員がそれに合わせて笑い出す。
死ねと言っているのだ、この男は。アイリスは肌が真っ白になるほど強く拳を握り締めた。
「分かりました、いいでしょう」
アイリスは強くルーベルトを睨み返しながら言った。
「王国軍の人間は使いません。ただし――」
王国騎士団は国王直属の精鋭部隊であり、現在は十六名で構成さ

れている。その歴史は長く、三百年前にアルマニア王国が周囲の小国と連合して現在の規模になる前から王家一族に仕えている。遥か昔からアルマニア王国を守護し続けてきた機関なのだ。
王国騎士に必要とされるのは高潔な精神と卓越した戦闘力。その両方が国王に認められて初めて騎士の誓いは行われる。王国騎士の全員が国王の為に戦い、死ぬ覚悟を持っているのだ。
「よく来てくれた、アイリス・ヘリオトロープ。頭を上げてくれ」
アルマニア王国第十四代国王ロイ・アルマニアは親しげに告げた。彼の言葉を受けて、アイリスは深々と下げていた頭を上げた。
「陛下、お話があります」
アイリスは議会から命じられた自分の任務について国王に語った。
「魔王討伐か。ふむ、面白い」
国王は興味深げに言い、白い顎鬚(あごひげ)をしごいた。
「陛下。魔族の危険性についてはご存知のはずです。議員達はどうにも日和見(ひよりみ)主義に過ぎます」
「ふむ、確かにな。……十年前か、奴等が大陸に姿を現したのは。奴等はトリトニア公国を占領して以来、徐々に領土を広げてきている」
魔族がオーランド大陸に現れたのは今からちょうど十年前。
逆三角形に見立てられるオーランド大陸。その南半分にアルマニア王国、北半分にローランス帝国が位置し、両者は今現在も戦争を続けている。その戦争に割って入った第三勢力が魔族だ。
十年前に大陸北東部、ローランス帝国の領土に姿を現した魔族は瞬く間に都市を落として帝国領土を奪った。今でも魔族は無差別に都市を襲って徐々に大陸に領土を広げている。
灰色の肌と白い髪。その特徴的な要素を除けば、魔族はほとんど人間と変わらない外見をしている。しかし生まれ持つ魔力の絶対量は人間のそれより遥かに多く、魔族が人間とは明らかに違う種族である事を示していた。
魔族がどこから現れたのかは明らかになっていない。海の外の異

大陸から現れたという者もいれば、文字通り異世界からやってきたのだという者もいた。その答えを知る術は誰も持っていなかった。
「帝国の都市だけではなく王国の都市にも被害が出ています。魔族とまみえた兵の話を聞くに、奴等の戦力は相当なものです。放置しておけば数年のうちに魔族の侵略が大陸に広がってしまうでしょう」
「ふむ。魔族については私も憂慮(ゆうりょ)している。しかしな、議会の方針も決して間違っているとは言えんのだよ」
アルマニア王国よりも遥かに長い歴史を持つローランス帝国は、大国として大陸に君臨し続け、覇者で在り続けた。およそ三百年前に多数の小国が連合して現在のアルマニア王国が誕生するまで、ローランス帝国に対抗できる国家は存在しなかったのだ。
大陸の覇権を争う戦争においてもローランス帝国は強大だった。帝国軍は精強で、帝国が魔族に兵を割いている今こそが王国にとって帝国を打倒する絶好の機会であり、唯一の機会でもあった。
「ですから、帝国と和睦(わぼく)すれば――」
食い下がるアイリスに、国王は悲しげな目を向けた。
「それがどれほど困難な事か分からない訳でもあるまい？」
「しかし！　魔族を放置しておく事が、アルマニアの騎士として正しい事だとは思えないのです！」
アイリスは強く訴えた。ここで引き下がる訳にはいかなかった。
「国王陛下、私に騎士の徴用をお許しください」
アイリスは深々と頭を下げた。国王はアイリスから視線を逸らし、じっと思考を巡らし始めた。国王の助力が得られないのであれば、アイリスの任務は絶望的なものとなる。アイリスはすがる思いで国王の言葉を待った。
国王はやれやれと言いたげに溜息をつき、口を開いた。
「……ふむ。いいだろう。誉(ほま)れ高き王国騎士であり、かつての親友の一人娘でもあるアイリスの頼みだ。許可をしないはずがない」
国王の優しい口調にアイリスは顔を上げた。その目が期待の色に輝いている。

「しかしもちろん、全員は無理だ。王国騎士の全員が重要な任務を請け負っている。帝国との戦争に騎士の全員を外す事など不可能だからな」
アイリスの期待の篭った目を片手で制しながら、国王は続ける。
「――三人だ。三人までなら、王国騎士をお前の部下にしてよい。そうだな、折角頭の固い議会が許可を出したのだ。お前の好きなようにするがいい」
「ありがとうございます、陛下！」
「アイリス小隊。そう名乗るが良い。ふむ。議会とは別に私が直々に勅令として、この任をお前に任せよう。お前に三人の王国騎士を指揮する権利を与える。アイリス、王国騎士として恥じる事の無いようにな」
国王は親しげな笑みをアイリスに向けた。

アイリスはアルセオラリア城の廊下を早足で歩いていた。
国王の命令は一介の騎士に与えられるものとしては異常なものだった。
騎士を指揮する権利を持つのは国王ただ一人だ。騎士達は国王以外の命令を聞く必要もないし義務もない。ただ国王の為だけに剣を振るうのが王国騎士だ。近年では議会が国王の承認を得るという形で騎士に王国軍としての任務を与えているが、その根本は変わっていない。
騎士が騎士を部下にする。国王はアイリスに三人の騎士を自由に使っていいと言ったのだ。
それはアイリスが国王との親交が深く、その実力が高く評価されているからの待遇に他ならない。
アイリス小隊。自分の名が冠された部隊。
国王の信頼が、ずしりと重い責任となってアイリスに圧し掛かってくる。
議会では厄介払いされた自分の意見を、国王は聞き入れ、その為

に貴重な騎士を割いてくれた。それほどの期待をアイリスは受けたのだ。決してその期待を裏切ってはいけない。
早速、人選だ。
アイリスは城内の王国騎士団本部に足を向けた。
本部では一定の場所に留まる事の少ない騎士達の現在の任務や活動場所などを記録し、管理している。駐屯先の支部に新たな命令が届けられる事もあれば、逆に支部から王都への報告が届けられる事もある。
国王に許された部下は三人。王国騎士が三人と言う事は百単位の部隊と互角に戦えるほどの戦力だ。それほどの戦力を易々と前線から引き抜く事はできない。アルマニア王国の戦況に影響を与えないように、休養中の騎士達を用いるしかない。
アイリスは本部で騎士達の勤務表を眺めながら考えを巡らせた。
アイリスと同じく魔族への危機意識を持っている者。魔族と戦う為の確かな実力を持っている者。そして何よりアイリスと共に戦ってくれる者。
その条件を考えながら、アイリスは候補者を見つけていった。

アイリスは城内の一角にある鍛錬場へ赴いた。城の裏庭にある鍛錬場は駐屯する兵士達が汗を流せるよう整備されているのだ。
青空に鍛錬に打ち込む兵士達の声が響いていた。
十人ほどの兵士が自主訓練を行っている中、一人だけ明らかに覇気の違う人間がいた。
ジラード・ラウンデル。王国騎士団の最年長である五十五歳の老将である。
ジラードは槍を一心不乱に素振りしている。その熟練した動きに見惚れている兵もちらほらと見受けられる。この歳になっても鍛錬を怠ることのない愚直なまでの向上心は、兵の模範となるべき王国騎士として十分以上に相応しいものだった。
「ジラード殿。少しよろしいか？」

アイリスは老将の放つ研ぎ澄まされた空気の中に物怖じする事無く割って入った。ジラードは額から汗を舞わせながら、アイリスに振り向いた。
「おう、アイリス。お主も王都におったのか」
ジラードは槍を地面に突き立てながら額の汗を拭った。白髪の生え際にうっすらと光る汗は年齢に似合わず若々しい。アイリスとジラードとは数年来の付き合いもあり、自然と二人の会話も気安い。
二人は年齢の差こそあれ、その愚直な性質が似通っている事もあり、事あるたびに様々な事を論議しあってきた。騎士団内の剣術大会でまだ未熟だったアイリスが相手に打ち負かされた時、一升瓶(いっしょうびん)片手に夜通し励ましてくれた事もある。
「どれ、折角の機会じゃ。儂と稽古をつけんかの？」
ジラードは糸のように細い目を更に細くしながらアイリスに持ちかけた。まるで玩具を手にした子供のような表情だった。休養が重なる度、ジラードはアイリスに稽古を申し込んでくるのだ。
「それはありがたい申し出なのですが――」
アイリスの真剣な様子にジラードから気安げな態度が消えた。
「なんじゃ、言うてみい」
「ジラード殿。私の魔王討伐の任に協力していただきたい」
ジラードの目がうっすらと開かれた。多くの戦場を生き抜いた者にしか宿らない、迫力ある瞳がアイリスを見据える。
「魔王討伐？　議会の石頭連中がよく許可したのう」
「国王陛下の勅令です。私の部下として、共に戦ってはいただけないだろうか？」
そう言って、アイリスは目を伏せた。虫が良すぎる事は分かっている。百戦錬磨の老将からすれば小娘同然の後輩に部下になるように言われたのだ。
ところがジラードはアイリスの懸念など知った風も無く、歯を見せて高らかに笑い出した。
「がはははは、いいじゃろう、アイリス。国王陛下の令ならば断る

理由もない。魔族に関しては、儂もどうにかせねばならんと考えていたところじゃしな」
　気持ちのいい老人だ。アイリスは爽やかな気持ちを覚えた。
「まだまだ弱輩者ですが、何とぞよろしくお願いいたします」
　アイリスはジラードに頭を下げた。
「謙遜するでない。お主の剣の腕は儂もよく知っておる。今となっては騎士団でも随一の腕じゃないか？　それに、リーダーとしての素養も確かじゃ。儂のようにただ槍を振るうしか能のない老いぼれには、勿体無いほど立派な上司じゃよ」
　ジラードはアイリスを激励するように言った。恐らくアイリスの不安を感じ取ったのだろう。年長者だからできる気遣いだった。
「ありがとうございます」
　アイリスは頬を綻ばせた。眩しいほどに健康的な笑顔をジラードへ向ける。
「ジラード殿にはアイリス小隊の副隊長をやっていただきます」
「副隊長？　面倒じゃのう。儂は何の立場もない一兵卒の方が好みなんじゃが」
　言いながら、ジラードは心の底から嫌そうに眉をひそめた。
「そんな事は言わないでください。ジラード殿の長年の経験ほど頼りになるものはないのです」
　老将のおどけた表情に苦笑しながらアイリスは言った。戦場の酸いも甘いも噛み分けたジラードだ。彼に教わるべき事はまだまだ山のようにある。
「ふうむ。まあ、いいんじゃがのう……」

　鍛錬場でジラードと別れたアイリスは、騎士団本部で見当をつけておいた二人目の候補者の元へ向かった。アルセオラリア城内にある王国騎士の宿舎である。
「分かりました。お供します」
　アイリスが用件を伝えると、シルバ・ベルガモットは素直に従っ

た。
肩までの銀髪に薄い唇。シルバの透き通った白い肌は、まるで精巧に造られた人形のようだ。すらりと伸びた手足や洗練された身のこなしは、見る者に鮮やかな印象を与える。
シルバは王国騎士になってからまだ三年と経たない新米だ。女性でありながら十六歳と言う若さで王国騎士に任命されたシルバは、その類稀な才覚で多くの任務をこなしてきた。
二十二歳のアイリスと十八歳のシルバ。歳の差こそあれ、騎士団では数少ない女性同士、アイリスはシルバに友情めいたものを感じていた。同じ任務に赴く事があれば率先して声をかけ、先任騎士として王国騎士の振る舞いも丁寧に教えてきた。いつも素っ気無い返事しかしないシルバだが、それでもアイリスに対して不平不満の類を洩らした事は一度も無い。同じ任務になれば自然と二人で肩を並べる機会が増えていた。
「いいのか、シルバ？　これは相当気の長い任務になるぞ？　今まで以上に自由な時間は無くなってしまうが」
シルバは静かに頷いた。
「私は王国騎士ですから」
表情を一切動かさないままシルバはぽつりと呟いた。それ以外に何か理由が必要なのかと言いたげにも見える。
「わかった。お前と一緒に戦えて嬉しく思うよ。これからよろしく頼む」
アイリスはシルバの肩に手を置き、力強く頷いた。

この日、王都には王国騎士がほとんどいなかった。その多くが大陸各地で様々な任務に当たっているからだ。たった一人でも十分な戦果を残せる騎士はあちこちの戦場で重宝される。
ジラードとシルバ。王国騎士の中でもアイリスと親交の深い二人が王都にいてくれた事は幸運だった。小隊の編成は順調に進んでいると言えるだろう。

しかし、あと一人。国王に許された三人の上限を満たす為にもあと一人の騎士が必要だった。
恐らく国王は王都に駐屯する騎士の数を把握していたに違いない。アイリスの他にちょうど三人。それ以上でも以下でもない。それが今日王都にいる騎士の数だ。
アイリスは三人目の王国騎士、ベルグ・ノースポールと会う事を考えて憂鬱な溜息をついた。
アイリスとベルグは決して仲が良いとはいえない関係だったのだ。
アルセオラリア城の資料室。魔術の術書が揃えられた一角で、アイリスとベルグは顔を合わせた。
ベルグは案の定、露骨に顔を歪めた。
「魔王討伐？　ふざけるなよ、アイリス・ヘリオトロープ」
ベルグは苛立ちも顕わにアイリスに詰め寄った。
「俺は明日ここを発つ事になっている。戦場へだ。ワーガナックの戦況は俺が行かない限り、厳しいものになるだろう。それを何だ？魔王討伐だと？」
大仰に手を振り、冗談も大概にしろとばかりにベルグは言った。
ベルグは千両役者と呼ばれている。武術だけでなく魔術にも精通しているので、あらゆる戦況に対応できるからだ。その実力は十人議会にも重宝されており、王国騎士の中でも一、二を争うほど多くの任務がベルグに任されている。
ベルグには自分の手柄にならない仕事は疎(うと)んじる傾向があった。議会には全く支持されず、半ば切捨てといった形で送り込まれるアイリスの任務に興味など持てるはずがなかった。
「これは国王陛下の勅令だ。騎士たる者、勅令は何よりも優先する任務じゃないのか？」
アイリスは小隊の隊長としての態度で、厳しくベルグに告げた。
ベルグも王国騎士だ。国王の勅令ならば従う義務がある。ベルグは忌々しげに溜息をついた。
「陛下の勅令を反故(ほご)にする事なんてしないさ」

ベルグは醒めた表情で言う。
「――ふん、随分と偉くなったものだな、『下っぱアイリス』」
ベルグの辛辣な皮肉に、アイリスは思わず目を見開いた。
「……それは、過去の話だ」
アイリスは顔を伏せた。
「確かにかつての私は未熟だった。下っぱと呼ばれ、雑用を押し付けられても文句は言えないほどにな」
アイリスはきっと顔を上げ、ベルグを強く睨みつけた。
「しかしもう、あの頃の私ではない。それはお前も分かっているだろう」
「かつてお前に散々足を引っ張られたことは事実だ。俺はその事を忘れはしないぞ」
アイリスは言い返すことができずに押し黙った。
王国騎士として同期だったアイリスとベルグは、新米の頃に何度も同じ任務を与えられた。その度、ベルグは未熟だったアイリスの尻拭いをしてきたのだ。能力のない見習いとしてのアイリスと、当初から実力を発揮していたベルグの二人は事あるたびに比較されてきた。アイリスは何度も惨めな思いを味わった。
見下されている事は分かっている。アイリスは苦い思いを噛み締めた。前騎士団長だった父親の名前だけで王国騎士に任命された新米時代、ベルグは私に複雑な思いを抱いていたはずだ。
私は確かに成長した。戦場でも他の騎士に劣る事無く戦えるようになり雑用係など押し付けられなくなっていた。
「お前がどう思っていようとも構わない。とにかく、お前の力が必要なんだ」
アイリスは改めてベルグに頼んだ。
「ちっ、分かったよ」
アイリスはベルグを見つめた。視線がベルグのそれと重なる。
「一緒に行ってやる。アイリス・ヘリオトロープ」
ベルグはそう言って、すぐにまた視線を逸らした。

「ああ、よろしく頼む。ベルグ」

「ふむ。老将軍に期待の新人、そして千両役者の揃い踏みか」

国王は満足そうに頷いた。

アイリス小隊の四人は謁見の間で整列して国王に出発の報告をしていた。それぞれすでに長旅の準備を整え、王国騎士の紋章である獅子が刻まれた装備品を身に纏っている。

「いいパーティーじゃないか、アイリス」

国王は隊長であるアイリスに親しげな笑顔を見せた。

「はい」

晴れ晴れとした面持ちでアイリスは国王に頭を下げた。

「良かろう、諸君。アイリス小隊の健闘を期待する。直ちに出発してくれ！」

「はっ！」

四人の声が謁見の間に響いた。

王暦三一三年四月十二日。アイリス小隊の魔王討伐への長い旅が始まった。

続く

第一章　第二話『やっと会えたな』（第二稿）

第一章　カシャワック・ミートアゲイン

第二話　やっと会えたな

1

オーランド大陸北東部にある元ローランス帝国領、トリトニア公国。かつての慎ましやかな小国の姿はすでに無く、現在では廃都トリトニアと呼ばれ、魔族の根城と化してしまっていた。

すでに人間の姿は何処にもなく、今となっては魔族の本拠地へと成り果てている。人の手が加えられなくなったかつての王城は毒々しい蔦に覆われ、美しい景観を保っていたはずの庭園は荒れ果てていた。城下の街並みも荒廃し、魔王に付き従う魔族達の乱雑な住処と化している。

十年前に突如現れた魔族が大陸全土にその存在を知らしめた事件がこのトリトニア公国の陥落だった。アルマニア王国とローランス帝国が南北に分かれて大陸の覇権を争っている中、降って湧いた第三勢力である。全くの未知の敵である魔族に対し、人民の多くは成す術も無く殺戮されていった。

トリトニアを手中に収めた魔族は周囲の都市へと侵攻を始めた。いまだその領土は僅かなものとはいえ、魔族はアルマニア王国とローランス帝国に十分に匹敵する戦力を誇っていた。

王暦三一三年四月十五日の今日。アルマニア王国の首都、王都アゲラタムから魔王討伐の任を受けたアイリス小隊が廃都トリトニアへと旅立った日。この日、廃都トリトニアでは魔族達の会議が行われていた。

旧トリトニア城、今では黒錆城と呼ばれる魔族の中枢。その会議室に魔軍の主だった面々が顔を並べている。

石造りの室内には重厚な大理石の円卓が置かれていた。その中央に置かれた蝋燭が暗闇に染まった会議室を照らし出している。円卓に椅子が六つ並んでいるが、この場にいる魔族は五人だけだ。一人分だけ空席がある。この場にいる五人ともう一人こそが、実質上の魔軍の首脳部である。

ここに居並ぶ者達の灰色の肌と白い髪は全ての魔族に共通する特徴である。魔族が人間とは違う種族である事は一目見るだけで明らかだ。

四天王の一人、七堂伽藍は腕を組んで椅子の上に踏ん反り返っている。中肉中背の体格だが、鍛え上げられた筋肉が麻で織られた衣服の上からでもはっきりと浮かび上がっている。

七堂の右隣に座っているのは同じく四天王の一人である大教春葉だ。この会議室における紅一点であり、四天王ただ一人の女性である。しなやかに伸びる細い手足は戦い慣れた四天王のそれには見えない。均整の取れた美しい体格は戦場に立つ戦士のものというよりは貴族の舞踏会に参加する貴婦人のものと言ったほうが通用するだろう。大教は瑞々（みずみず）しい唇にうっすらとした笑みを浮かべ、誰かが口を開くのを静かに待っている。

そして大教の右隣。一つ空いた席を越えて、猫背になってぐったりと机に両腕をついている老人は四天王の三人目、赤腹流木だ。灰色の肌に刻まれた皺は深く、すっかり下がった目尻からはどこか人の良さそうな印象を受ける。

この場にいる四天王はこの三人だけ。残りの一人は空席の主だ。他の椅子と比べて、一つだけ異様に大きな椅子である。それは空席の主が相当な巨体の持ち主である事を示していた。

赤腹の右隣に座っている長髪の美男子は、魔軍軍師である遺戒楠部だ。長い睫毛や高く筋の通った鼻。人間の女性すら虜にするであ

ろう美しさは男性的な力強さとは程遠い。
そして遺戒の右隣。微動だにせず泰然と座っている男こそ魔族の首魁、魔王天宮深円その人だった。何者も寄せ付けぬ凛とした覇気を周囲に纏い、見る者を威圧する鋭い眼光を放っている。
「報告を聞こう。戦況はどうなっている？」
天宮が静かに口を開いた。布を刃で裂くような声が会議室に響く。その場にいた全員が天宮へと意識を向けた。この場に天宮の機嫌を損なうような無謀な魔族はいない。
天宮の言葉を受けて、当然のように軍師の遺戒が口を開いた。
「うふふ。万事順調よ、天宮ちゃん」
遺戒が天宮にウインクをしながら甲高い声で告げた。魔王である天宮に軽々しい口を利けるのは魔族で遺戒ただ一人だけだ。四天王の七堂はうげえ、と口の中で悲鳴をあげる。
遺戒は肉体的な性別は男性だったが精神的には乙女である。いわゆるオカマだ。七堂にとっては生理的に受け付けない人種だった。
「道端はどうした？」
天宮はつまらなそうに遺戒を一瞥した後、ここにはいないもう一人の四天王の消息を尋ねた。
「ああ、それなら――」
七堂が素っ気無く手を挙げた。皆の注目が七堂に集まると、その威圧感に物怖じしたように七堂は肩をすくめた。
「今度はアルマニアの都市を襲うとか言ってましたよ？　ええっと、あれ。どこだっけ……」
道端の単独行動は今に始まった事ではない。本来ならば会議を欠席した罰が与えられるはずなのだが、道端はいつも確実な成果を挙げてから廃都に帰還してくる。その信頼があるから道端の単独行動はある程度許されているのだ。
「かいほー都市……。とかなんとか言っとったのう」
掠れた声で赤腹が呟いた。年老い萎びた指を顎に当てて、ぼんやりとした記憶を思い出そうとしている。赤腹が言った『かいほー』

は完全に『介抱』の発音だった。
「開放都市……。確か、カシャワックとか言ったかしら？」
赤腹の言葉を受けて、軍師の遺戒が都市の名を告げた。そのまま円卓の上に広げられた大陸図に身を乗り出す。アルマニア王国の領土を細い指でなぞっていき、オーランド大陸の南方に位置する一つの都市の上で指を止める。
「王都のすぐそばじゃない」
呆れたように紅一点の大教が洩らした。付き合いきれないと言いたげ眉をひそめている。
「開放都市カシャワック。アルマニアの王都アゲラタムから徒歩で三日の距離、ね」
遺戒が確認するように呟き、困った少女のように口元を尖らせた。七堂は思わず目を逸らした。どうにも受け付けないものがある。そして呟く。
「途中にある他の都市は無視っすか……？　豪快なんだか勇敢なんだか」
ぎしりと椅子を軋ませながら、七堂は背もたれに身を預けた。場所が場所なら軽く口笛でも吹いていたところだろう。
「馬鹿なだけよ」
大教が表情を全く変えずに七堂に重ねた。刺々しい声には怒りが滲み出ている。
「……道端ちゃんの馬鹿はいつもの事よ。そこが彼の魅力なんだけどね」
遺戒が大教に微笑みながら言った。同じ女性同士、友情めいたものを一方的に感じているのか、遺戒はしばしば大教に親しげな態度を見せる。大教は遺戒の笑顔に引きつった笑みを返した。
「今日は道端の暴走以外、報告すべき事は無いのう」
赤腹がぼそりと呟いた。
「――ならば」
道端について語り合っていた魔族達の間に、天宮の重い声が響い

た。全員の注意が天宮に向いた。身動き一つ取らぬまま天宮は続ける。
「ならば、何も異常は無いな」
魔王の一言は、道端の単独行動も含めての現在の魔族の状況を一言で説明していた。
遺戒はにこやかに微笑み、赤腹はゆっくりと頷いた。大教は退屈そうに溜息をつき、七堂は座ったまま伸びをした。
天宮は自分の言葉に誰も異論を挟まない事を確認してから静かに立ち上がり、定例会議の終了を示した。天宮は無言で会議室を立ち去り、その後を小走りで遺戒が追っていった。
残された三人の四天王は誰からともなく立ち上がった。そしてそれぞれの任務へと戻っていく。

2

漆喰(しっくい)で塗り固められた黄ばんだ壁と壁の間。乱雑に散らかったゴミの山の片隅で、リック・クロビスは相変わらず細く区切られた青空を眺めていた。リックは布団に包(くる)まり、まだ寒さの残る春の午前をぼんやりと過ごしていた。
今日は朝からローの姿が無かった。あの聾唖(ろうあ)の老人が姿を消すのはいつもの事なので気にはしていない。ローがいつも何をしているのか気になってはいるが、ローにも知られたくない事はあるのだろう。
リックはぼさぼさになった栗色の髪をごしごしと撫で回した。そして開いて見た自分の手はひどく汚れていた。前に髪を洗ってからどれだけ時間が経ったのだろうか。全く思い出せなかった。
リックは自分の汚らしい身なりを見回し、流石にこのままでいるのはまずいだろうと考えた。今日の食事の当ては無いが、リックはそれよりもまず身体を洗いに行く事にした。

布団を置いて立ち上がる。何一つ持ち出すものの無い家を見下ろしてから、リックは歩き出した。木箱や酒瓶に足を取られないように踏み越え、路地裏を抜け出していく。

開放都市カシャワックを東西に両断するように大きな川が流れている。アーケ川と呼ばれるその川は、そのまま大陸を南に流れて王都アゲラタムを通る桜川に合流して南海にまで注いでいた。

半時間ほどかかって、リックはようやくカシャワックの北にあるアーケ川の上流に辿り着いた。この辺りはカシャワックでも特に寂れた一角で、整理されていない土地に好き放題に木々が生えている。ここには人目につかない小さな支流があり、リックにとってはちょうどいい浴場となっていた。

リックは水面に足を踏み入れた。冬が過ぎたばかりで、ひんやりとした冷水が素肌に突き刺さる。何一つ濁りの無い水の中で砂利が舞い始めた。

足が水の冷たさに慣れるのを待ってから、リックはつぎはぎだらけの黄ばんだぼろきれを脱ぎ捨てた。その下から痩せ細ってはいるが引き締まっているリックの肉体が顕わになった。栄養が偏っているせいで吹き出物が無数にある。

リックは一度身震いをしてから、ぼろきれを水に浸して絞り上げた。絞り上げた襤褸を雑巾代わりにして、ごしごしと身体を擦り始める。

全身を洗い終えたリックは、水を吸い込んでずっしりと重くなったぼろきれを乾かす為、日光の当たる大き目の岩にぼろきれを広げた。水に濡れた肌が冷たい春風に震え上がるが、他に着る物がないので仕方が無い。リックは全裸のままぼろきれが乾くまで岩陰に身を休めることにした。風さえ当たらなければ耐えられない寒さではない。厳しい生活を続けてきたリックにとっては当たり前の習慣だった。

木々の間から小鳥の囀(さえず)りが聞こえる。さわさわと枝が重なる音がして、柔らかく流れる清流の音が耳に響く。静かな森の音楽がリッ

クに心地良い時間を与えてくれていた。それは何の変化もない路地裏では味わえない贅沢だった。
ゆっくりと太陽が昇っていく。
いつの間にか、リックはうつらうつらと舟を漕ぎ始めていた。

アイリス小隊は、廃都トリトニアまでの旅における最初の都市に辿り着いた。王都アゲラタムから三日の距離にある開放都市カシャワックである。
見上げるほどに高い外壁にぐるりと囲まれたカシャワックは、北東、北西、南東、南西の四つの門以外から出入りする術は無い。その頑丈な外壁はカシャワックが百年ほど前までアルマニア王国最大の刑務所だった頃の名残である。ただし、今では開放都市の呼び名の通り、四つの門の全てが四六時中開かれており関所も置かれていない。誰だろうと好きに出入りできるのだ。
アイリス小隊の四人と王都で雇った中年の雑用夫を合わせた五人は、南西の門を潜り抜けてカシャワックに入った。多種多様な人種が入り乱れる雑踏の中を、アイリス小隊は堂々と歩いて行く。アイリス小隊では二頭の荷馬に旅の荷物を背負わせてある。雑用夫と隊長であるアイリス・ヘリオトロープの手に曳かれた荷馬が、石畳に蹄の音を響かせていた。
「とりあえずカシャワックまで来たのはいいんじゃが、これからどうするんじゃ？」
道を歩きながらアイリス小隊の副隊長ジラード・ラウンデルがアイリスに尋ねた。
「ひとまずここで宿を取り、皆の身体を休めようと思っているんだが」
アイリスは首だけ振り向きながらジラードに答えた。その金髪が少し顔にかかる。
「ふむ。シルバはどう思う？」
ジラードは隣を歩く物静かな銀髪の少女、シルバ・ベルガモット

に話を振った。
シルバは静かな湖のような瞳でジラードを一瞥し、それからアイリスに向き直った。
「私は隊長に従います」
シルバは何の感情も感じさせない声で素っ気無く言い、視線を外に向けた。彼女の事を知らない者が聞けば険悪な言葉遣いなのかもしれないが、長く付き合いのあるアイリスにとっては慣れ親しんだ口調だった。
「若造はどうじゃ？」
ジラードは槍を背負った青年、ベルグ・ノースポールに意見を求めた。
「ふん、そう急ぐ旅でもあるまい。異論は無いさ」
好奇の目で一行を眺める民衆達を眺めながら、ベルグが言った。獅子の紋章が刻まれた白銀の鎧はそれだけで人目を引く。英雄的な存在である王国騎士が町を歩いているというだけで、多くの民は興奮を顕わにするのだ。
嘶(いなな)く荷馬の手綱を曳きながら、アイリスが皆に言う。
「分かった。今日はここの騎士団支部に泊めてもらおう」
そう言って、アイリスは青空を見上げた。眩しい陽光に目を細めながら、今が正午に近い時刻である事を確認する。
「一旦荷物を置いてからは自由行動にする。まあそうだな、夕餉(ゆうげ)までには戻っているように。あなたも自由に休んでくれて構わない」
これからの指示を出して、アイリスは隣で馬を曳く雑用夫にも頷いてみせた。雑用夫も騎士と同等の扱いである事を示したのだ。雑用夫はアイリスに深々と頭を下げた。
カシャワック騎士団支部の建物は一階が仕事場になっており、二階は完全に宿舎となっている。任務の度に大陸を移動する王国騎士が都市へ訪れる度に宿屋を探す手間を省く為、どこの騎士団支部でも騎士用の宿舎が用意されている。

ジラードは動き易い服装に身を包み、夜までの自由時間を満喫する事にした。
ジラードはアイリス小隊の最年長者として、アイリスとは別の形で皆の上に立たなくてはならないと考えていた。任務の事は隊長であるアイリスが仕切ればいいのだが、他の点――隊員の些細な悩みに応じる事や円滑な人間関係を生み出す事に関しては、自分が担わなくてはならないと心に決めていた。
ジラードが騎士団支部の一階のロビーに腰を下ろしたところで、シルバが二階から姿を現した。女性にしては飾り気の無い質素な服装だ。首から提げた銀のペンダント以外に装飾品の類は見当たらない。
「おお、シルバ。お主はこれからどうするんじゃい？」
細い糸目で柔らかく微笑みながらジラードは言った。
階段を降りきったシルバは音も無くジラードへと視線を向ける。
「偵察を兼ねて町を回ってきます」
何の感情も読み取れない事務的な口調でシルバが答えた。柔らかさなど微塵もない。敵意などは全く感じられないのだが、受け取りようによっては刺々しくも聞こえる口調だ。
「なんじゃい、熱心じゃのう。この町は初めてなのか？」
町の偵察をし、不測の事態に備えて地理を把握しておくのは騎士にとって重要な事だった。
「ええ」
シルバは質問に答え、夜の湖のような黒い瞳でジラードを見据えた。その瞳は何も訴えないし、伝えもしない。
ジラードは自分とシルバの間に分厚い壁がある事をまざまざと実感していた。彼女の心は頑(かたく)なに守られていて決して明かされる事は無い。二人の距離は遠く、シルバは決してジラードを近づけようとはしないだろう。
シルバの素っ気無い返事に、ジラードは会話を続ける糸口を見つけられなかった。会話が途切れた事を確認すると、シルバはジラー

ドに背を向けて騎士団支部の正面玄関へと歩き出した。
「それじゃ、気をつけてのう」
シルバの背中にジラードは声をかける。シルバはそれと分からないほど小さく頷き、そのまま外へと出ていった。
「――難しいのう」
ジラードは牛革のソファに深くもたれ掛かり、誰に言うでもなく呟いた。
どうにも会話が弾まない。今回の任務が始まってからシルバとは何度も会話を試みたが、その一つとして長続きした事は無かった。一見すると、シルバは人間嫌いか冷徹な人間に見られるかもしれない。それでも話を振ってみれば何かしら反応をしてみせ、質問をすれば必ず答えてくれる。彼女は他人を避けている訳ではないのだ。
「……悪い娘ではないんじゃがのう」
ジラードはぽつりと呟いた。全くの本音だった。
シルバは礼儀を知っているし、周囲に気を使ってもいる。なにより年長者を敬っている。その事が態度の節々から感じられるのだ。十八歳にしてはよくできた娘だ。
無理に距離を縮めようとしても、いい結果が生まれるとは限らない。ジラードは長年の経験からそう判断していた。シルバとは慌てる事無く時間を掛けて、ゆっくり打ち解けていこうと自分に言い聞かせた。
次に姿を現したのは千両役者のベルグだった。
ベルグの整った顔立ちと世間を斜に構える態度は、若い娘達には惹きつけられるものがあるだろう。その短く逆立つ髪は野性味を感じさせる。本人も知ってか知らずか、貴族の私服とも見える品のいい服装に身を包んでいた。町を歩けば一人や二人の女性が引っかかりそうな外見である。
ジラードはシルバと同じく、ベルグとも同じ任務に赴いた経験が無かった。だが、その評判は何度も耳に挟んでいる。アイリスと同期でありながら瞬く間に頭角を現し、現在では王国騎士団のエース

とも呼べる人物にまでなっている男だ。
「若造、これから何するつもりじゃい？」
ジラードはベルグに自然に声をかけた。
「なぜ老体に俺の予定を話さなくてはならないんだ？」
ベルグが年長者への敬意など微塵も感じさせない不遜な態度で答えた。
頬の筋肉が僅かに痙攣するのを感じながら、ジラードは笑みを見せた。
「ちょっとした世間話じゃよ。そう構えなさんな」
ふん、と傲慢に鼻で笑ったベルグは、面倒臭そうに口を開く。
「別に俺が何をしようと勝手だろう」
明らかに見下した態度だった。ジラードはともすると弾けそうになる怒りを押さえ込み、決して態度を崩さぬままに続けた。
「なんじゃ、色町に行くんではあるまいな？」
「ふざけるな」
茶化したジラードを冷たく睨みつけるベルグ。冗談の通じない男だと、ジラードは内心で溜息をついた。
「老体のくだらん世間話に付き合う暇などない。俺の時間を無駄にしてくれるな」
蔑むような目でジラードを一瞥した後、ベルグは身を翻して騎士団支部の扉に手をかけた。
「それじゃあのう」
ジラードがベルグの去り際に言い、扉は静かに閉められた。
「……嫌味な男じゃ」
木目の天井を見上げながら、ジラードは思わず洩らしていた。
シルバもベルグもどちらもまだまだ距離がある。アイリス小隊を真に纏め上げるには時間がかかる事だろう。アイリスにとっての初めての隊長任務は一筋縄ではいきそうにない。
「相変わらずだな」
不意にアイリスの声が聞こえた。

視線を移すと、階段の下で柱に手を掛けているアイリスの姿が映った。ベルグとの会話を途中から聞いていたのか、彼の態度に対して複雑な表情をしている。なによりジラードのぼやいた言葉を聞いてしまっている。明るい表情などできるはずもない。

「おう、アイリス。おったのか」

アイリスは鎧を脱ぎ捨て、小ざっぱりとした服装をしていた。地味な町娘といった感じの風体だが、腰に差した剣だけが浮いて見えている。首に巻いたスカーフと牛革のブーツ。所々に高級な品を纏っているが、全体のさり気無い印象を乱してはいない。人目を引くであろう剣を除けば、上手く町娘に溶け込めていると言えるだろう。

「あなたが小隊にいてくれてありがたく思う」

アイリスはジラードの向かいのソファに腰掛けながら言った。

「至らぬ点ばかりの私を見事に補佐してくれている」

それと分からぬほど僅かな弱気を含ませて、アイリスはジラードに微笑んだ。

「考えすぎじゃよ。儂はただ皆と親しくなれればいいと思っておるだけじゃ」

「そう言ってもらえると、少しは気が楽になる」

アイリスは自分の足元を見つめた。ジラードの前だけは隊長として虚勢を張る必要も無く、生身の姿で本音を洩らす事ができていた。

ジラードは暗い表情で俯(うつむ)くアイリスを眺めながら考える。王国騎士としてようやく一人前として認められ始めたばかりで、重大な責任を負う任務を任せられた重圧感。剣の腕前は王国騎士の誰もが認めるほどに磨きがかかったアイリスだったが、一つの任務のリーダーとして、部下を率いる隊長としての経験などは今までなかった。人には言えない悩みや不安など数多く抱え込んでいる事だろう。

自分が支えてやらずに誰がアイリスを支えてやれるというのだろう。

四年前、下っぱアイリスとして雑用係に埋もれかけていたアイリスが目の色を変えて熱心に訓練に打ち込み始めた姿を見てきた。他

の騎士達に蔑まれようとも挫ける事無く教えを請い続けた真摯(しんし)な姿を見てきた。何度も手助けをしてやり、稽古(けいこ)を重ねるたびに成長してきたアイリスの姿を見てきた。最早、実の娘ともいうべき感情を抱いているアイリスの門出(かどで)を喜びこそすれ不満に思う事などあるはずがない。

「なに、気にする事は無いわい」

言って、ジラードは親しげな笑顔で応じた。

「お主が隊長として恥じる事は何一つない。お主は立派に役目を果たしておる。儂がしているのは老人の勝手なおせっかいというものじゃ」

そこまで言ってから、がはははは、と高らかに笑ってみせる。

アイリスが小さく頬を綻(ほころ)ばせた。

「本当に感謝します、ジラード殿」

アイリスは口に出してから、自分が敬語を使ってしまったことに気付き、慌てて口に手を当てた。

「がはははは っ。隊長が部下に敬語を使ってどうする。まだまだ儂に頭が上がらんのう」

ジラードは晴れやかな気持ちで笑う。実にアイリスらしい。そんな真面目で実直な彼女だからこそ背中を預けるに足る。

ジラードに笑われたせいか、アイリスのふっくらとした唇が少し上を向いている。アイリスが機嫌を損ねた時に出す癖だ。本人は気付いていないが、数年の付き合いがあるジラードには慣れ親しんだものだった。

「どれ、折角じゃ。旅の無事を祈って教会にでも顔を出すか？」

こういう時は行動に限る。アイリスの機嫌を直す為、ジラードは大陸中のどの町にもある響導院(きょうどういん)の教会へと彼女を誘い出した。

「それはいい」

案の定、僅かに感じていた不機嫌を忘れたように表情を明るくしたアイリスは、親しげにジラードに微笑んでみせた。

3

滔々（とうとう）と流れる川の水音。心地よく流れるアーケ川のせせらぎの中に、リックは僅かな異音を感じ取った。何かが水の流れを乱している。ふわふわと浮遊していた意識が徐々に覚醒し始めていった。

気が付くと、優しい木漏れ日がリックを包み込んでいた。リックは自分が今何処にいるのかが分からずに、ぼうっと木々の枝葉を見上げ続けていた。

清流の心地よいリズムが耳を打つ。そこに時々混じる何かの跳ねる音。何度か瞬きを繰り返し、意識の枝が徐々に伸びていくのを実感する。

身体を洗いに来たつもりが、いつの間にか眠り込んでしまったらしい。まだ太陽がそれほど傾いていないから、長居してしまったわけでは無さそうだ。素肌の背中に触れる滑らかな岩肌から、リックは裸の身体を起こした。

身体はすっかり乾いている。それどころか、少しばかり冷え込んでもいる。すっかり萎縮（いしゅく）してしまった睾丸（こうがん）に眉を潜めながら、リックは当に乾ききっているだろうぼろきれを着ようと、岩陰から立ち上がってアーケ川へと向き直った。

頭上から覗く太陽が枝葉の間から瞬いた。

リックはそこにあった光景を見て、思わず息を呑んでしまった。

先ほどから聞こえていた何かが川の中で動く音。それは目の前にいる銀髪の少女――シルバが水浴びをしている音だったのだ。川の水面にきめ細やかな肌色が映えている。一糸纏わぬ裸体で、彼女は数時間前のリックと同じ様に水の中に身を沈めていたのだ。

すらりと伸びる手足。鍛えられ美しく引き締まった肢体。水滴に濡れて首筋に扇情的（せんじょうてき）に纏わりついた銀色の髪。まだ冷たい河水のせいか、控えめで小さな乳房の上で桃色の乳首が屹立（きつりつ）している。シル

バは突然現れた全裸の男に対して裸体を晒しながら、驚きのあまり身動きを止めてしまっていた。
裸の少年と裸の少女。立ち尽くした二人の間に時間が流れる。二人の視線が絡み合う。
我に返ったのはリックの方が先だった。目の前で起こっている状況を理解すると即座に首を回し、周囲へ視線を巡らす。
リックのぼろきれが広がっている岩から二、三歩離れた平らな岩の上に、シルバの持ち物であろう衣服や僅かな荷物が纏めて置いてあった。
絶好の機会。突然舞い降りた天恵だった。この機を逃せるはずがない。
シルバが動揺から立ち直っていない事を見て取ったリックは素早く身を翻(ひるがえ)し、シルバの荷物を勢いよく掴みとった。そのまま川から離れて距離を取る。
「待って……！」
リックの素早い動きを見て我に返ったシルバは、左手で胸元を隠しながら一歩踏み出した。水流の中で右足が鈍重に動く。シルバにとってあまりにも地の利が悪かった。シルバは身動きの取り辛い川の中に身を置いていて、対するリックは邪魔するものなどない岩場に位置しているのだ。
リックはシルバの衣服をばさりと広げ、そのまま袖を通した。質素だが上等な生地が荒れた素肌に心地良い。女性用の大きさだから多少はきついだろうと予期していたが、想像以上にリックの身体にフィットした。普通の男よりも自分の身長が低いせいなんじゃないかという暗い声を振り払いながら乱暴に着込む。
水をうるさく跳ね上げながら、シルバがこちらに向かってきた。もどかしそうに薄い唇を強く閉じている。シルバが川から上がる前に、リックは余裕の笑みを彼女に向けた。
「お前、胸小っちゃいんだな。男でも余裕で着れるぜ」
言い捨てたリックの言葉に、シルバは一瞬目を見開いた。表情は

ほとんど動いていないのに、心なしか眉の辺りに力が篭っているように見える。シルバのそんな様子を見て、してやったりといった調子でほくそ笑んだリックは、彼女の所持品を抱え込んで一目散に木々の間へ駆け出した。

「返して……！」

通り過ぎる木々の向こうから、縋(すが)るような悲痛な声が聞こえた。追いかけようにも裸のままでは躊躇(ちゅうちょ)してしまうのだろう。シルバの気配は近付く事無く遠のいていく。ちくりとした痛みを感じたものの、リックは唇を噛み締め、町の雑踏を目指して走り続けた。

今日の飯すら手に入らない日々だ。情けをかける余裕なんて無い。恨むのなら盗人のすぐ傍で水浴びをしてしまった自分の不注意さを恨んでくれよ。

誰かに言い聞かせるように口の中で呟いて、リックは息が切れるまで逃げ続けた。

頭が真っ白になっていた。王国騎士として考えられない失態だった。迂闊(うかつ)にも程がある。

シルバは首を振って水気を含んだ銀髪から水滴を飛ばした。やり場の無い感情を拳を強く握り締める事で堪える。柔らかな唇を噛み締めて襲いくる焦りや後悔を耐え忍ぶ。

駄目だ。それだけは駄目だ。何を奪われたって構わない。だけど――。

自分の裸体を見られた羞恥心(しゅうちしん)は無かった。そんな事を感じる余裕なんて無かった。

取り返さなくてはならない。――あの下品な泥棒男から。

全身から水を滴(したた)らせながら、シルバは今からどうするべきか頭を巡らせた。現実問題として、何か裸を隠すものが必要だった。いくら緊急事態とはいえ、町中を全裸で歩けるはずが無い。そんな事になれば即座に警備隊に捕らえられてしまうだろう。

ひんやりとした春風が流れて、シルバは小さく身震いをした。

「ぺきしっ」
シルバは思わずくしゃみをしてしまった。いくら天下の王国騎士といえど、このままでは遠からず風邪を引いてしまうだろう。
何か使える物は無いかと周囲を見回したところで、シルバの視線がリックの捨てていったぼろに止まった。乾燥して妙に固くなった黄ばんだ布切れ。シルバの口元がそれと分からぬほど微かに歪んだ。

つんと鼻につく臭いがして、ベルグは思わず眉をひそめた。
カシャワックの西地区に並ぶ商店街。ベルグはその中でも大きく構えられている魔術書店に足を運ぶ途中だった。王国魔術学院(アカデミー)から年中出版されている数多くの魔術書。個人によって大きく異なる魔力の性質に合わせて、一つの魔術に対して様々な術式が編み出され続けている。この時代の魔術師は自分でも扱える術式を求めて、多くの魔術書に触れる必要があったのだ。
ベルグはまばらな人波の中で臭いの発生源を発見した。不快な眼差しを向けると同時に、臭いの発生源が自分の見知っている人物だと気付いてしまった。見間違いかと瞬きをしてみても、そこにいる乞食同然の姿をしたシルバの無愛想な顔はそのままだった。
いつもより憮然とした表情のシルバは、小汚いぼろきれを身に纏っていた。一見すると、薄汚れた乞食かと見誤ってしまう。シルバから漂う饐(す)えた悪臭は思わず顔を背けたくなる類のものだった。
こちらが醒めた目線で眺めている事に気付いたらしく、シルバは一度逸らした目を渋々といった様子でこちらに向けてきた。
「なんだその格好は?」
ベルグはこれ見よがしに鼻を隠しながらシルバに近付いて尋ねた。
「服を盗まれました」
無機質な声でシルバが答える。
ベルグは顎に手を当てて、改めてシルバの全身を眺め回した。どう贔屓(ひいきめ)目に見てもひどい姿だ。そして、もう一度シルバの無表情に向き直って口を開く。

「無様だな」
「放っておいてください」
自分自身、顔をしかめたいであろう悪臭を堪えながら、シルバはベルグに背を向けて歩き出した。ベルグは次第に小さくなっていく乞食姿のシルバを見送る。周囲の人々が顔を歪めてシルバに道を空けていく光景を見て小さく鼻で笑ってみせた。

アイリスとジラードは嚮導院の教会から連れ立って外に出た。
嚮導院はオーランド大陸全土に、アルマニア王国とローランス帝国を問わず浸透している宗教だ。かつて人類の未来を予言したという聖女カーラ・イクセンテスが没した後、彼女の偉業を称えるために生まれた宗教団体である。聖女カーラが導いたという千年間の平和に感謝を捧げ、次の千年もまた平和であるように祈る事が嚮導院の理念である。
アイリスもジラードも敬虔（けいけん）な信者という訳ではない。嚮導院は当たり前のように民衆の文化に馴染んでいるのだ。アルマニア王国でもローランス帝国と同じように嚮導院を国教に指定している。大陸で暮らす人々は皆、聖女カーラに祈りを捧げているのだ。
「私の今日の行いが、次の千年の礎（いしずえ）になりますように」
熱心な信者が聖女に祈りを捧げている声を背中で聞きながら、アイリスは雑踏に小さな人だかりが出来ている事を発見した。教会の堅苦しい雰囲気に疲れたのか大口を開けて欠伸（あくび）しているジラードに、首を振って視線を促した。ジラードも人だかりに気付いたようで、細い糸目に薄っすらと光が宿った。
「剣呑（けんのん）じゃのう」
ジラードが呟く。アイリスはジラードに頷くと、その目に義憤の光を宿しながら風を切って歩き出した。ジラードは迷いなく歩き出したアイリスの後姿に苦笑いを浮かべながら追従する。
五、六人の柄の悪い男達に誰かが囲まれていた。ある程度近付いた所で、アイリスは囲まれている人間が小汚いぼろきれを纏ってい

る事に気付き、いつか見た少年の姿を思い出した。
まさか、こんなところで――。
咄嗟(とっさ)に湧き上がった感情も、次の一歩を踏み出すと同時に消え去った。
違った。あの少年ではなかった。それどころか、アイリス自身よく知っている人間だった。
「何をやっているんだ、シルバ……？」
突然割って入ってきたアイリスに、男達は呆気にとられたように視線を交わす。そしてその中央で黄ばんだぼろに身を包んだシルバが無表情のまま、静かにアイリスに向き直った。
アイリスは仲間の意外な姿に驚くと同時に、どこかで落胆する気持ちも感じていた。そもそもあの少年がまだ乞食の格好をしている保証なんてない。あの日の言葉どおり努力を続けているのなら、もっと真っ当な格好をしていてもおかしくないのだ。
「おいおい姉ちゃん、悪いが取り込み中なんだ」
一人の屈強な男が下卑(げび)た笑みを浮かべながらアイリスに言い寄った。頭一つ小さなアイリスを値踏みするような目付きで見下ろしている。アイリスの整った顔立ちに、にやにやと下心を顕わにしている。
「取り込み中？　大の男が寄って集(たか)って、一人の女性に何の用があるというんだ？」
アイリスは一切物怖じする事無く堂々と男を睨み返す。
アイリスの態度に一瞬目をぱちくりと瞬かせた男は、次の瞬間野太い声で下品な笑い声を響かせた。
「げへへへ、おう姉ちゃん、男が女に用があるっつったら、アレしかねえだろうがよ！」
男の力強い言葉に、周囲の男達も腹を揺らして笑い出す。
「ろくに働きもしねえ乞食なんぞ、どうしようが勝手だろう。いいじゃねえか。ほら、さっさと失せな、姉ちゃん」
何一つ恥じ入る事など無いように男が言い、面倒臭そうにアイリ

スに手を振った。少なくとも乞食以外の女には手を出さないという程度の低い分別があるのだろう。
決して許せるものではない。アイリスには許容できない卑劣な行為だ。その上、大切な部下を乞食と見誤った上、手を出そうというのだ。断じて許せる事では無い。
奥歯を強く噛み締めたアイリスが男達に一歩を踏み出すと同時に、一人の男の悲鳴が上がった。
「イタタタ……ッ！」
最も身体の大きい男が、後ろから音も無く忍び寄ったジラードに腕を掴まれ関節技を決められていた。ジラードはきどった調子でアイリスに笑みを見せた。アイリスはほうっと溜息をつく。残りの四人の男達が狼狽（ろうばい）して後ずさりする。
「よくやったジラード殿！　さあ、アルマニアの王国騎士を侮辱した罪、とくと味わわせてやろうじゃないか！」
王国騎士の名を聞いて男達の顔が真っ白になった。ジラードが捕まえている男を投げ倒し、アイリスが近くにいた男の腹に蹴りを入れた。騒動の中心に取り残されたシルバは、一人静かに立ち尽くしていた。
決着は瞬く間に着いた。とっくに戦意を喪失していた男達は、アイリスとジラードの勢いに怯み、負傷した仲間を抱え一目散に逃げ出したのだ。
荒事に興味を惹かれ、集まりかけていた群衆がアイリスとジラードに小さな喝采（かっさい）を送った。ジラードは暢気（のんき）に手を上げて群衆に応えていた。アイリスは自分達が目立ちすぎた事に気付くと、慌ただしくシルバを捕まえ、人通りの少ない物陰へと連れ込んだ。
一呼吸着いた所で、アイリスはジラードと共に改めてシルバの格好を検分した。仄（ほの）かに漂う不快な臭いを決して顔に出さぬように我慢する。シルバは問いただしげにアイリスを見つめていた。何をそんなに慌てているのかとでも言いたげだ。
アイリスは労わる様にシルバの両肩に手を置き、そこでシルバが

ぼろきれの下に何も纏(まと)っていない事に気付くと、はっと目を見開いた。
「シ、シルバ！」
勢いよく顔を上げたアイリスをシルバは怪訝そうに見つめ返した。その顔にはどこか儚げな色があって、アイリスはシルバが口に出さないものの、酷い事態に巻き込まれていた事を理解した。
「あ――……」
何かを言いかけたアイリスは続く言葉を失った。
「……隊長？」
暗い表情で押し黙ったアイリスを見かねて、シルバが声をかけた。アイリスは気を取り直し、シルバの目を優しく見つめ返す。ここで自分がしっかりしなければ、誰がシルバの傷を癒せるというのだろうか。
「シルバ。何も言わなくていい。お前の悔しさ、無念さ。――考えるだけで胸が張り裂けそうだ」
「え？」
「辛かったろう。嫌な思いをしただろう。でも聞いてくれ。私はお前の仲間であり友人であるつもりだ。私はいつだってお前の味方だ」
「はい……？」
シルバはアイリスの勢いに戸惑ったように相槌を打つ。
アイリスは純粋な瞳で自分を眺めるシルバの姿に、改めて胸を奮わせた。なぜシルバが酷い目に遭わなくてはならないのか。
「忘れろなんて軽々しい口は利けない。当事者でもない私が、知ったような口を叩けるはずがないからな」
アイリスは悔しそうに目を伏せ、拳を震わす。
「――何も言わなくていい。だがせめて教えてくれ、お前にこんな事をした男共を。直接落とし前をつけさせねば、どうにも収まりがつかん！」
強い怒りが身中から溢れ出すようだった。沸々と全身の血液が泡立つような苦痛だ。アイリスは大切な仲間を傷つけられて、そのま

ま済ませられる心根など持ち合わせていなかった。
「時として、人は報復に出ねばならぬ時がある。――今立ち上がらなくて、一体何の為の剣だというのか！」
言いながら、アイリスの興奮は絶頂に達した。今にも腰の剣を抜き放ち、不届き者を切り捨てに行かん勢いだ。
「隊長」
燃え上がるアイリスの下から、冷や水を浴びせたようなシルバの声がした。アイリスはかっと目を見開きながらシルバに向き直る。
「違います」
シルバが眉一つ動かさずに言った。
「え？」
意味が分からなかったので、アイリスは訊き返した。
「隊長が言っている事は違います」
シルバははっきりとした口調で言った。その目は不思議と強い光を宿しているように見えた。
「……どういう事だ？」
呆然と呟いたアイリスを見かねてか、先ほどから少し離れて様子を見ていたジラードが声をかけてくる。
「お主の早合点（はやがてん）じゃよ、アイリス」
溜息混じりにジラードがアイリスの肩に手を置く。アイリスが全く解せないといった表情でジラードに振り返る。
「お主が勝手に勘違いして、頭の中で勝手に話を大げさにしていただけじゃよ。――のう、シルバ？」
シルバが我が意を得たりとばかりに頷く。ほれ見た事か、とジラードがアイリスに苦笑して見せた。
「ええ？」
アイリスがあんぐりと口を開けてたじろいだ。急に視線があちこちに泳ぎ出す。そしてばつが悪そうに頬を掻きながら、シルバに向き直った。
「ええっと、……私はまた先走ってしまったのか？」

シルバがこくりと頷く。それを見て、アイリスは深々と溜息をついた。人の話を最後まで聞かず思い立ったら即行動に移す。今まで何度も周囲に迷惑をかけてきた自分の性質が心底嫌になってくる。

「すまなかった、シルバ」

アイリスは申し訳なさで肩を落としながら言った。シルバはちらりとジラードを一瞥し、ジラードが笑い出すのを堪えている姿を確認する。ジラードはシルバと目が合うと、にやりと苦笑してみせた。

「それで、いったいどうしてそんな格好をしておるんじゃ？」

落ち込んだアイリスを置いて、ジラードが改めてシルバに尋ねた。

「泥棒に盗まれました」

そう言ってから、シルバは事の顛末（てんまつ）を言葉少なに語った。

アーケ川で水浴びをしていたら、突如現れた裸の男に全ての荷物を奪われた事。仕方ないから裸の男が残したのであろうぼろきれを着こんで、一旦騎士団支部に戻ろうとしていた事。

話を聞くうちに、アイリスの表情は再び力強いものへと変わっていった。シルバが話を終えると同時に、怒りを新たにしたアイリスが呟く。

「王国騎士に盗みを働くとはいい度胸だ……」

アイリスは拳をぐっと握り締めた。そしてシルバとジラードに向かい、隊長としての態度で叫ぶ。

「身の程知らずの盗人を捕まえるぞ！　王国騎士に楯（たてつ）突いた愚かさを教えてやる！」

ジラードはやれやれと呟きながら頷き、普段ならあまり積極的でないはずのシルバでさえ力強く頷いた。二人の反応を見て、アイリスは改めて胸に沸き立つ熱意を強くする。

アイリスはこれからの行動方針を決める為、二人に騎士団支部に戻るように鼻息を荒くしながら指示をした。

4

アイリス小隊が自分を捕まえる為の作戦を練っている事など露知らず、リックは意気揚々とカシャワックの中央地区の表通りを歩いていた。

手ごろな石段を見つけ、リックは腰を下ろした。行き交う人々の間で誰に憚(はばか)る事無く堂々とシルバの荷物を検分する。

小さな巾着(きんちゃく)から出てきたのは銀のペンダントだった。これといった意匠の無い、売り払ったとしても二束三文の価値もないような代物だ。リックはペンダントを手に取り、じっと見つめる。頭のどこかがこのペンダントに反応していた。直感ともいえる不思議な感覚が、このペンダントがただの安物でない事を知らせていた。しかしそれがどういう事なのか、はっきりとは分からない。

結局、考えても分からなかったので、リックはペンダントをそのまま巾着に戻した。他に金目の物が無いか漁ってみる。

そして百ロッド銀貨を六枚、千ロッド金貨を二枚発見した。巾着の奥深い所に仕舞いこまれていたのだ。これだけあれば数ヶ月は食い繋ぐことができる。堪えきれず、リックの口元に笑みが浮かんだ。

リックは石段から立ち上がった。三日間まともな食事を取っていない腹が心地よい空腹音を響かせる。いつもなら煩(わずら)わしいだけの空腹感だが、今は笑って楽しめる余裕がある。リックは今日の幸運に感謝して盛大な食事を取ろうと歩き出した。

雑多に並ぶ建物の間を通り、人通りの少ない道を足取りも軽く歩いていく。リックが角を曲がった所で、どんと何者かの肩とぶつかってしまった。リックは勢い良く尻餅をついた。

「よう、乞食野郎ォ」

リックは舌打ちを堪えながら、今ぶつかってきた男を見上げる。

「ジョネス――」

日陰となっている路地裏で、リックを堂々と見下ろしている巨漢ジョネス。逆立つ髪、剃り落とされた眉。ジョネスはカシャワックでも評判の悪い悪童だ。ジョネスの背後に追従するように二人の男

が立っている。
　ジョネス達は乞食のリックと違い、屋根のある家に暮らす一般的な市民である。リックのようにその日の暮らしに困ることはない。退屈な日常の合間に、ちょっとした刺激を求めて小さな悪事を繰り返しているだけの若者達である。
　リックはぎりと奥歯を噛み締めた。地についた手を砂ごと強く握り締める。
「おう、珍しく人間様の格好をしてるじゃないか。そりゃいったい何の冗談だ？」
　薄汚れた歯を覗かせながら、ジョネスが高々と哄笑する。背後の二人もにやにやとジョネスに合わせて笑っている。
　リックは立ち上がろうと腰を浮かした。しかしその瞬間、ジョネスの蹴りが飛んできた。リックは頭から地面に叩きつけられる。
「苛々するんだよなぁ……。お前みたいな小汚ねえ乞食が俺達と同じ空気を吸ってるってのが」
　ジョネスはそのままリックの髪を掴んで立ち上がらせる。ジョネスの屈強な腕によって小柄なリックが子供のように扱われている。ジョネスはそのままリックの腹を殴りつけた。
　殴られた勢いでリックはよろよろと後ずさった。リックは苦痛を堪えながら、鋭い目付きでジョネスを睨みつける。肩で呼吸をしながら、それでも臆する事無くジョネスに対峙している。
「その目がうぜえんだよッ！」
　ジョネスが言い放ち、そして暴行が始まった。抵抗しないリックを掴み、殴り、蹴りつける。取り巻きの二人も加わってリックをひたすらに痛めつける。四年前から何一つ変わらない残虐な仕打ちだった。
「おい、コイツ金持ってやがるぜ！」
　取り巻きの一人がリックの巾着を奪ってジョネスに言った。取り出した金貨をこれ見よがしに見せびらかしている。
　リックは頭を地面に押し付けられながら激しく抵抗した。アーケ

川で出会った少女の悲痛な声が脳裏に蘇ったのだ。
――返して……！
「それはやめろ！　俺のじゃないんだ！」
「――黙れよ」
ジョネスがリックの背中に踵（かかと）を落とした。衝撃が骨に響き、リックは口から唾を吐き散らした。
「どうせまたスリでもしたんだろうが。なにイイ子ぶってんだよ」
頭上から吐き捨てられる侮蔑の言葉。何も言い返せない悔しさにリックは歯噛みした。
ジョネスがリックの背中にどしんと腰を下ろした。屈強な肉体が勢い良く圧し掛かり、リックは苦痛に顔を歪める。
「どれ、見せてみろ」
「ほら」
取り巻きから渡された巾着を、ジョネスはしげしげと眺め回した。
「ふん、今回は上手く盗めたみたいじゃないか。どうせその服も、盗んだ金で買ったんだろうが」
ジョネスが巾着から中身を振り落とし、金貨や銀貨が地面に散らばる。目の前に散らばったそれらを見て、リックはもがき出した。
ジョネスは空になった巾着を放り投げ、転がった硬貨を拾い上げ始めた。当然のようにそれらを懐に収めていく。
「ん、なんだこりゃ？」
ジョネスが呟いたのは、手に持った銀のペンダントに対してだ。巾着から硬貨と一緒にこぼれ落ちたらしい。リックはそのペンダントを見て呼吸を荒げた。
「返せッ！」
必死の形相で訴えるリックを見て、ジョネスは歪んだ笑みを浮かべた。
「なんだ乞食、お前これが欲しいのかぁ？」
ジョネスはリックの目前で、ぶらぶらとペンダントを揺らしてみせる。

リックはかっと目を見開いた。
背中に圧し掛かるジョネスの巨体から、リックは無理矢理転がって抜け出した。思わずバランスを崩したジョネスが、腰を浮かしながら後ずさった。
「返せって言ってんだよッ！」
全身に傷を負い、痣を作り、土に薄汚れたリックが吼えた。一瞬たじろいだジョネスだったが次の瞬間、陰湿な笑みを顔一杯に広げた。
「そう来なくっちゃなぁ、乞食野郎ォ！」
ペンダントに向かって飛び掛ってくるリックを見据え、ジョネスは楽しげに拳を構えた。

着替えを終えたシルバが騎士団支部の一階に降りてきた。
「来たなシルバ」
アイリスがシルバに頷き、そして机の上に広げられたカシャワック全体の地図に視線を移した。
「これから盗人を捕まえる為の作戦会議を始める」
「ベルグはどうするんじゃ？」
ジラードがアイリスに尋ねた。
「彼には後で伝令を出す。召集する時間すら惜しいのでな」
アイリスは毅然と告げた。その目が地図から離れる事は無い。
「まずはカシャワックの警備隊に協力を頼もう」
アルマニア王国では王国軍とは別に警備隊と言う組織が作られている。その実体は王国軍の下部組織と言うべきもので、外敵の戦いの為に鍛えられている軍とは違い、警備隊は各都市の治安維持を主眼に置いた組織である。
「警備隊の連中が協力してくれるかのう？」
「話してみなくては分からないだろう」
そう言って、アイリスはカシャワックの地図を指差した。
「とにかく出口を封鎖する事だ。ここは開放都市の呼び名の通り、

全ての門が開かれているからな。少なくともそれだけは警備隊にやらせなくてはならない」
カシャワックに存在する北東、北西、南東、南西の四つの門。かつて刑務所だった頃の名残である四つの門さえ封鎖すれば、カシャワックから脱出できる者は一人もいなくなるのだ。
「門さえ閉じればあとはこちらの領分だ。シルバの服を着ているという忌々しい盗人を追い詰め、確実に捕縛する。場合によっては武器の使用も仕方ない」
アイリスはジラードとシルバに目を向ける。
「この盗人を断じて許すな。二度と悪さのできぬよう徹底的に懲らしめるぞ！」
シルバはアイリスの言葉に小さくこくりと頷いた。

カシャワックの北東地区。レンガ造りの三階建てのカシャワック警備隊本部で、アイリスは警備隊長のブランキッドと面会していた。ブランキッドは警備兵の制服にでっぷり突き出た腹を抱えて、脂ぎった額を向けてアイリスに笑みを浮かべていた。
「いやはや、まさか王国騎士様がこちらにいらっしゃるとは思いませんで……」
隊長室で上等なソファに座り、アイリスとブランキッドは向かい合っている。ブランキッドの部下に差し出された茶は手をつけられる事無く、机の上で湯気を立てていた。ブランキッドが部下に無理矢理用意させた高級な茶だ。
「用件に入ろう」
アイリスは素っ気無く告げた。ブランキッドのあからさまに卑屈（ひくつ）な態度が鼻について仕方なかった。
「カシャワックの全ての門を、我々が賊を捕らえるまで封鎖していただきたい」
ブランキッドの笑みが一瞬固まった。しかし、次の瞬間にはまた従順な笑みを浮かべる。

「いやあ、それは少々――。なにせ、カシャワックの経済は四六時中流れ込んでくるよその商人達のおかげで成り立っている様なものですから」
確かにブランキッドの言う事も一理ある。たかが盗人一人の為に、都市全体の利益を損なうような真似はできない。アイリスは腹立たしさを覚えながら考えを巡らせた。
「ならばせめて門番に賊を見張らせてもらいたい。人相書きは後で用意させる」
ブランキッドはソファに深く身を沈めた。にこやかな笑みは顔面に張り付いたままだ。
「ふぅむ。……まあ、その程度ならできなくもないでしょう。かしこまりました。王国騎士様のおっしゃるように手配させます」
「ああ、よろしく頼む」
言って、腰を浮かせかけたアイリスだったが、微動だにしないブランキッドを見て眉を潜めた。ブランキッドは慇懃な笑みを見せながら口を開く。
「それでですね、王国騎士様。少しばかりですね、お心づけをいただけはしないでしょうか？」
「なんだと？」
ブランキッドの不遜な物言いに、アイリスは態度を荒げた。ブランキッドは額に浮き出た汗を拭き取りながら取り繕う。
「いやいや、勘違いなさらないでください。何も私服を肥やそうとしてるのではありません。日々の仕事とは別に見張りをさせられる下の兵達に何も報酬を出さないのでは、警備隊長として心苦しいのです。とはいえ、彼等に給金を支払うほど経済的に余裕がありませんでして」
そこまで言って、ブランキッドはアイリスの機嫌を伺うようにへりくだった笑みを見せた。アイリスとて現場の兵達にただ働きをさせるのは心苦しい。この警備隊長は気に食わないが、その感情を下の兵達に押し付けるのはお門違いというものだろう。

「ああ、いいだろう」
アイリスは兵達の報酬に見合うだけの金貨をブランキッドに渡した。
「まことにありがとうございます。これで兵達も奮起するというものです」
ブランキッドの粘ついた粘液のような笑顔に閉口しながら、アイリスは口を開く。
「それでは見張りの件、よろしく頼む」
「ええ、ええ。お任せください」
ブランキッドが腰を低くしながら答える。
アイリスは複雑な思いを感じながら、警備隊本部を後にした。
一人残ったブランキッドは、アイリスから受け取った金貨を何食わぬ顔で懐に納めた。

リックは散らかったゴミの上で、ゆっくりと身を起こした。
ジョネス達に殴りかかり、そして返り討ちに叩きのめされてからどれほど時間が経ったのだろうか。
「ちくしょう……」
いつもの事だ。ジョネス達に出くわすたび、いつだって叩きのめされてきた。初めの頃は抵抗していた。それなりに健闘し、誰かに怪我を負わせる事はできていた。しかしその度、自分の身体は傷だらけになっていた。割に合わないと思った。どれだけ努力して抵抗しても何かを得る事無く傷ついていくだけだった。
どうせ勝てないのだから、初めから戦わないほうがいい。
そう考えるようになったのは、それほど最近の事ではない。いつからかジョネス達に絡まれても殴り返すことをしなくなっていた。向こうの気が済むまで殴らせてそれで終わり。傷だらけになるとはいっても、以前よりは遥かにましになった。
傷は少なくなったのに痛みは変わらなかった。その理由は分からない。どこが痛むのかも分からない。それでも、これが正しい生き

方なんだと自分に言い聞かせて今日までやってきた。
それなのにこの様だ。
何事も欲張ってはいけない。今更になって、ずっと昔に聞いた父親の言葉が蘇る。いつもそこで失敗するのだ。
欲しがるほど、願うほど、失った時の痛みは大きくなる。
強く握り締めていた右手を開く。そこには何も残っていなかった。ペンダントの形がくっきりと残るほど、強く握り締めていたというのに。
なぜ何の価値もないペンダントを守ろうとしたのか分からない。あれだけはジョネス達に奪われてはならないと思ったのだ。それでも結局、奪い返す事はできなかった。
「悪かった」
リックはここにはいない少女に言った。本心からの言葉だった。
痛みに顔をしかめながらリックは立ち上がった。服についた土を手で払って落とす。
何も持たない乞食のリックが、路地裏を静かに歩き出す。ふらふらと危なげな足取りで、それでも倒れる事無くまっすぐに。

路地裏から表通りに出ると、リックは午後の眩しい日差しに目を細めた。多くの人々が通りを行き交い、賑やかな活気を生み出していた。その中を時折、兵士が慌ただしく駆け抜けていく姿が目に入ってくる。何かあったのだろうか。どことなく物々しい雰囲気だ。
「これが賊の人相ですか？」
ふと兵士達の会話が耳に入ってきた。リックからは良く見えないが、二人の兵士が何者かに向かって質問しているようだ。
「そう」
素っ気無い事務的な声が兵士に答えた。その声はどこかで聞いたような気がしないでもない。
「ええっと――」
一人の兵士が辺りを見渡し、ちょうどこちらに視線を向けると、

リックを指差しながら誰かに尋ねた。
「あんな感じの人相ですか？」
もう一人の兵士が人相書きを眺めながら、リックと見比べてうんうんと頷いている。よほど人相書きと似ているのだろうか。
そしてもう一人、先ほどから兵士達に何事かを指示していた人物ははっとしたような表情を見せて――。
「うわっ！」
リックは気付くと同時に駆け出していた。周囲の目線など気にせず、形振り構わず走っていく。勢い良く走っていくリックを、周囲の人々は目を丸くして見送っていった。
「待って！」
背後から追いかけてくる声。呆然と立ち尽くす兵士達を置いてリックを追い始めたのは他ならぬシルバだった。シルバはちょうど警備隊の兵士達にリックを捕まえる為の指示を出していたところだったのだ。
リックは必死に逃げていく。
速い。ただの女とは思えないほどの俊足で、シルバはリックとの距離を縮めていた。リックは必死になってシルバから逃げようとする。
先ほどまで感じていたシルバへの申し訳なさなど微塵も残っていない。ここで捕まるわけにはいかないという思いだけが今のリックを支配していた。
人混みの中を突っ切って狭い道を曲がっていく。今まで何度も走りぬけた逃走経路だ。リックは確実に追っ手を撒ける自信があった。自分が持つ地の利だけを信頼し、リックはカシャワックの町中を疾走した。
リックはシルバが何者であるか全く分からなかった。考える余裕もなかった。警備隊の兵士達に命令を出せるような身分。頭の中に残るシルバの裸の映像がぼやける。ひょっとして自分はとんでもない相手から盗みを働いてしまったのではないかと後悔の念が湧き上

がってくる。
　リックは軽く息を切らしながら立ち止まって背後を振り返った。もうシルバの気配は無かった。この町の地理に精通していなければ追って来れないような道筋を辿ってきたのだ。誰であろうと追いつけるはずがない。
「おっと」
　後ろを見ながら歩いていたせいで、前方にいた誰かとぶつかってしまった。リックは驚きながら、その人物の顔を見る。
「なんじゃい、まるで誰かに追われてるような顔じゃな」
　そこにいた白髪の老人――アイリス小隊の副隊長ジラードの風格に、リックは思わず息を呑んだ。
　人の良さそうな細目に、余裕のある態度。それでいて、凄まじい貫禄があった。何者だろうとも彼に歯向かう事など許されない、他を圧倒する威圧感だ。
「放っといてくれ」
　リックはかろうじて声を押し出した。そのままジラードから逃げるように歩き出す。
「そういう訳にはいかんのじゃ」
　ぽんとリックの肩にジラードの手が置かれた。分厚い皮に覆われた力強い手が、リックの肩を威圧する。ただ軽く乗せているだけなのに、もう一歩も身動きできなくなるような力がその手にはあった。
「お主、いい服を着とるのう。儂のよく知っている人間と同じ服じゃよ」
　血の気がさあっと引いていった。
　ばれている。なぜかは知らないが、このジジイは俺が盗みをしたことを知っている。
　リックはごくりと唾を飲み込み、そして大地を蹴った。
「あ、こら！」
　ジラードの制止に耳を貸すことなく、リックは一目散に逃げ出した。

咄嗟の判断だった。
冷や汗が首筋を伝う。
あの老人から今まで触れた事のない圧倒的な重圧を感じたのだ。
あのままあの場にいたら簡単に捕まってしまっていただろう。
リックは迫りくる追手の気配に焦りながら、狭い路地を駆け抜け、壁をよじ登った。必死に這い進みながら、壁を蹴って小屋の屋根を飛び越え、また地上に足をつける。やがて表通りに面する路地裏に辿り着いた。
完全にジラードを振り切ったと確信して安堵の溜息をついたところで、リックは身も凍るような視線を感じた。
人々が群がる昼下がりの商店街。行き交う人々の誰一人として路地裏に立つリックに気付いていない。だというのに、リックは鼓動が早まっていくのを感じた。
殺気だ。どこかから自分に向けて放たれている明確な殺意を感じる。
リックは恐る恐る視線を巡らせた。
露天商が旅人らしき男に宝石を見せびらかせていた。三人の夫人が花壇のそばで立ち話をしていた。二人の少年が楽しそうに笑いながら通りを駆け抜けていった。どこにも異常なところはない。リックは視線を移していく。
そして、その男と視線が交わった。
ぞくりと全身の毛が逆立った。
喫茶店の椅子に悠々と腰掛け、本を机の上に広げている短髪の男。すらりとした細面に、冷酷そうな鋭い目付き。アイリス小隊の一人、ベルグがリックを睨みつけているのだ。
リックに対して、特に怒りや怨みを感じているわけではなさそうだ。その憮然とした態度から、この捕り物に興味を持っていないことは明らかだった。ただし、自分が担当する領域に踏み込んでくる気なら容赦はしないと、ベルグは無言で語っていた。
リックは追い詰められた鼠（ねずみ）の気分を味わった。

この路地裏から一歩でも表通りに踏み出せば、喫茶店の男が自分を捕まえに動き出すだろう。かといって、このまま引き返しても先ほどの老人と鉢合わせになるかもしれない。
それでも、一旦戻るしかない。まだ逃げ道が完全に絶たれた訳ではないのだ。
リックは観念して、ベルグに背を向けた。
次の瞬間、路地の反対側に凄まじい怒気を感じて、リックは目を見開いた。通りの反対側からシルバが静かに姿を現したのだ。その顔は全く怒っていない。それなのに遥かに離れた距離からでも感じることのできる怒気を発していた。シルバは一歩一歩、ゆっくりと近付いてくる。
「嘘だろ」
リックは身の危険を感じて、慌てて周囲を見回した。そしてすぐそばの家の脇にある木箱を足がかりにして屋根の縁に手をかけ、身体を屋根の上に押し上げる。
「来たな、盗人」
屋根に這い上がったリックの頭上から、凛と響く声が聞こえた。
顔を上げたリックの目の前に、胸の前で堂々と腕を組んだ金髪の女性――アイリスが目が眩むほどの逆光の中で立ち塞がっていた。正面から照りつける太陽の眩しさにリックは思わず目を背けた。
「……っ！」
アイリスは一瞬、驚いたように小さく口を開いた。
しかし次の瞬間には口元を引き締め、厳然とした表情でリックを睨みつける。アイリスは一歩も動き出さぬままリックの行動を観察していた。
リックはすぐに状況を判断し、背後から飛び降りようと顔を下に向けた。しかし、すでにそこにはシルバが居て、リックを冷たく見上げていた。とてもじゃないが降りることができない。
なんなんだこいつらは。いったい何者なんだ。
八方ふさがりだった。背後は銀髪の少女、表通りには短髪の青年。

老人だってもうじきこの屋根の下に駆けつけることだろう。そして正面には――。
「さあ、どうした。もう逃げ場は無いぞ？」
金髪を太陽に煌(きらめ)かせて、アイリスが笑みを浮かべた。アイリスは腕を組んだまま、リックが必死に逃げ道を探す様子をじっと見据えていたのだ。
リックは覚悟を決めた。
正面突破だ。目の前の女さえどうにかすれば、屋根伝いにいくらでも逃げられる。
「アンタ、何者だ？」
リックは腰を落とし、何があろうと反応できるように身構えながらアイリスに尋ねた。
「人に名前を尋ねる時は、まず自分から先に名乗るべきだ」
アイリスが太陽の中に立ったまま呟いた。違和感を覚え、リックは思わず眉をひそめた。
まさか――。
「――お前の名前を聞かせてもらおう！」
微動だにしないまま、アイリスが威を発した。
既視感。そんな言葉では片付けられないほど強烈な記憶が押し寄せた。
忘れられるはずのない、かつての出会い。
驚きに目を見張ったリックを捨て置き、アイリスはそのまま言い重ねる。
「答えられぬならそれでいい！　どうせ名もない小物だろう！」
屋根の上にアイリスの声が響き渡った。
アイリスが一歩踏み出した。リックは動揺を隠し切れぬまま、ただ立ち尽くすことしかできなかった。
そうだ、アンタの名前は――。
「我が名はアイリス・ヘリオトロープ。アルマニアの王国騎士だ！」
リックは静かに目を閉じた。思考が巡る。感情が沈む。一歩一歩

迫ってくるアイリスの気配を感じ取る。
ふざけるなよ。いまさら何で――。
形容しがたい感情がリックの胸の奥底に湧きあがってきた。
とっくに忘れていたのに。とっくに諦めていたのに。なんで今になって――。
冷たい水が血管にゆっくりと流れていく感覚。
静かな怒りが満ちていく。やり場の無かった感情が形になって現れ始める。
次に目を開いた時、リックは全力で駆け出した。向かってくるアイリスの真正面に迷うことなく飛び込んでいく。
「騎士がなんだってんだ！」
叫びながら、リックはアイリスに向かって拳を振るった。
アイリスは一瞬だけ悲しげに目を伏せてから、軽く身をかわした。リックの拳は虚しく宙を切った。そのまますれ違い様にアイリスの蹴りがリックに放たれ、鈍い音が屋根の上に鳴り響いた。
「ぐうっ」
「――遅い」
膝をついたリックに向かってアイリスが冷徹に告げた。今の一撃で終わりだとでも言いたげに、肩の力を抜いてこちらを見下ろしている。王国騎士のアイリスからすれば、子供のお遊戯のように粗末な戦いだったのだろう。
リックは歯を食いしばって全身の痛みを堪えていた。
認めない。俺は断じて認めない。
騎士（アンタ）に負けるのはいいだろう。もともと敵（かな）う相手じゃない。だけど、それでも――。
一発だけでもぶん殴らなくては気が済まない。このまま無様には終われない。
「まだだッ！」
リックは飛び起き、アイリスに向かっていった。自分でも理解できない激しい感情を込めて彼女を睨みつけながら。

そんなリックを見て、アイリスはにやりと笑みを浮かべた。
「ただの乞食にしては良い気概だ！」
アイリスは褒めるように言い、向かってきたリックに冷徹な一撃を放った。リックはアイリスの拳を頬に受けて宙を舞い、屋根の上に勢いよく叩きつけられた。
今度こそ倒れ、立ち上がる気力さえ奪われたリックはアイリスに掴み起こされた。
「王国騎士から盗みを働いた罪、きっちり償わせてやる」
リックは薄れていく視界の中で、アイリスの金髪が揺れるのを見ていた。アイリスが小さく溜息をついたのが微かに聞こえた。
とうとう捕まってしまった。長い間、逃げ続けてきたというのに。
「――――――」
何かが聞こえた。沈んでいく意識の中では意味を成さない音の連続。
やがてリックの思考は完全に闇の中に落ちていった。

続く

第一章　第三話『私は行かなきゃならないんだ』（第二稿）

第一章　カシャワック・ミートアゲイン

第三話　私は行かなきゃならないんだ

1

空は朱色に染まっていて、木々の落とす影が長々と伸びていた。カシャワックからおよそ二十キロ北東の平野で、息を切らしながら身体を休めている兵士達の大軍があった。多くの兵の顔には玉のような汗が浮かび、その大半は大地に倒れこんでいる。

灰色の肌と白い髪。彼等こそオーランド大陸を脅かす未知の勢力、魔族であった。

「道端隊長、少しペースが速すぎたようです」

息一つ切らさず平然な顔のまま、細身の長身と知的な相貌をした男、山門蚕（やまかどかいこ）が口を開いた。彼は無理な速度で行軍を続けた隊長の方針をやんわりとたしなめた。

「あぁ？」

その山門に覆いかぶさるほどの巨体がのっそりと振り返った。

三メートルはあろうかという突き抜けた肉体。子供の胴体はあろうかという太い腕回り。その巨大さは魔族の中でも特異な存在である。

この男こそが魔軍四天王の一人である道端蝗（みちはたいなご）である。アルマニア王国の都市カシャワックを攻め落とす為に、魔軍の前線基地から二週間以上走り続けてきたのだ。付き合わされた部下達はたまったものではなかった。

「隊長、馬鹿みたいに突っ走るからなあ」

そう言って、苔石蜻蛉（こけいしとんぼ）はあっけらかんと笑い出した。子供のような小柄な身体だが、苔石は道端に部隊を一つ任されるほどの実力を持っている。
「おうおうなんでえ、カイコ、トンボ――。てめえら俺の采配に文句でもあんのかよ」
道端の地響きのような野太い声が響いた。
「――やはり、大陸の北から南まで走って移動するのは無謀じゃないかと」
「走りでもしねえと、赤腹のジジイにかけてもらったステルスが消えちまうじゃねえか！」
道端は同じく四天王の一人、赤腹の名前を出した。
赤腹は四天王一の魔術師である。赤腹の使用する魔術は多種多様に渡り、隠蔽魔術（ステルス）もその一つである。大軍であればあるほどその集団が放つ魔力は大きく、同じ魔術師に察知されやすい。ステルスは個人が放つ魔力を魔力で覆い、外から察知する事を不可能にする高等魔術である。魔族はこのステルスのお陰で、アルマニア王国やローランス帝国の都市に接近し、その多くを陥落させることができたのだ。
「だからさ、選んだ都市が俺達の領土から遠すぎたんだってば」
苔石が欠伸をしながら道端に言う。
「うるっせえなあ。過ぎた事がたがた言ってんじゃねえよ！」
そう言いながらも、道端自身省みるところがあるのだろう。うーむと唸りこんで乱暴に腰を下ろした。
「――やはり、適当に投げたダーツが刺さった都市を攻めていくというのは無計画じゃないかと」
山門が呟いた。
「細けえ事気にしてんじゃねえよ！　今までずっとダーツで決めた都市を落としてきたんだ。今度だって上手く行くに決まってる！」
「……だといいんだけどねえ！」
苔石が楽しそうに言う。一切不安を感じていないようだ。

道端はふん、と大きく踏ん反り返ってから、背後でへばっている部下達に怒鳴り声を上げた。
「ようし、野郎共！　メシだ！　明日の戦いに備えて腹いっぱい食いやがれ！」
おお、と弱々しい声が響き、道端の部下達はのろのろと動き出した。

2

リック・クロビスは夢を見ていた。
懐かしい少女の笑い声がした。今となっては顔すら思い出せない、初恋の少女の笑い声だ。あれからどれほどの月日が流れたのだろう。
暗く沈んだ意識の中で、いつかの懐かしい日々が蘇る。
それはもう過去のことだから。二度と戻れない場所だから。
だから胸が張り裂けそうになる。
「なぜこの乞食をわざわざここに連れてきた？　警備隊に任せればいいだろうが」
「聞きたいことがあるんだ」
ベルグ・ノースポールが忌々しげに舌打ちし、アイリス・ヘリオトロープがやれやれと言いたげに溜息をついた。
どこかから聞こえた二人のやりとりに導かれるように、リックはゆっくりと意識を取り戻していった。
視界が捉えたのは暗闇を照らす蝋燭（ろうそく）の火だ。ゆらゆらと明かりが揺れている。ここはカシャワック騎士団支部のほとんど使われていない一室だった。石造りの壁の中で、リックは腕を縛られて椅子に座らされているのだ。
アイリスとベルグは壁を背にしてリックの前に立っていた。今この部屋にいるのはこの三人だけだった。
「気付いたか」

アイリスが目を開いたリックを見下ろしながら言った。
ふん、と鼻を鳴らしながらベルグが部屋から出ていった。リックの事など全く興味がないような態度だった。事実そうなのだろう。
残されたアイリスは石の壁から背を離し、リックの目の前に近付いてきた。リックは灯火によって揺れるアイリスの顔を忌々しげに睨み付けていた。
「俺をどうするつもりだ」
吐き捨てるような口調でリックは尋ねた。
「どうするも何も、後で警備隊に突き出すさ。王国法に照らせば窃盗罪は禁固三日以上の罪だからな。罰はきっちりと受けてもらう」
アイリスは意地悪な笑みを浮かべながらリックに言った。
リックはむっつりと口を閉じ、せめてもの意地を見せている。リックはどのような形であれ、自分の敗北を口に出すつもりは無かった。
「その前に色々聞きたいんだが、いいか？」
アイリスが少しだけ親しげな口調で尋ねたがリックは何も答えない。アイリスはふっと細い溜息をつき、口を開いた。
「私はアイリス。……お前の名前は？」
口元だけに笑みを浮かべて、アイリスがリックを見つめる。すでに一度名乗った名前を再び名乗ったのは、ただ単純に人に名前を聞くときには自分の名前を名乗るべきと言う信条に則(のっと)っての事だろう。
「……リック。リック・クロビスだ」
リックは仕方なく答えた。不思議と名乗らなければならない気がした。
「そうか、リック。――良い名だ」
アイリスが大切なものを噛み締めるように静かに目を閉じ、微笑んだ。それはとても罪人の男に向ける表情ではなかった。掛け替えのない、親しい友人に向ける暖かい笑顔だった。リックは自分の心臓がとくんと脈を打ったのを感じた。
「リック、反省しているか？」

ゆっくりと目を開いたアイリスが、諭すような口調で言った。
「反省？　何をだよ」
「盗みだよ。私の部下の所持品から服まで見事に盗んでくれたじゃないか」
リックの胸にちくりと針が刺さった。それを表に出す事無く、リックは表情を固くする。
「ああ、それがどうした」
リックはつまらなそうに相槌を打った。
リックの気の無い返事に、アイリスはすっと目を細めた。リックはそのまま言葉を重ねていく。
「お偉い騎士様には分からないだろうがな。俺達みたいなのは、盗れる時に盗らなきゃ生きていけねえんだよ」
切実な身の上。当たり前のように身に染みた乞食の日常だ。この町の乞食達にとって食べたい時に食べる事ができる生活なんて夢のような話だ。食べる為なら、どんなに手が汚れようとも構わない。
「そうか」
アイリスは興味が無さそうに口を開いた。その類の話は聞きなれているのだろう。身分の高い王国騎士は賤（いや）しい身分の者達に妬まれる事が多い。
「小さい人間だな、お前は」
アイリスは醒めた表情で言った。
かっとリックの頭に血が昇った。
「そうさ、俺は小さい人間だよ！　何の価値もねえ小汚ねえ乞食だよ！　それがどうしたってんだよ！」
リックは声を荒げながら叫んだ。
アイリスは眉一つ動かさないまま、黙ってリックの言葉を聞いていた。そして淡々と口を開く。
「それが分かっていてなぜ変わろうとしない。現状に甘んじ妥協しているだけでお前は満足なのか？」
傷口に勢いよく刃物を突き刺されたかのような痛み。容赦なく内

側まで入り込み、深い場所まで抉(えぐ)っていく言葉。時として、真っ当すぎる正論は残酷な武器となる。リックは歯を食いしばった。
妥協している？　誰が。俺がか？　ふざけるな。アンタに何が分かるって言うんだ。
アンタは雨の痛さを知っているのか。アンタは土を食べた事があるのか。アンタは――。
「いちいちうぜんだよ！　なんだ、なんなんだよ。乞食で何が悪いッ！　アンタみたいに恵まれてる人間ばっかじゃねえんだよ、世の中ってのはッ！」
勝手に言葉が口をついて出た。
アイリスの表情は動かない。全く動かない。
「――世の中は変わらなくとも、お前は変わるだろうが」
そしてアイリスは静かに言った。
リックは何も言い返さない。熱くなった頭が冷や水を浴びせられたように停止した。
「……逃げるな、リック」
アイリスはリックを強く見据えた。リックは思わず顔を伏せた。とてもまっすぐにアイリスの瞳を見ていられなかった。
やがてアイリスの細い溜息が聞こえた。
「少し待ってろ。シルバを連れてくる」
アイリスはそれだけ言い残し、リックに背を向けた。
「シルバって誰だよ？」
「お前が盗みを働いた相手だ」
リックの脳裏にシルバの姿が甦った。銀髪の少女。背中に響いた悲痛な声。
リックが黙り込んだ姿をちらと見やってから、アイリスは部屋から出ていった。
「ペンダントは？」
シルバ・ベルガモットは開口一番、リックに尋ねた。

シルバは部屋の中に一歩踏み込んだだけで、それ以上リックに近寄ろうともしなかった。石造りの小さな部屋の中で、蝋燭の明かりにシルバの整った顔立ちが揺れていた。

「――ねえよ。見て分かれよ」

リックは反抗的に答えた。先ほどのアイリスとの会話から嫌な気分が続いている。もやもやしたと感情が消える事無く残っていた。

シルバが音も無く近付いてきた。暗い部屋の中で二人の距離が狭まっていく。

「どこにやったの？」

シルバが椅子に座らされているリックを見下ろしながら尋ねた。

路地裏でジョネスに蹴られた腹がずきりと痛んだ。掴みそこなった右手の感覚が甦る。

奪われた。守ろうとしたのに守れなかった。

シルバは恨めしげに、それでも何かを期待するような目でリックを見つめていた。リックはまっすぐに目を合わす事ができなかった。

「売っ払った」

なぜかリックは嘘をついた。

突然、ぱんと甲高い音が部屋の中に響き渡った。

遅れてやってきた頬の痛みで、リックは自分がびんたされた事に気がついた。リックは驚きながらシルバを見上げる。

シルバは振り払った右手をそのままに立ち尽くしていた。気のせいなのかと錯覚しそうなほどほんの僅かに、シルバの目には薄っすらとした光が宿っていた。

「――返して」

冷たい表情のままシルバが言った。

「だから、もう無いって」

シルバがきっと顔を上げ、リックを睨みつけた。射抜くような眼差しだ。

リックは何も言う事ができなかった。

アイリスに感じたものとは違う、染み入るような痛みがリック

の胸に広がった。
　しばらく無言の時間が続いた後、シルバは部屋から出ていった。リックはその背中を呆然と見送る事しかできなかった。
　シルバと入れ違い様にアイリスが戻ってきた。すれ違ったシルバの顔をちらりと見てから、リックの傍に近付いてくる。リックはアイリスの顔を見ようともしなかった。
「反省してるか？」
「――まあな」
　リックはアイリスの微かな笑みを見なかった。アイリスはふっと溜息をつき、王国騎士としての態度で口を開いた。
「これからお前を警備隊に引き渡しにいく。さあ、立て」

　アイリスは両腕を縄で縛られたままのリックと連れ立って騎士団支部の外に出た。
　すでに日は落ち、暗い夜空が広がっていた。無数の輝く星々の下、アイリスとリックは付かず離れずの距離で歩いていく。夜は静かだった。時折酒場から漏れ聞こえる騒ぎ声もどこか遠くに霞んでいて、それもやがて聞こえなくなった。この世界には　アイリスとリックの二人しかいないのではないかと錯覚するほどの静寂だ。
　カシャワックの西側にある円形の広場を通り抜け、都市を東西に両断するアーケ川に差し掛かる。アイリスとリックはカシャワックに二つしかない橋の一つ、ハラン橋を渡っていった。昼間リックが水浴びをした支流とは違い、この流域のアーケ川は広くて深い。対岸まで十メートル前後の幅があり、橋を渡るか小船を利用するかしない限りは渡る事ができなかった。
　ハラン橋から見下ろす夜のアーケ川。柔らかい水面にまんまるの満月が写りこんでいる。
「かつて私は、騎士よりも騎士らしい少年に会ったんだ」
　ほんの微かな月明かりの下、アイリスはぽつりと口を開いた。
「へえ、そいつはよかったな」

リックは素知らぬ顔で相槌を打った。その声は闇夜に虚しく吸い込まれていく。
静寂。
アイリスはゆっくりと足を止める。つられて背後のリックも足を止めた。ハラン橋の中央で、リックとアイリスは視線を合わす事無く立ち止まっていた。
「……お前は、自分が変わってしまったと思うことは無いか？」
決して振り返ろうとしないまま、アイリスはリックに尋ねた。
答えを聞きたくもあるし、聞きたくもなかった。
ひんやりとした夜風が流れた。川面を滑る冷気がリックの表情をも凍らせていく。
「そういうアンタはどうなんだよ？」
「え？」
アイリスはゆっくりとリックに振り返った。思いがけないリックの言葉に、僅かに目を見開いている。
「アンタは自分が変わったと思っているのか？」
アイリスの口が小さく開かれた。吐息が僅かに漏れる。
「私は――」
アイリスは取り繕うように言いかけ、そして言葉を切った。
私は変わったはずだ。
変わろうと決めた四年前のあの日から努力を続けた。確かな実力をつけたという自信はあるし、周囲にもそれが受け入れられたという自負がある。
それでも、自分が最も認めてもらいたかった相手から見たら――。その為に努力してきたと言っても過言でもない相手から見たら――。
私に夢を思い出させてくれたあの日の少年（リック）から見たら――。
変わっていないのか、私は？
私はあの日の『下っぱアイリス』のままだというのか？
体内の血が急速に固まっていく感覚。隠し切れない動揺を、それでも矜持（きょうじ）で隠し通した。

「……私は、変わったと思っている」
「そうかよ」
リックはつまらない冗談を聞かされでもしたかのような表情で言った。
アイリスは更に言いかけ、しかし何も言えずに頭(かぶり)を振った。
「――行くぞ」
それだけ言って、アイリスは再び橋の上を歩き出した。

カシャワック警備隊の本部はアーケ川を東に渡ってすぐ右手にある。アイリスにとっては昼間、リック捕獲の為に協力を求めに来て以来二度目の訪問になる。
夜勤の兵に事情を説明すると、快くアイリスの用件を受け入れてくれた。そもそも昼間の捕り物は警備隊全体に広まっている。王国騎士に手を出して、その恨みを買った哀れな盗人の話は今日一番のニュースなのである。
所定の手続きを省略し、リックはそのまま窃盗罪で拘置所に入れられる事になった。王国騎士には一定の警察権が認められていて、罪人の捕縛や処罰もその権限に含まれている。王国騎士が罪人だと言えば、一切の議論の余地も無くその人物は罪人なのである。王国騎士のお墨付きならば、警備隊は無駄な調査を要する事も無く罰を与える事ができるのだ。
当直の兵士はアイリスに敬礼をし、リックの身柄を預かった。
アイリスは複雑な表情でリックから背を向けた。リックは最後までアイリスと視線を合わそうとしなかった。アイリスは沈んだ表情のままで警備隊本部から出ていった。
再びハラン橋を渡っていく。来た時と違い、アイリスの背中には誰も居ない。静かな夜のアーケ川がアイリスの横顔を川面に写していた。
リックは自分がかつて出会った見習い騎士だとは気付いていたのだろうか。

そう思った時、リックの言葉が蘇った。
――アンタは自分が変わったと思っているのか？
気付いている。気付いているはずだ。さもなければあんな言葉は口にできない。
自分がどうしたいのか。自分がどう思っているのかが分からず、アイリスは拳をぐっと握り締めた。
もやもやとしたものが胸のうちに渦巻いている。
大事な何かを置いてきてしまったかのような、そんな感覚だ。
取り戻すことは今更手遅れで、もう諦めるしかない忘れ物。
もう二度と会う事もないだろう、旅の途上で偶然再会したかつての恩人。
あの日の逞しい姿はすでになく、ただの盗人に成り下がっていた少年。時間の流れの現実と哀しさを改めて実感する。四年の月日があの少年から熱意を奪ったのだ。
アイリスはリックがあの日から騎士を目指して努力を続けているのだと思い込んできた。アイリスは新たな騎士が任命される度、期待をしながらその顔を確認しに行っていた。私はお前の夢に恥じない騎士になったぞと、胸を張ってあの少年に言ってやろうと考えていた。きっともう、そんな事をする必要もなくなるのだろう。
少し哀しい、一つの時代の終わり。
勝手に期待して、勝手に失望して――。された方からしたらとんだ迷惑だったのかもしれない。
「私はまた、先走っていたのかな……？」
誰に向けているのかも分からぬアイリスの言葉は、夜風に乗って宙に消えていった。

牢屋は半分だけ地下になっていて、内側から見ると天井付近にある窓がちょうど地面の高さにあった。冷え込む石の床の上で、リックは小さな鉄格子から覗く月を見上げていた。
何をする事もない。何をしようとも思わない。

リックには今日一日に起こった多くの出来事が、現実とはかけ離れた夢のように思えていた。
二度と会う事はないだろうと思っていたアイリスとの再会。自分は乞食で彼女は騎士で。境遇は四年前のあの日と変わっていないはずなのに、今は何かが大きく違っていた。
――お前は、自分が変わってしまったと思うことは無いか？
ハラン橋の上でアイリスが発した言葉が蘇る。
違う。俺は変わったんじゃない。
ただ疲れ果てただけなんだ。
リックは簡素な寝台に腰掛けながら目を閉じる。今日一日酷使した肉体が気だるい疲労感に沈んでいく。
アイリスは自分があの日の乞食だと気付いているのだろうか。
馬鹿みたいに自分の夢を口にした世間知らずのお子様の事を、アイリスは今でも覚えているのだろうか。
騎士になる。昔はそんな無謀な夢を誰憚（はばか）る事無く口にしていた。
時が流れて現実を知った。現実を思い知らされた。
騎士になる前に飯を食わなくてはならない。訓練する前に飯を探さなくてはならない。何かを得ようとしてもほとんど何も得られなかった。やがては諦めきれぬ夢すら捨てた。夢見る時間が惜しいから。変わらぬ日々が虚しくなるから。
欲しがるほど、願うほど、失った時の痛みは大きくなるから。
アイリスとはもう二度と会う事もないだろう。葬り去ったいつかの夢が、気紛れにひょいと顔を覗かせただけだ。
俺の前にはとてつもなく高い壁がある。どうあがいても手の届かない高い縁。たまたま偶然、その壁の上に立つアイリスの姿が見えた。それだけの事なんだ。
リックは身動き一つしないまま、足の間の床を見つめる。
俺には届かぬ高みはどうだ？　そこから見える景色はどうだよ？
胸が痛い。痺れた指先から痒みが大きくなっていくのと同じ感覚だ。

忘れよう。
今日起こった一連の出来事は二度と起こらない幻のような出来事だ。王国騎士と関わる事なんて、今後一切起こりえない事だろう。だから何も考えなくていいし、何も感じなくていい。明日からまた灰色の日々が続いていくだけだ。
「おい、飯だ」
看守の声で我に返ったリックは、囚人用のささやかな食事を鉄格子の隙間から受け取る。看守は細い階段を昇って一階へと姿を消した。
長い一日の果て、ようやくありつける食事だ。今日は身体を動かしすぎたせいでいつも以上に腹が減っている。
リックは文字通り臭い飯を、貪(むさぼ)るように口に運んでいく。
雑巾を食べているかのような不味さも乞食のリックにとっては慣れたものだ。胃袋は抵抗する事無く豆のスープを飲み込んでいった。
カシャワックの夜はゆっくりと更けていく。

3

リックは夢を見ていた。
これが夢だということは分かっていた。
今よりもさらに頭一つ分小さかった頃の記憶だ。
リックはジョネス達に暴行を受けていた。ジョネスには昔から暴力を振るわれてきたのだが、この時が初めてだったはずだ。
この日は理不尽な理由で絡まれた。自分にはまるで非のない事を責められたのだ。ジョネスはただ弱者をいたぶって楽しみたかったのだろう。
必死の抵抗をしても、成す術もなく地面に叩き伏せられた。
リックは口の中に砂の味を感じながら、悔しげに歯を食いしばった。この時の砂と血の混じった味を今でもはっきりと覚えている。

負けたくないし、負けられなかった。
それでも拳が上がらない。殴り返す力が残っていない。
そこに、救世主が現れた。
「――お前の名前を聞かせてもらおう！」
太陽が瞬（またた）く。建物と建物の間から一瞬だけ光が強く放たれる。
リックは振り返った。
艶（つや）のある金髪に、陶磁（とうじ）のような白い肌。威風堂々（いふうどうどう）と胸を張り、一人の女性が腕を組んでそこに立っていた。
リックは息をするのを忘れていた。
忘れる事なんてあるはずがない。
この時、自分が見た光景をリックは一生覚えているだろう。
「我が名はアイリス・ヘリオトロープ。アルマニアの王国騎士だ！」
リックの夢が目の前に現れたのだ。
意識が暗くなっていく。
いつからか、見なくなっていた夢だ。
記憶が乱れて、今日起こった出来事が重なる。
屋根の上で、あっけなく叩きのめされた自分の姿。
繰り返されるいつかの言葉。
そこに立っていた騎士の姿。
リックは自分の意識がゆっくりと溶けていき、宙に散っていくのを感じた。

4

翌朝。カシャワックは深い霧に包まれていた。
遠く霞む景色を見ながら、一人の魔術師が精神を集中して遠方までの魔力の流れを探っていた。彼はカシャワック警備隊本部に出向している王国魔術学院（アカデミー）の王国魔術師だ。
魔術師は欠伸（あくび）を噛み堪えながら、勤務時間が終わるのを今か今か

と待ち受けていた。深夜から早朝までを担当している事もあり、彼は眠気に負けそうになっていた。
どうせ何も起こらないんだ。そんなに頑張る事じゃないよな。魔術師はぼんやりと考える。
実際、アルマニア王国の王都アゲラタムから三日の距離にあるカシャワックは、ローランス帝国や魔族の領土からは遠く離れていた。王都の近くと言うだけあって徘徊する魔物の数も少ない。ほとんど危険の無い地域なのだ。
だから魔術師の危険意識も低い。仮にカシャワックに危険が迫るのだとしても、それはもっと北の都市などが攻め落とされてからの事になるだろう。
朝日が真っ白な霧を照らしていく。深い霧に沈んだカシャワックの街並みはどこか幻想的な風景にも見えた。
遠くに迫る道端達の足音に気付く事無く、魔術師はぼんやりと時を過ごしていった。

朝が昼に変わる頃、カシャワックの北東商店街は徐々に活気付いていた。カシャワックの外から商品を運んできた貿易商人や、魔物退治に赴く冒険者が北東門を行き来している。買い物に赴いたはずの主婦達は井戸端会議を始めていた。小遣い稼ぎの為、通りの清掃をしている子供達の姿もある。この時間、カシャワックの北東商店街は数多くの人間が行き交っていた。
戦乱の時代とは言え、住民達に危機感は無かった。一度として戦火に見舞われた事がないカシャワックは、ある意味では油断と慢心に満ちていた。安心と余裕と言い換えてもいい。それは多くの人々の尽力によって平和が維持されてきた結果である。
春の陽気に誘われて小鳥達の囀(さえず)りが響く。遠くから子供達の笑い声が聞こえていた。人々の顔には笑顔があり、爽やかな空気が通りを流れていた。
昨日までと変わる事のない日常が続いていくと、誰もが信じきっ

ていた。
平穏は轟音で打ち破られた。
霞む霧の中から、突如地響きのような音が迫ってきた。その音に気付いた人々は思わず眉をひそめた。何が起こっているのか分からない、不安な空気が周囲に満ちた。
北東門を管理している二人の警備兵が顔を見合わせた。
四六時中開かれているカシャワックの門だったが門番は当然配置されている。関所を持たない為、主に罪人の出入りを警戒するのが門番の役割だった。
カシャワックから北東、霧の向こうから不審な物音は近付いてきていた。
「なんだろうな。お前、本部に報告してこい」
「わかりました」
一人の警備兵が警備隊本部に報告する為、駆け出していった。
十分ほど、気が気では無い時間が流れた。残された警備兵は白い霧の向こうに目を凝らしながら相棒が帰ってくるのを待った。何が起こっているのか全く把握できなかった。
徐々に轟音が近付いてくる。振り返ると、市場に並べられた商品が小刻みに震えだしている。
警備兵はごくりと唾を飲み込んだ。
さらに轟音は近付いてくる。確実にカシャワックに向かってそれらは迫っていた。
相棒はまだ戻ってこないのか――。
明らかな異常事態に警備兵は緊張していた。
次の瞬間、霧の中から、ぬっと大きな影が姿を現した。
「来たぞぉ、カシャワックぅっ！」
耳を劈(つんざ)かんばかりの雄叫びが響いた。
現れたのは見上げるほどに巨大な魔族、道端だった。まるで目の前に山岳がそびえ立っているかのようだった。
筋骨隆々とした灰色の肉体と突き出るように逆立つ白い髪。厳つ

い顔は女子供を泣かせるのに十分な迫力だ。しかし道端はぜえぜえと肩で呼吸をしていて、その迫力は若干低下していた。
額に汗を浮かべながら、道端は呼吸を落ち着けようとしている。表情には、相当な量の運動をこなしてきた後の疲労感がありありと表れていた。
それもそのはず、二十キロ以上の距離を朝から走りぬいてきたのだ。その疲労は隠しきれるものではない。
「――嘘だろ」
警備兵は信じられないように呟いた。
戦場とは無縁だったカシャワックに魔族が現れる事など誰も想定していなかった。
思い浮かぶのは伝え聞いた魔族による惨劇の数々。自分とは縁の無いと思っていた僻地での戦い。
北東門の異常事態に気付いた市民達が、様々な反応を見せはじめた。悲鳴を上げる者、真っ青になって腰を抜かす者。やがて我先にと逃げ出しはじめた市民達の群れで、北東商店街は混乱の渦に巻き込まれた。逃げ出していく市民達をちらりと見ながら、警備兵は退く事もできずに道端から後ずさった。
「さすがに――はぁ――遠かったな」
息も絶え絶えに道端は呟く。天を仰ぎながら、一仕事終えた達成感を噛み締めているかのようだった。
道端はゆっくりと周囲を見回して警備兵の姿を認めると、石畳を踏み砕きながら一直線に詰め寄ってきた。
「さあ、戦争だ。一つ、お手柔らかによろしくなァ！」
「……な！」
道端は警備兵の頭を掴み、そのまま宙に持ち上げた。警備兵の足は地に届かない。理不尽な浮遊感に恐怖がいや増す。
「どうだ、ここの軍隊は？　それなりに楽しませてくれるんだろうな？」
無理だ。警備兵の頭には絶望しかなかった。

勝てるはずが無い。そもそも外敵と戦わないことを前提としている警備隊では魔族との戦いなんて勝てるはずが無かった。その上、カシャワックに王国軍が救援に駆けつけるにはどれだけ急いでも二日はかかる。現状の戦力ではとてもじゃないがカシャワックを守りきれない。

そこでふと、昨日起こった些細な捕り物騒動が警備兵の脳裏に甦った。

警備兵は道端の太い腕で宙に持ち上げられながらも、にやりとした笑みを浮かべた。死の恐怖を前にして浮かべられる表情ではない。道端はほう、っと少しばかり感心した。

「期待していろ、魔族。――この都市には王国騎士がいる。お前らが束になってかかろうと返り討ちにしてくれるだろうアルマニア最強の精鋭がな！」

「そうかい」

道端はふん、という鼻息と共に、掴んだ右手を握り締めた。

柔らかい音がして、血飛沫が舞った。支えを失った警備兵の肉体が地面に落下する。

道端は血に塗れた右手を振り払うと、カシャワックの町並みを睥睨（へいげい）した。

道端よりも遅れていた魔族の兵達の足音が、カシャワックの北東門に迫ってきていた。

「行くぞ、野郎共ォ！」

おお、と猛々しい雄叫びが霧の中から返ってきた。

これより先、戦いが始まる。

「魔族の侵攻だと？」

カシャワック警備隊隊長、ブランキッドは伝令の報告に耳を疑った。

「はい、北東門の門番が報告してきました」

カシャワック警備隊本部の隊長室。牛革のソファにゆったりと身

を沈めながら、ブランキッドは溜息をついた。
「なぜ事前に察知できなかった！」
「魔術警戒網に一切反応しませんでした」
「ええい、救援は？　王国軍への伝令を出せ」
「すでに何人か走らせましたが、少なくとも報告が届くまでに一日、更に援軍が駆けつけるまで二日以上かかります」
「なんだと？」
ブランキッドは頭を抱えた。警備隊は魔族の軍相手に戦えるような部隊ではない。だというのに、警備隊だけで魔族と戦わなくてはならないのだ。
「――敵の規模は？」
「王国魔術師の報告によりますと、およ三百です。その後続に長く伸びた隊列が七百ほど続いているそうです。カシャワックの目前に突然魔力の反応が現れたようです」
「千騎の浸透突破か……！」
魔族の軍隊が人間に気付かれぬまま神出鬼没に現れる事は、一部の人間には有名な話だった。人間には無い未知の技術を用いて、魔族は敵陣の懐まで何の苦も無く辿り着くのだ。
「ブランキッド隊長、指示を」
ブランキッドは冷静に考える。仮にも警備隊の隊長にまで登り詰めた男だ。決して無能な人間ではない。かといって有能な人間でもない。
千の敵に対して警備隊の人員は五百ほどしかいない。ただでさえ精強な魔族に対し、人数ですら負けている。正面からぶつかっても勝機など無いだろう。戦いの経験など皆無に等しい警備隊には数字上の不利を引っ繰り返す手段などなかった。
「これは勝てぬ戦いだ」
ブランキッドはゆっくりと立ち上がり、窓まで歩いていく。
「――警備隊の資金を集めておけ」
ブランキッドは脂ぎった顔を副官に向けながら、小さく笑みを浮

かべた。

「アイリス、早く起きんか！」

ジラードの怒鳴り声で、アイリスは目を覚ました。

見覚えの無い天井が見える。自分がどこにいるのか分からない。背中が妙にごつごつとした硬い物に触れている。

ゆっくりと感覚が甦っていく。

アイリスはのっそりと起き上がった。髪の毛は四方に跳ねていて、目蓋（まぶた）が半分しか開いていない。不思議なことにアイリスはベッドではなく、床で眠っていた。どうりで背中が少し痛むわけだと納得する。

「ほれ、さっさと起きて仕度せんか！　敵襲じゃ！」

敵襲と言う言葉にアイリスは瞬時に反応した。呆れ顔で彼女を見下ろしているジラードに向けた表情は、すでに隊長のそれだった。

「状況を報告しろ」

アイリスは鎧を着込みながらジラードに尋ねた。

「カシャワック北東門に魔族の部隊が出現しおった。魔術師の計測によると、敵戦力はおよそ三百。だが、後続も控えておるらしい。全部合わせると千ほどじゃ」

「北東――」

アイリスは頭の中にカシャワックの地図を描く。

「戦闘態勢で一階に集合するよう、二人に伝えてくれ」

「もう二人とも下で待機しとる。伝令の慌ただしい報告に気付かず眠りこけておったのはお主だけじゃよ」

「……む」

アイリスは思わず口をつぐんだ。自分だけが気付けなかった事が恥ずかしい。

「一分待っててくれ。すぐに下に降りる」

「了解。急げよ、アイリス」

アイリス小隊は即座に騎士団支部を発ち、アーケ川を渡って警備隊本部前の広場に向かった。広場は都市の中央から少しばかり北東に位置している。

広場では装備を整えた警備隊の兵達がそれぞれに指示を受けて慌ただしく動いていた。ここが警備隊の前線基地となっているらしい。

「ブランキッド隊長！」

アイリスは警備隊隊長のブランキッドを目ざとく見つけて近寄っていった。

「おお、王国騎士様」

ブランキッドは感謝の笑みを浮かべてアイリス小隊を招きいれた。青空の下に木製の机が置かれ、その上に都市の地図が広げられている。警備隊の首脳部が集合していた。兵士が騎士達の前にお茶を置いていったが、誰一人として手を触れようともしなかった。

アイリスは地図を一瞥し、考えを巡らす。戦況はどうなっているのか。すでに何人の兵が倒れたのか、何人の罪のない市民が犠牲になったのか。被害の状況、敵の進行状況。考えるべき事は山ほどあった。そうして地図を眺めている内に、『拘置所』の文字がアイリスの目に飛び込んできた。

アイリスの胸がずきりと痛んだ。

拘置所は戦場となっている北東商店街に近い。牢屋に閉じ込められた罪人は逃げる事ができずに戦いの中心に放置されているのだろう。ひょっとしたらすでに――。

アイリスは浮かんできた想像をかき消す。余計な事を考えている余裕は無い。今この瞬間にも戦いの激しさは増していっているのだ。

「現在、北東方面に部隊を回し、敵部隊と戦っております。今のところは持つでしょうが、突破されるのは時間の問題でしょう」

ブランキッドはアイリスに状況を報告した。アイリスは頷いてから口を開いた。

「警備隊の指揮権は私が預かる。異存は無いな？」

「ええ、ええ。是非ともよろしくお願いいたします」

ブランキッドが慇懃に頭を下げた。実戦を知らない警備隊隊長が兵を指揮するよりも、王国騎士が指揮するほうが遥かに有意義だろう。

シルバがずずとお茶を啜(すす)った。慌ただしく動く兵達の中で、シルバは全く動じる事無く静かに振舞っていた。

「敵は何者だ？」

ベルグが乾いた声で尋ねた。全員の注目がベルグに集まる。

「敵は四天王の一人、ミチハタイナゴです」

ブランキッドが言い辛そうに視線を伏せながら答えた。

「なんだと？」

思わずアイリスは洩らした。

「前線の兵がそう名乗るのを聞いたそうです。実際、ミチハタらしき巨体を確認しております」

大陸中の都市に無差別な襲撃をかける道端の存在は有名だった。道端の巨体の噂を聞いた者は数多い。

「四天王――。思ったよりも早い遭遇(そうぐう)だな」

ベルグはにやりとしながら呟いた。目の前に降って湧いた手柄が嬉しく仕方ないといった表情だ。

「どうするアイリス？」

ジラードの質問に、アイリスは答えない。すぐには答えがでてこない。

四天王が目と鼻の先に居る。ここで倒せるのならこの先の戦いはだいぶ楽になる。しかし、すでに敵は都市に侵入している。手元の戦力では確実に民を守るのに心許(こころもと)ない。このままでは民衆の被害は増える一方だろう。

騎士達や警備兵達がアイリスをじっと見つめていた。不安そうに眉をひそめている兵や、興奮気味に鼻息を荒くしている兵がいる。一様に落ち着かない様子の警備兵達をおいて、三人の騎士は全く動じることなくアイリスの言葉を待っていた。

どうする。どうすればいい。アイリスは頭を巡らせた。

刻一刻と時間は流れていく。
やがて、ベルグが聞こえよがしに溜息をついた。
「なにをぼんやりしている。とっとと決めろ」
しかしアイリスは押し黙ったまま、地図を睨みつけていた。
一秒一秒が重く圧し掛かる。時間はゆっくりと流れていた。
痺れを切らしたのか、ベルグが口を開いた。
「ミチハタの首を取りに行く。異論は無いな？」
ベルグは立ち上がり、槍を手に取った。他の意見など聞くつもりもないようだった。
「……待て、ベルグ」
アイリスの制止に、ベルグが氷のような表情で振り返った。
「なんだ？　まだぐずぐずと時間を無駄にするつもりか？」
空気が張り詰める。アイリスとベルグの間に生まれた緊張に、居合わせた兵士達は猛烈な居心地の悪さを感じた。
ベルグが侮蔑を顕わにして、アイリスに詰め寄った。
「だから下っぱアイリスの部下なんて嫌だったんだ。方針を決めるだけでいつまでも無駄な時間を使いやがって。決断ができないのなら隊長の座を老体に譲れ。その方がまだましだ！」
アイリスの眉が微かに震えた。
今まで我慢をしていたのだろう。決壊した堤防から川があふれ出すように、ベルグは止め処なく言葉を重ねた。
ジラードは普段は寄ることのない眉根を寄せた。ここに来て、アイリス小隊に問題が発生した。ベルグのアイリスへの確執（かくしつ）が戦いを前にして浮き彫りになってしまったのだ。
そして困ったことに、ジラードはアイリスの味方をすることはできなかった。ベルグの口の利き方には問題があるが、言っている内容に問題はなかった。決断に時間をかけるのは褒められたことではない。隊長が方針を定めない限り、下の者は行動を始めることができないのだ。
初めての隊長任務。今、アイリスのリーダーとしての素質が問わ

れていた。
　ジラードは少しばかり不安げにアイリスを見つめる。その隣のシルバは、静かに二杯目のお茶を兵士に催促した。皆の視線がアイリスに集まっていた。
　アイリスは苦々しげに唇を噛み締めてから、覚悟を決めた。すっくと立ち上がり、ベルグと額をつき合わせた。
「ミチハタは後回しだ。民の避難を優先する」
　ベルグは耳を疑うかのように眉をひそめた後、すぐに反論した。
「避難は警備隊に任せればいいだろうが。俺達は四天王の首を取りに行くぞ！」
「警備隊では民衆を守りきれない。万が一にも民衆の命を危険に晒すわけにはいかないんだ！」
　アイリスは議論の余地は無いと言わんばかりに言い捨てた。
　ベルグが我慢できずに手を振りかぶった。自分の意見を曲げる気など毛頭無いのだろう。ましてや気に食わないアイリスの意見だ。従えるはずがない。
「四天王だぞ！　手の届く場所に四天王がいるんだぞ！　貴様、こんな千載一遇の好機を――」
「うるさいッ！」
　場の空気が止まった。
　ジラードは間の抜けたように口を開き、シルバは微かに眉を上げた。警備隊長のブランキッドは大袈裟に驚き、居並ぶ兵達も信じられないといった様子で目の前の光景を眺めていた。
　アイリスは怒鳴ると同時にベルグへ勢い良く拳を振るっていたのだ。誰も予期していなかった突然の一撃だった。ベルグは頬に彼女の拳を受けて、ぐらりと身体を泳がしていた。
　アイリスが堂々と叫んだ。
「ぐだぐだ御託をこねるな！　指揮官命令は絶対だ！」
「……なっ」
　ベルグは信じられないようなものを見たかのように目を丸めてい

た。その頬が僅かに赤く腫れている。
アイリスはこの場に居る全員に向かって口を開いた。
「いいか！　責任は全て私が取る！　いいから黙って指示に従えッ！」
アイリスが叫ぶ。誰もが静まり返ってアイリスの言葉を聞いていた。強引なまでの隊長ぶりだったが、それでもそれは確かに隊長の態度だった。
「やれやれ、仕方ないのう」
一人ジラードが楽しげに呟いた。その顔には晴れやかな笑みが浮かんでいた。

慌ただしい物音が鉄格子の外から聞こえてきていた。
リックは漏れ聞こえてくる怒号や悲鳴にただならぬ気配を感じ取った。
何かが起こっている。明らかに異常事態だ。
リックは意を決すると、天井近くの鉄格子まで飛び跳ね、懸垂（けんすい）の要領で顔を押し上げた。そうすると、ちょうど目線が地上の足元と同じ高さになる。腕の筋肉が疲労していくのを感じながら、リックはじっと外の様子を観察した。
「なんてこった――」
リックは思わず息を呑んだ。
外は戦場と化していたのだ。
鉄格子から覗く北東商店街では、灰色の肌をした魔族の兵達とカシャワックの警備隊が入り乱れて戦っていた。北東門の周辺は完全に魔族に支配され、多くの兵や民の死体が無残に転がっていた。
ふと視界が暗くなり、リックは眉をひそめた。次の瞬間、がしゃんとけたたましい金属音を立てて、リックの目の前に警備隊の兵が倒れこんできた。リックは驚き、思わず手を離してしまった。
「うわっ」
硬い床にリックは背中を打ちつけた。激しい音と共に激痛が走る。

顔をしかめながら見上げると、鉄格子は完全に影に覆われてしまっていた。先ほど倒れこんできた兵士がそのまま死んでしまったのだろう。身動きをとる気配は一切無かった。

戦争。リックの脳裏にその二文字が強く流れる。

信じられなかった。心のどこかで、自分が戦争に巻き込まれることなどは無いと高を括っていた。

「おらあっ！　隠れてんじゃねえぞ！」

荒々しい叫び声と共に拘置所全体が揺れた。リックの身体が固まった。耳に神経を集中して状況を探る。

一階の扉が開け放たれ、数人の荒々しい足音が響いた。金属音が重なり合って、悲鳴が上がった。

「うわあ！」

それは昨日、リックに食事を運んできた看守の声だった。リックは思わず目を瞑った。

そして不気味なほどの静寂が訪れた。

掌がじわと汗ばんでいく。リックは自分の鼓動がやけに大きく聞こえた。次の瞬間にも魔族が現れやしないかと緊張したまま待ち受ける。

一秒が経ち、二秒が過ぎた。

リックは額から一筋の汗が流れていくのを感じた。そしてゆっくりと肩の力を抜いていった。

結局、魔族が地下に姿を現すことは無かった。地下への入り口に気付かなかったか、もしくは鍵が見つからなかったのだろう。リックにとっては知る術もない理由でこの場所は見逃されたのだ。

しかしそれもいつまで続くか分からない。次の瞬間にも新たな魔族がここまでやってくるかもしれない。そうなれば囚人であるリックに抵抗する術は無い。

戦場の片隅に一人取り残されたリックは、鉄格子を強く握り締めた。

「弱い、弱いぞ、アルマニア！　これならまだ帝国の方がましだ！」
道端は、片手で軽々と警備兵を掴み上げながら叫んだ。
そのまま大きく振りかぶり、地面に警備兵を叩きつける。骨の砕ける音と同時に血の奔流が溢れ出す。その血を浴びて、なお猛々しく哄笑する魔族はカシャワック警備隊にとって恐怖以外の何物でもなかった。
すでに五十を超える死者を出しながらカシャワック警備隊に撤退の選択は無かった。事実上、カシャワックに残された最後の防衛戦力である彼等は、ここで全滅する事態が待っていたとしても戦い続けるしかないのだ。
「隊長、おいらはそろそろ動くぜ？」
豪快に暴れまわる道端の背後に小柄な魔族、苔石が姿を現した。
「おうトンボ、手筈どおりにやれよ！」
「合点だい！」
苔石はにんまりと笑みを浮かべてから霧の向こうへと消えていく。あらかじめ立てられた計画に基づいて、苔石は部下達の下へと戻っていった。
「しかしカイコよぉ、ほんとにこの作戦でいいのかよ？」
道端は隣で槍を振るう山門に尋ねた。
「ええ。抜かりは無いはずです。万事順調に進んでおります」
猪突猛進に事を進める道端にとって良き女房役である山門は、いつだって綿密に計画を立てて道端の進軍を成功させてきた。道端の右腕と言うべき参謀役である。
「ふん、つまらんな。少しぐらい番狂わせがあってもいいだろうに」
道端は期待外れだと言わんばかりに溜息をついた。

「方針を達する！　いいか、民の避難が最優先だ！　それをしかと頭に刻め！」
アイリスは広場に居並ぶ警備隊の班長達に告げた。警備隊は十人一班の単位で組織されている。この場には四十名ほどの班長たちが

居並んでいた。
　アイリスの背後にはアイリス小隊の面々とブランキッド警備隊隊長が並んでいる。ジラードは堂々と腕を組み、シルバは静かに佇んでいる。ベルグだけが憮然とした表情をしていた。
「警備隊、北東門以外から民を逃がせ！　私達が奴らを食い止めておく！　南東、南西、北西の三つの門へと民を誘導しろ！」
「ちぃ、無駄手間を――」
　ベルグが聞こえよがしに舌打ちをした。アイリスは気にせず班長達に指示を出していく。
「それぞれ五班ずつで誘導に当たってくれ。民衆が脱出したら門を閉じるんだ」
「アイリス様。南西門への誘導は私が担当しましょう」
　ブランキッドがアイリスに申し出る。南西門は魔族が攻め込んできた北東門から最も離れた場所であり、最も安全な方向である。アイリスはブランキッドの図々しい態度をよほど叱責してやろうとも考えたが、本来の指揮官が残っていては自分の指揮に従う兵の士気にも影響するだろう。アイリスは厄介払いも同然に、ブランキッドの要求を受け入れた。
「いいだろう。……民を傷つける様な真似はするなよ？」
「ええ、ええ。その点は抜かりなく」
　ブランキッドが粘り気のある笑みを浮かべた。
「残りは全て北東門だ！　さあ行くぞ！」
　アイリスの号令に、警備隊の兵達はおお、と鬨（とき）の声を上げた。
「伝令！　伝令です！」
　しかしその場に突然走りこんできた伝令の兵に、全員の動きが止まった。
「どうした？」
「南東門にも敵軍が現れました！　敵はおよそ二百！」
　どよめきが走る。
「南東だと？　ええい、事前に察知できなかったのか！」

アイリスは下唇を噛み締めながら都市の地図を振り返る。怒鳴られた伝令は居心地が悪そうに縮こまっていた。
アーケ川によって両断された東側、北東門と南東門が敵の手に落ちた。北東門から外壁の外を通って南東門まで兵を進めたのだろう。このままでは都市は包囲されてしまう。
アイリスは即座に決断した。
「南西だ」
アイリスは騎士達に向き直る。
「民の脱出は敵主力から最も遠い南西門に絞る。可能な限りの戦力を回して、確実にそこから民を避難させる」
騎士達は一様に頷いた。アイリスの考えに異論は無かった。
「敵の情報が足りんな。この霧だ、遠見も意味が無いだろう」
ベルグが憮然とした態度のまま言った。一刻も早く四天王の首を取りに行きたいのだろうが、それでもアイリスの方針には従うつもりらしい。
霧のせいで敵の動きが把握できない。それが大きな不利だった。どこから敵が攻めてくるのか把握できない以上、全ての可能性を踏まえて戦力を配置しなくてはならない。
「――こうなると、避難民の護衛に最も強い戦力を置く必要がでてくる」
ベルグの言葉に、アイリスは頷いた。
「ああ、もちろん――」
アイリス小隊における最強の戦力が誰か。そう問われれば小隊の全員が迷わず一人の名前を挙げるだろう。他の三人の視線が自然と一人に集まった。
「避難民の誘導は誉(ほま)れ高き戦場の鬼神、ジラード・ラウンデルに任せる」
アイリスはジラードを見つめながら口を開いた。
「現場の指揮は一任する。最優先すべきは民衆の避難だ。民衆の安全が確保され次第、後詰(ごづめ)についてくれ」

「やれやれ。買い被られたものじゃのう」
ジラードは溜息をつきながら肩をすくめた。そこには何事にも一切物怖じしない老将の貫禄があった。
「復唱しろ」
「避難民を南西門へ誘導する。完了次第、後詰に回る」
「よし、任せたぞ」
「うむ」
頷き、ジラードは歩き出した。班長達とブランキッドを集めて指示を出し始める。アイリスはそんなジラードの背中を心強く見送った。ジラードほど信頼のおける人間はいない。彼がいる限り、民衆の安全は守られたも同然だろう。
アイリスは続けて考える。
民衆の避難が終わるまで敵を食い止める必要がある。北東門と南東門、都市の東側に溢れた敵を押しとどめて、少なくともアーケ川より西には踏み込ませないようにしなくてはならない。
「……敵本隊に一人。敵別働隊に一人」
呟いてから、アイリスはシルバに向き直った。
「シルバ、南東に回ってくれ」
シルバの瞳に微かに光が宿る。
「南東方面の敵別働隊を殲滅(せんめつ)しろ。アーケ川より西へ一人たりとも進ませるなよ。復唱しろ」
「アーケ川を最終防衛線として南東方面の敵別働隊を殲滅します」
シルバは淀(よど)みなく復唱した。
「よし、五班――五十人連れて行け。伝令を絶やすなよ」
シルバは頷き、居並ぶ班長達に「着いてきて」と一言だけ言って駆け出した。
まだ新米のシルバの実力が高く評価されているのは、その俊敏性の高さによるところが大きい。単純にシルバは速い。足も速ければ、仕事も速い。動作の一つ一つに無駄が無く洗練されているのだ。
問題なく事が運べば、人数が少ない敵別働隊が最も早く殲滅でき

るだろう。その場合、戦いを終えた騎士には他の任務を担当してもらわなくてはならない。そうなれば、戦場のあちこちを駆け回る事になるだろう。そういった役にはシルバが適任なのだ。
これで残るは北東門の敵主力部隊だけだ。
この先、北東方面の戦いは激しくなっていく一方だろう。ほとんどの市民は避難したはずだし、場合によっては兵達を撤退させる必要があるかもしれない。しかしそうなったら――。
戦場の中心に拘置所が取り残される事になる。アイリスはゆっくりと目を閉じた。
そこには放っておけない奴がいるのだ。どうしようとも晴れそうにないもやもやとした感情がアイリスの胸に強く渦巻いていた。
ここにきてようやくアイリスは確信した。
私はあいつを見捨てる事はできない。そんな事をしたらきっとずっと後悔する。もっと早く気付くべきだった。
私はまだ、あいつにお礼の一つも言ってないじゃないか。
アイリスは一人残ったベルグへ視線を向けた。
「北東。――ベルグ、お前は敵主力を食い止めろ」
ベルグはふん、と鼻を鳴らしてから口を開く。
「……貴様はどうするんだ、アイリス」
ベルグの言葉に、アイリスはふっと目蓋を閉じた。
「忘れ物を取りにいく」
「は？」
「一人、逃げ遅れてるだろう奴がいるんだ」
ベルグはアイリスが何を言っているのか分からず顔をしかめた。しかし、すぐに呆れたような笑みを浮かべる。
「――ふん、あいつか。放っておけ。たかが乞食の為に貴重な戦力を割いてられるか」
「それでも」
アイリスは優しく微笑んだ。
「――それでも私は行かなきゃならないんだ」

ベルグは付き合いきれんとばかりに溜息をついた。
アイリスが隊長としての厳しい表情に戻る。
「ベルグ。私が戻るまで指揮を預ける」
ベルグは心底腹立たしそうにアイリスを睨みつけた。
「ふん、寸前まで隊長権限を振り回したというのにな。……いいだろう。責任は全て貴様が背負うんだからな」
「助かる。後は任せたぞ」
ベルグがひらひらと面倒臭そうに片手を振るのを尻目に、アイリスは戦場の中心に向かって駆け出した。
アイリスはリックにもう一度会う為に走っていく。

続く

第一章　第四話『私は騎士だ』（第二稿）

第一章　カシャワック・ミートアゲイン

第四話　私は騎士だ

1

ベルグ・ノースポールは霧の中に霞む北東門を睨んでいた。北東商店街では魔族との戦いが激しく続いている。すでに敵味方関係なく多くの血が流れていた。北東商店街はカシャワックの主戦場と化していたのだ。

「敵魔術師は九人です！」

カシャワック警備隊の伝令がベルグに慌ただしく報告した。

「九人だと？　――多いな」

魔族も人間も関係なく、魔術師という存在は戦場では重要な役割を持っている。魔術師は自由に動く大砲のようなものだ。たった一人で多くの敵を葬る事ができる。

「位置は？」

「王国魔術師はそこまで把握できなかったそうです」

その時、霧の中に閃光が走った。直後に爆発音が響く。黒焦げた煙が上がり、兵士達の怒号が途絶えた。敵の魔術師の攻撃だ。数人の兵を巻き込める規模の爆発だった。

ベルグはふん、と鼻を鳴らしながら槍を手に取った。

「少なくとも、すぐそばに一人はいるようだな」

言いながら、ベルグは背後に並んだ兵士達を振り返った。それぞれが緊張した面持ちで手に手に武器を携えてベルグの号令を待っている。

「行くぞ！　魔族に人間の恐ろしさを教えてやれ！」
ベルグは槍を天に振りかざした。おお、と兵士達の武器が重なる音が響く。ベルグは満足気に兵士達の姿を眺めた。
班単位で構成された兵士達が動き出した。北東商店街で繰り広げられている敵主力との戦いが始まる。勢い良く突進していく警備隊によって、一時的に押されていた形勢が逆転した。魔族からすれば突如現れた援軍だ。ベルグの見ている前で、少しずつだが前線が押し戻されていく。
ベルグは自らも戦場へと駆け出していった。大地に転がる無数の死体の間を走り抜けていく。ベルグたちが駆けつけるまで必死に戦っていた警備兵達だ。
ベルグは忌々しげに舌打ちをした。
あの自分勝手な隊長が戻るまでは、これ以上余計な犠牲を出すわけにはいかないのだ。

戦いが始まってからどれほど経ったのだろうか。
戦場の喧騒（けんそう）の中で、まるでそこだけが切り取られたかのように静かな空間があった。
リック・クロビスは寝台の上でただ座っていた。戦場が遠くに移っていったのか、拘置所の周辺は不気味なほどに静かだった。
時間は緩やかに流れていく。だからこそ恐怖がゆっくりと染みこんでいく。考える時間があるから、待ち受ける時間があるから、死が鮮明に浮かび上がってくる。
こんなところで終わるのかよ、俺の人生は。リックは薄汚れたシーツをぐっと握り締めた。
それでいいじゃないかと、そう思う自分もいた。どうせ何も無い人生なんだから、いつ終わろうと変わらないじゃないかと考える。今までの自分を振り返り、これからの自分を思い描き、リックは天井を眺めた。何の変化もない薄汚れた灰色一色の天井だ。
リックはほとんど諦め切っていた。

それでも、ぎりぎりになって、何もかもを失う直前の場所で、何かが微かに蠢(うごめ)いていた。
今までそこにあるなんて気付きもしなかった。そんなものがあるなんて知りもしなかった。様々な思いの影に隠れた暗闇で、静かに脈打つ小さな思い。
まだ終われない。
リックの首筋に冷や汗が一筋流れた。
このまま終わる訳にはいかない。
焦燥(しょうそう)が走る。
ただ牢屋にいるだけで、何もできない時間がリックを蝕(むしば)む。
指先が疼(うず)く。何かをしたくて仕方ないと身体が訴え出している。
このまま終わっていいはずがない。
理由なんて知らない。知るはずもない。
頭がすでに諦めているのに。心がすでに諦めているのに。
身体が勝手に疼き出す。動き出そうと必死に急(せ)かす。
どうやら身体だけは諦める術を持っていなかったらしい。
理性でどうにかできそうもない。湧き上がる素直な感情に抗う術をリックは持っていなかった。
リックは自分がまだ生きたがっている事を理解した。
微かに騒音が響いた。気が付けば、また戦場の音が聞こえてきていた。金属音や足音、怒号や悲鳴が鉄格子から漏れてくる。
リックはすっくと立ち上がった。居ても立ってもいられなかった。
もう一度、飛び跳ねて天井の鉄格子に手を伸ばした。リックは兵士の死体に覆われた鉄格子に顔を近付け、なんとか隙間から外を見ようとしたが、やはり視界は完全に遮られていた。リックは仕方なく床に飛び降りた。
その瞬間、拘置所の扉が壁に勢い良くぶつかる音が一階から響いた。驚いたリックは着地した足を踏み外して床に倒れこんだ。痛みで一瞬目が眩んだ。
リックはすぐさま起き上がって身構えた。何者かが拘置所に入っ

てきたのだ。
ごくりと唾を飲み込んだ。次の瞬間にも敵が現れ、自分を殺すかもしれない。感覚が遠くなっていく。圧倒的な死の予感に恐怖すらも麻痺していく。
乱暴に家捜しをするような物音が一階から聞こえてくる。無警戒な泥棒のように、手当たり次第に物を引っ繰り返しているようだ。やがて何か積み重なった物を崩してしまったのか、耳を塞ぎたくなるような騒音が響いた。空き巣に慣れたリックからすれば未熟にも程がある。
リックは後ずさり、壁に背を預けた。気休めにしかならないが、少しでも敵とは距離を置いていたかった。
侵入者は目的の物を見つけたようだ。荒々しい音がふっと止まった。
拘置所全体が不気味な静寂に包まれる。
不意に鍵が回る音が響いた。静けさの中で、その音だけがやけに大きく聞こえた。続けて、きいっという鈍い音と共にゆっくりと扉が開いていった。
こつこつと一段ずつ石段を降りる足音が反響する。侵入者が一歩ずつ牢屋に向かって歩いてきていた。
そして足音が止まった。リックは一つ呼吸をした。
やがて、リックがじっと見つめる暗闇の中に、蝋燭(ろうそく)の明かりに照らされた侵入者の姿が浮かび上がった。
リックは思わず息を呑んだ。
「また会ったな」
艶(つや)のある金髪。意思の強そうな翡翠(ひすい)色の瞳。蝋燭(ろうそく)に赤く照らされて、整った顔立ちが揺れている。白銀の鎧に刻まれた獅子の紋章は、アルマニア王国の国民であれば誰もが見間違う事のない王国騎士の証だった。
リックは無意識に口を開いていた。
「……いったい何しにきやがった？」

視線の先には、意地悪そうな笑みを浮かべたアルマニア王国の王国騎士、アイリス・ヘリオトロープが立っていた。
アイリスは訝しげに見つめるリックに対し、呆れたように口を開いた。
「なにを驚いているんだ。お前には私が魔族にでも見えるのか？」
「意味が分かんねえ。なんでアンタがここにいるんだ？　外で奴等と戦ってるんじゃないのかよ？」
心底から理解できなかった。王国騎士ほどの存在が今尚続く戦いを放置して、なぜわざわざ戦場の片隅の拘置所にまで足を運んだのか。
呆然としているリックを見て、アイリスは目を丸くした。
「何を分からない事がある？　私はお前を助けに来たんだ」
アイリスは鉄格子の向こうで、当然のように微笑んだ。
「は？」
リックの頭は真っ白になった。
それこそ意味が分からない。自分を助ける事に何の意味があるというのだろうか。まして自分は囚人なのだ。囚人を助けるという事は脱走させると言う事だ。いったい、そんな事をしてアイリスに何の得があるというのだろうか。
困惑して押し黙ったリックに、アイリスが堂々と告げる。
「私は騎士だ。弱者を助けるのは当然だろう」
一喝したアイリスの言葉に、リックは目を丸くした。
なんだそれは。そんなんでいいのかよ。
やがて必死に考えていた自分が馬鹿馬鹿しくなり、リックは苦笑いを浮かべた。
目の前にいる金髪の女性が自分とは別の生き物なんだと納得する。
違う。そうじゃない。
目の前にいるのはそうじゃない。目の前にいるのは騎士なんだ。
いつか夢見た騎士なんだ。
リックはふっと目を閉じた。何かがすとんと胸に落ちた。収まり

が悪く居心地の悪かった何かが、さっぱり綺麗(きれい)に本来あるべき場所に収まった気がした。
アイリスは鍵の束を取り出し、リックの房の鍵穴に差し込み始めた。リックは屈んだアイリスの後頭部を鉄格子ごしに見下ろしながら告げる。
「俺は逃げるぜ？」
アイリスは一つ一つの鍵を試しながら、顔を上げる事無く答える。
「構わん」
かちり、と鍵がはまった音がして、アイリスは顔を上げた。蝋燭の炎が瞳に反射していて、上目遣いの表情はどことなく艶があった。
「私はお前を信じている」
アイリスの優しい声音が地下に反響した。
心臓が一つどくんと鳴った。リックの呼吸が一瞬止まった。
ゆっくりと錆付いた音と共に牢屋の扉が開かれた。
「さあ、出ろ」
アイリスが促し、リックははっと我に返った。そしてゆっくりと牢屋の外へと歩き出す。
「俺は逃げるぞ」
リックは改めてアイリスに言った。アイリスは苦笑いを浮かべる。
「二度も同じ事を言うな。好きにしろ」
「そうかよ」
リックはアイリスと視線を合わす事無く呟いた。
「それじゃあな」
次の瞬間、リックは出口へ向かって一目散に駆け出した。一日中独房に閉じ込められたと思えないほどの瞬発力で、あっという間に石段を登っていってしまった。アイリスは目を白黒させながらその後姿を見送った。
アイリスはほうっと溜息をつき、呆れ気味に呟く。
「……また礼を言いそびれたな」

2

主戦場となった北東商店街には人間と魔族が入り乱れていた。周囲からは怒号や悲鳴が絶え間なく響いている。

ベルグの視界の片隅で一人の警備兵が魔族の槍に貫かれ、絶命した。

「ちぃっ」

ベルグは魔族の群れに向かって走っていく。ベルグの姿に気付いた四人の魔族がベルグに向けて武器を構えた。魔族達の顔には人間に対する優越感と余裕がありありと浮かんでいた。

ベルグは魔族達の慢心を、思い上がりも甚だしいとばかりに嘲笑した。

ベルグの槍が四つの首を瞬時に討ち取った。格が違いすぎた。

ぐるりと周囲を見渡したベルグに向かって一人の魔族が剣を構えて突進してきた。ベルグは小さく冷笑してから、弾むように一歩踏み出して相手の武器を払った。小気味良い金属音と共に魔族の剣が地を滑る。唖然と開かれた魔族の口の中にベルグは槍を突っ込んで殺害した。

「他愛無いな」

ベルグは呟き、視線を巡らす。

少し離れた路地の角から僅かに光が漏れていた。魔力の流れを肌に感じる。

「魔術師か」

にやりと笑みを浮かべてから、ベルグは路地の角まで走り出した。魔術師の姿は見えない。

その瞬間、正面から魔力の弾丸が放たれた。咄嗟の判断でベルグは地を蹴り、左へ避けた。少し遅れて通りの反対側の建物から爆発音が響く。基礎的な日属性の魔術だ。

ベルグは立ち止まらずに駆けていく。今の一発を当てられなかっ

た以上、魔術師の命運は尽きたも同然だ。接近戦に持ち込まれた時点で魔術師には抵抗する術はない。
路地の角、顔を出した魔術師に対し、ベルグは飛び込むように突きを放った。呆然と立ち尽くした魔術師はそのまま槍に貫かれ、倒れた。
まずは一人。残りは八人。
その時、殺気を感じてベルグは背後へ飛びずさった。一瞬の間を置いて、矢がベルグの鼻先を掠(かす)めていく。矢が空気を裂いていく音を、ベルグの耳は確かに捉えていた。
ベルグは舌打ちしながら振り返る。視線の先にいたのは悠然と弓を構えた道端軍部隊長の長山門蚕(やまかどかいこ)だった。
ベルグは山門が放つ大きな魔力から、彼がただの兵では無い事を悟った。
「ようやく価値のありそうな首がでてきたな」
ベルグはさり気無く魔術師の死体から槍を抜いた。山門から視線を逸らす事無く、間合いをつめていく。山門は第二射を放とうと、ベルグへ向けて矢をつがえる。
ぎりぎりと張った弦が唸りを上げた。交錯する両者の視線。放たれた矢は一直線にベルグに向かった。
ベルグはその矢を槍の一振りで叩き落した。
そして駆け出す。山門までの距離が縮まっていく。
山門は不敵な笑みを浮かべて弓を放り投げた。そしてそばに倒れていた死体から槍を奪って構えた。ベルグはその瞬間、山門の間合いに入った。
ベルグの足が大地を滑り微かな砂煙を上げる。一呼吸の間を置いて、山門に向かって突きを放った。山門はそれを巧みにかわし、ベルグに向かって槍を振るう。
「敵の中に一人、傑物がいるようだと報告は受けていましたが、どうやらあなたのことのようですね」
「ふん、そういう貴様もそこらの雑魚とは違うようだな」

一合、二合。槍と槍がぶつかり合う。二人は動き続けながら武器を重ね合った。瞬きすら許されない緊迫した戦いが続いていく。
不意に、ベルグは大きな魔力を背後に感じた。新手の魔術師だ。しかも五メートルと離れていない。
ベルグは忌々しげに舌打ちすると、槍を大きく振るって山門を一歩下がらせた。その隙に、自らは横に飛び退いた。次の瞬間、寸前までベルグが立っていた場所に魔力の弾丸が放たれ、小さな爆発を起こした。
噴煙が上がる。ベルグは今の弾丸の射手を探った。二人目の魔術師がどこかにいるはずだが、土煙で視界が悪かった。
その瞬間、ベルグは二重の殺気を感じた。ちょうど右手側と左手側から、挟む込むように何かが自分へ向かって放たれた。察するに、二発目の弾丸と山門の第三射だ。視界はまだ晴れず、回避する猶予もあまりない。
ベルグは一も二も無く、敵の魔術に向かって手をかざした。魔力を溜めて発射する。魔力と魔力が空中でぶつかり合い、爆発音と共に弾け散った。すぐさま振り返るが、もう矢をかわす時間は残っていない。
矢はベルグの額を目がけて、一直線に宙を飛んでいた。
「ちぃっ」
ベルグはその瞬間、砂煙の中を一人の影が横切るのを見た。続けて、剣の閃き。鋭い金属音と共に、影の振るった剣が飛んでいた矢を払った。一瞬の出来事だった。
「待たせたな！」
ベルグの耳にアイリスの声が聞こえた。ベルグはふん、と鼻を鳴らした。
「一旦退くぞ」
ベルグはアイリスの指示を聞きながら、槍を大きく振りかぶって投擲（とうてき）した。先ほどの弾丸が放たれた方角だ。一か八かの賭けだったが、案の定敵は油断してその場を動いていなかったらしい。僅かの

間を置いて大きな魔力が途絶えた。
　これで残りの魔術師は七人だ。
「ああ」
　ベルグはアイリスの指示に従った。元よりそのつもりだ。山門の首を逃す事は無念だったが、このままでは危険が大きすぎる。
　その時、足音と怒号が耳に届いた。かなりの数の魔族が北東門からこちらに向かって迫ってくる音だ。
　第二波か。ベルグは舌打ちをした。周囲に警備兵の姿が無い事から考えて、自分達が突出しすぎている事を理解する。周囲は敵だらけだった。
　二人は砂煙の中を駆けだした。時折、飛んでくる矢を払いながら、警備兵達の防衛線まで戻っていく。
「忘れ物はあったのか？」
　ベルグは走りながら尋ねた。
「ああ、面倒をかけたな」
「よし、指揮権を返す。状況は五分、敵魔術師は九名、うち二名撃破。物見の報告によると、敵本隊の後続が街を離れたらしい。おそらく、南東方面の別働隊に合流する気だろう。こちらから五班シルバに増援を回しておいた」
「よし、分かった。門の封鎖はまだか？」
　アイリスは肝心要（かんじんかなめ）の北東門について尋ねた。北東方面の増援を防ぐには、何としてもあの開かれたままの門を閉じる必要があった。
「見ての通り、敵軍をまだ突破できていない」
「北東門さえ封鎖できれば戦況はだいぶ楽になる。頼むぞ、千両役者」
「ふん、簡単に言ってくれる」
　二人は警備兵たちが敵兵と戦っている通りに辿り着いた。ここが防衛線だ。警備隊本部の目と鼻の先であり、守るべきアーケ川も視界に入っている。なんとしても敵にハラン橋を渡らせるわけにはいかない。

アイリスとベルグは防衛線にまで突出していた敵兵を即座に殲滅し、警備兵達を激励した。
一進一退の攻防は続いていく。
戦いはまだまだ始まったばかりだ。

カシャワックを東西に両断するアーケ川。都市に二つしかない橋のうち、南側のボノ橋を守りぬくため、シルバ・ベルガモットは戦場を駆け抜けていた。
逆手に構えた二振りの短剣。シルバはバゼラードと呼ばれる短剣を得物（えもの）としている。逆手に構えている事により攻撃の速度は高まるが、それと引き換えに防御を困難にしている。シルバは敵の攻撃を受けない事を前提とした戦い方をしているのだ。
敵兵の攻撃を軽々とかわし、その喉元を裂いていく。踊るように戦場を舞い、血飛沫を上げていく。共に戦う警備兵達はシルバの華麗な戦いに目を奪われていた。
南東方面の敵は別働隊と言うこともあり、シルバ達はそれほど強固な反撃に合う事もなかった。これといった犠牲も少なく、シルバ先導の元、警備兵達は順調に快進撃を進めていた。
警備兵達に慢心がなかったといえば嘘になるだろう。屈強な王国騎士の背後に従い、警備兵達は確かに浮き足立っていた。その王国騎士が美しい女性であれば尚更だ。
シルバの耳に、警備兵達の悲鳴が聞こえた。
前進を続けるシルバ達の背後から、敵の一隊が姿を現したのだ。全く警戒していなかった背後からの襲撃に、警備兵達は次々に倒れていった。それが合図だったかのように通りのあちこちから魔族が躍り出た。シルバ達は完全に敵に包囲されてしまっていた。
伏兵だった。油断していた警備兵達は次々と魔族に殺されていく。
「うっしししし、おいらの作戦大成功！」
道端軍の南東方面の部隊長、苔石蜻蛉（こけいしとんぼ）が笑いながら、警備兵達を剣で切り捨てていく。その卓越した剣捌（けんさば）きに、警備兵達は為すすべ

なく倒れていった。
「シルバ様、どうしましょう！」
一人の兵士がシルバに情けない声を上げた。シルバよりも一回りは年齢が上であろう中年の警備兵だ。
「兵をまとめて撤退して。私が残って時間を稼ぐ」
シルバは敵を切り裂きながら、淡々と告げた。とても危険の中にいるようには見えない。
「え、あ、はい！」
命令された班長はシルバの態度に呆気にとられた後、すぐに命令に従い、兵をまとめていく。
シルバが軽く身体を沈めて、弾みをつけてから敵陣へと切り込んでいった。
次々と舞い上がる血飛沫の中で、魔族達の死体が折り重なっていく。
「……行って」
シルバが魔族の群れから切り開いた退路を、班長は残された三十名ほどの兵を引き連れて駆け抜けていった。
「おいおい、嬢ちゃん。ずいぶんと派手にやってくれるねえ」
周囲の魔族を殺し尽くし、円形に開いた空間で佇むシルバに向かって、苔石が一歩踏み出した。
「おいらの可愛い部下たちを好き勝手やってくれちゃってよお」
苔石は凄まじい形相で、シルバを睨みつけた。シルバは表情を動かさないまま、ただ苔石を眺め返す。そんなシルバを見て、苔石はますます顔を歪めた。
「おう、コラ。なんだその態度は！　なめてんのか！」
シルバの周囲を魔族達が取り囲む。その誰もが苔石と同じようにシルバに対して怒りを顕わにしていた。ずらりと居並ぶ魔族達をちらりと見やってから、シルバは両手のバゼラードを手の中でくるりと回し、腰に差した。そのまま予備のダガーを順手で抜いた。
「いくぞ、野郎ども！　仲間の仇をとってやれえ！」

苔石の号令と共に、シルバを囲う魔族達が一斉に飛び出した。
その瞬間、シルバは無表情のまま右手を振り払った。
緩やかに弧を描いて宙を舞った短剣がすとんと苔石の額に刺さった。
一瞬だった。
苔石は怒鳴り散らした表情のまま、どさりと倒れた。最期の瞬間まで何が起こったのか分からなかった事だろう。部隊長として、あっけないほどの死に様だった。
呆気にとられ、摩族達は呆然と立ち尽くした。自分達の上司が無残に殺された事が理解できていないようだった。
我に返り、真っ先に飛び掛ってきた一人の魔族に対し、シルバは再び左手を振るった。放たれた短剣が過たず魔族の額を突き刺した。魔族は苔石と同じように大地に倒れこんだ。
シルバは冷静なまま、静かに佇んでいる。
恐ろしいほどの静寂が戦場を包み込んだ。
やがて事態に気付き、逆上した魔族達が、一斉にシルバに向かって飛び掛ってきた。シルバは静かにバゼラードを腰から抜いて、両手に構え直した。
数の不利は変わらない。囲まれた段階でシルバの命運は尽きたも同然だっただろう。しかしシルバは真っ先に敵の頭を殺し、続けて勇敢に挑んできた敵も殺した。おかげで魔族達は我を失ったように怒り狂った。
冷静さを無くした敵ほど与(くみ)し易い相手もいない。シルバは相変わらず無表情のまま、氷のように冷徹に敵を片付け始めていく。
リックは慣れ親しんでいたカシャワックの裏通りを走っていた。戦いは空気すらも染め上げるらしい。どことなく乾いた味が口の中に広がっている。緊迫し、静まり返った路地裏を、リックは自分の家に向かって駆けていく。
時折、無残に殺された市民の死体が視界を過ぎる。見慣れたはず

の景色が全く違ったものに見える。人の気配の消えた家並みは、まるで――。
リックはあっと呟いてから立ち止まった。自分の脳裏に過ぎった考えを、改めて検討する。
まるで、開け放たれた金庫じゃないか。
リックはごくりと生唾を飲み込んだ。
今なら盗めるのだ。誰に見咎(みとが)められる事もなく好きなだけ。誰一人として住民の居ない家々から、それこそ両手に抱えきれないほどの金銀財宝を盗み出すことができるのだ。
降って湧いた幸運。予想だにしなかった好機だ。
目の前にある一軒の家に視線が向いた。それなりに稼ぎはありそうだ。リックはその家の扉に近付き、手を伸ばした。
ドアノブに手がかかろうとしたまさにその時、、リックは当初の目的をふっと思い出した。
こんなことをしている場合じゃない。急いで家に帰らなくちゃいけないんだ。
何よりも先にローじいさんの無事を確かめなくてはいけないんだ。
リックはカシャワックにおける唯一の知己(ちき)であり、長らく生活を共にしたローの安否を気遣っていたのだ。それは荒んだ乞食の生活の中で得られた、たった一つと言っていい掛け替えのない財産だったからだ。
路地裏を抜けて、小汚い道を走っていく。
そしてリックは家に辿り着いた。黄ばんだ漆喰の壁に囲まれた、ごみだらけの薄汚い路地裏。住み慣れた我が家だ。そのはずだった。
リックは目の前の光景に息を呑んだ。
路地裏は酷く荒らされていたのだ。乱暴に踏み荒らされ、破壊された木箱などが散乱している。その中で一人の兵士がうつ伏せに倒れていた。警備兵は背中から大きく斬られていて、この路地裏に逃げ込もうとしたところで殺された事は明らかだった。
リックは何も考えられないまま、自らの寝床に向かって突き動か

されるように歩いていった。
「……あっ」
予感はあった。
この一連の騒動の中で、耳の聞こえない乞食の老人が安全に逃げられるのは難しい事だと分かっていた。それでも気付かれる事なく隠れきる事はできたかもしれない。そんな希望も、兵士が路地裏に逃げ込んできた時点で絶望的になった。
「……ローじいさん」
リックの寝床の上で、ローがうずくまったまま倒れていた。背中には無残な切り傷が残っていて、何かを抱えるように丸まったローの背中を魔族が切り捨てたのだろう事が見てとれた。
リックは呼吸を忘れていた。
「ローじいさん」
リックは無意識に呼びかけた。返事が返ってこないことなど分かっていた。
いつだってローはリックに返事をしなかった。耳が聞こえないから、喋らないから、それは当たり前の事だった。それでも――。
「なあ、ローじいさん」
それでも、リックは呼びかける。
いつものように無愛想な顔で頷くローを見たかった。
共に逃げようと思っていた。戦いから逃れて、一緒にどこか別の場所に行こう、そう思ってリックは急いで戻ってきたのだ。
「じいさん――」
リックはローの肩を揺すった。ローの身体は冷たかった。
ローじいさんは死んだんだ。
リックはようやく受け入れ始めた。
リックは顔を伏せた。まっすぐに顔を上げていられなかった。どこかから聞こえる戦場の音がとても遠くに感じた。
そしてリックは気付いた。ローがうずくまっている下に何かを隠している事に。

リックはゆっくりとローの身体を横に倒し、ローが隠していた品物を発見した。
それは一振りの剣だった。
ショートソードと呼ばれる、歩兵の白兵戦に用いられる片手剣だ。一般に最も流通している剣でもある。その新品がここにあったのだ。
リックはローを振り返った。ローの安らかな表情と視線が交わる。
騎士になるにはこれが必要だろう？　一度も聞いた事のない老人の声が聞こえた気がした。
かつてまだ夢を諦めていなかった頃、リックは何度も自分の夢をローに語って聞かせていた。無愛想にリックの唇を読むだけだったローは、それでも嫌な顔一つせずにいつも最後まで聞いていた。
いつからかローがどこかへ行っている時間が増えた。思い返せば、それはリックが夢を諦め始めた頃だったと思う。リックはローがどこで何をしているのか知る由もなかった。
リックの中で理解が進む。
ローは自分の為に金を貯めてこの剣を購入してくれたのだ。
リックの瞳から一筋の涙がこぼれる。
無愛想だが、いつもそばにいてくれた。何かあるたびに助け合ってきた仲間であり友人だった。何度も助けてもらった。何度も救われた。腹を空かして倒れている時は、ローがいつもどこかから食料を手に入れて分けてくれた。言い尽くせないほどの感謝があった。
そしてリックに贈るための剣を用意してくれていた。
嗚咽（おえつ）が漏れる。リックは歯を食いしばって、悲しみを噛み締めた。
今日までの四年間、共に過ごした日々が津波のように押し寄せてきた。リックは寝床に座り込んだまま、長い時間そうしていた。
リックは恨めしげに剣を睨んだ。この剣を買う為、ローがどれほどの苦労をしたのか。自分がかつて語った馬鹿げた夢の為にどれだけローに負担をかけていたのか。
こんな事をしてくれる価値なんて、俺にはありもしないのに。
ただの乞食の盗人なんだ。俺は小さな男なんだ。何の価値もあり

はしない、くだらない人間なんだよ、俺は。ローじいさんといい、あのアイリスといい、一体どうして俺の為に何かをしてくれるんだ。

――それが分かっていてなぜ変わろうとしない？

リックははっとしたように目を見開いた。

俺には何の価値もない。ローじいさんもアイリスも、無償の善意を俺に恵んでくれたんだ。

俺はそれでいいのか。甘んじて他人の情けを受け入れるだけの男なのか。

――世の中は変わらなくても、お前は変わるだろうが。

リックは胸の中に何かを感じた。それはいつか感じた感情と同じ。抑圧され、鬱積（うっせき）され続けてきた感情が、今にも解き放たれようと胸の奥で脈打っているのだ。

――逃げるな、リック。

そしてリックは立ち上がる。

その右手には剣が確かに握られていた。

3

南東門でシルバが敵の策にはまって孤軍奮闘している頃、南東方面から何人かの敵が防衛線を突破し、ボノ橋からアーケ川を渡ったという報告があった。避難民を護衛するため、ジラードは一人で敵の迎撃に向かっていた。

ジラードはポールアックスと呼ばれる自らの身の丈以上の戦斧（せんぶ）を携えていた。鎧ごと相手を打ち砕く破壊力を持つこの戦斧は、ジラードにとって相棒とも言えるほど長く愛用してきた武器だった。

ジラードは即座に敵を発見した。まさにボノ橋を渡りきった直後の敵が五人、武器を構えてすぐそばの家々を破壊し始めていた。

決着は数秒だった。

ジラードが振るう戦斧を防ぐ術もなく、魔族達は骨ごと砕かれた。

ジラードの接近に気付く事すらできず、魔族達は無残に散っていった。
汗一つかかず、呼吸一つ乱すことなく、ジラードは防衛線から僅かに漏れ出た敵兵を殲滅したのだ。
「さて、戻るかの」
打ち付けた地面から戦斧を持ち上げたジラードは帰路についた。
通りを駆け抜けて、避難民の最後尾に帰りつく。民衆は南西門に面する商店街に辿り着いており、先頭集団はじきにカシャワックから避難することができそうだった。しかしどこか様子がおかしい。民衆達は落ち着きなくざわついていた。
「ジラード様！　大変です！」
ジラードの姿を認めた一人の警備兵が慌てて駆け寄ってきた。
「なんだ、どうしたんじゃい？」
「実は――」

「南西門が封鎖されました！」
本部からの伝令が息を切らしながらアイリスに報告した。
「それがどうした。民衆の避難が終わったんじゃないのか？」
アイリスは伝令が慌てている理由が分からずに尋ねた。
「違うんです、ブランキッド隊長とその周辺が真っ先に脱出した後、即座に門を閉鎖したんです。ほとんどの民が南西門の前で立ち往生をしていて」
「なんだと！」
アイリスは驚きを隠せなかった。しかし、即座に思い至って口を開く。
「門が閉まったのなら、人手を回して門を開かせろ！　それすらできないのか！」
「無理です。カシャワックの門は全て――外部からしか開閉できないのです！」
カシャワックがかつて刑務所であった時代の名残だった。門を内

側から開閉できるのなら、刑務所の意味が無い。全ての門は外からしか開閉する事ができないのだ。
アイリスは怒りのあまり、すぐそばに落ちていた敵の兜を蹴り飛ばした。兜は宙を舞って、瓦礫の上を転がった。伝令はびくりと身を竦ませた。
「ふざけるな、あの下郎がッ！　民を見捨てて自分だけ逃げたというのか！」
アイリスは奥歯が砕けそうになるほど強く噛み締めた。その目は強く血走っていた。
「ならば――残された北西門だ！　アーケ川より西はまだ守られている！　ただちに民衆を誘導し、北西門から脱出させるようジラード殿に伝えろ！」
「はい！」
アイリスの剣幕（けんまく）に怯えた伝令は弾けたように走り出した。
アイリスは忌々しげな表情で、前方を見据えた。北東門を巡る戦いはまだまだ激化の一途を辿っている。この瞬間にも多くの血が流れていた。
状況は決して楽観的ではない。いまだ民衆が避難できていない上、こちらは四天王の道端の姿すら捉えていないのだ。

「助けてくれえ！」
どこかから情けない悲鳴が聞こえた。
リックはその声に聞き覚えがあった。この街で名前を覚えているほど自分と関係がある数少ない人間の一人だ。しかし、それは決して友好的な関係ではなかった。
角を曲がって、家々の並ぶ住宅街に出た。悲鳴の聞こえた方角だ。
リックはそこで見た光景に目を見張った。
「ジョネス……！」
そこには無様に腰を抜かして後ずさっている悪童ジョネスと、今にもジョネスに斬りかからんとしている一人の魔族がいたのだ。

いつもの取り巻きはすでに逃げたのか、どこにも姿はない。ジョネスは一人きりで、魔族の手に握られた死に直面していた。そこに日頃の強気な態度はどこにもなかった。彼はがくがくと震える足を引きずりながら、蒼白な顔で涙を流している。その左手は必死に大きな皮袋を抱きしめていた。

リックは昨日、路地裏でジョネスに受けた傷の痛みと、奪われてしまったシルバのペンダントのことを思い返した。

今までリックは何度もジョネスに絡まれ、暴力を振るわれてきた。そこに正義は全くなかった。ただ理不尽な弱いものいじめがあっただけだ。

リックの脳裏に様々な考えが巡る。

いい気味だ。リックは声には出さず呟いた。

散々ひどい真似をしてきたんだ。ここで殺されたって文句は言えないだろう。

リックは暗い瞳でジョネスを一瞥(いちべつ)し、踵(きびす)を返した。返しかけた。

――私は騎士だ。弱者を助けるのは当然だろう。

リックの足を踏み留めたのは他でもない。つい先ほど目の当たりにした本物の騎士の言葉だ。

リックは細く溜息をついた。目蓋を閉じて、鉄格子ごしに見た流れる金髪を思い返す。

その背中は何よりも尊く、何よりも気高かった。

腰に差した剣がずしりと重さを増した。

後ずさっていたジョネスがついに壁に行き当たった。もう背後に逃げ道はない。ジョネスは血走った目で、あるはずのない救いを求めていた。

「けけけ！　欲張らねえで、とっとと逃げときゃ死ななかったのになァ！」

「ヒィッ！」

魔族の振りかぶった剣に、ジョネスは思わず頭を抱えた。その拍子に抱えていた皮袋が転がり、中から大量の硬貨がこぼれ出した。

先ほどまでのリックと同じように火事場泥棒を考え、あまつさえ実行していたらしい。それらは明らかに盗品だった。
「あばよォ、人間！」
魔族が剣を振り下ろす。ジョネスは恐怖に目を瞑った。
リックは無意識に大地を蹴っていた。
鉄と鉄がぶつかる金属音が響いた。この場にいた誰もが目を見張った。
気が付けば、リックはジョネスを庇(かば)うように魔族の前に立ち塞がっていた。抜き放ったローの剣で、魔族の攻撃を防いでいたのだ。
「なんだ、貴様！」
「……リック？」
誰よりも驚いたのはジョネスだった。死を覚悟したその瞬間、思ってもみなかった人物に救われたのだ。目の前の事態が信じられずに、ただあんぐりと口を開いている。
リックは内心で苦笑いをした。
ここまでしたのだ。いまさら言い逃れはできない。
そもそも無理があったのだ。忘れようとしても、諦めようとしても。何度自分に言い聞かせても、何度自分に信じさせても。
目の前に現れてしまったのだから。
堂々と何一つ揺らぐ事ない本物が、細胞の一つ一つにすら染みこんで消えようがない願望が、これ以上無いほど明確な形を持って現れてしまったのだから。
――お前は、自分が変わってしまったと思うことは無いか？
まんまるの月が照らす橋の上、冷たい夜風の中で発せられた言葉が蘇る。
違う、俺は疲れ果てただけなんだ。
そうだ。リックは改めてアイリスの言葉を否定する。
俺は疲れ果てていただけで、何も変わっていないんだ。
あの日の馬鹿げた夢をまだ、諦めきれないままなんだ。
――俺には確かな夢がある！

リックは使い慣れぬ剣を握り直しながら、かっと目を見開いた。
「言っただろうが！」
その口から放たれた言葉に、ジョネスも魔族も身を竦めた。
いまさら迷うことは無い。二度と見失う事もない。
「俺は必ず騎士になる！　弱者を助けるのに理由はいらねえ。どんな奴でも守ってみせる！」
リックは叫んだ。
リックの覇気に圧された魔族は一瞬だけ怯んだ。たかが一瞬。しかし、互いに手の届く至近距離においては致命的に長い一瞬だった。
リックは迷わず剣を振るった。魔族は上段から一気に切り伏せられた。
血飛沫と共に魔族の身体が地に沈んだ。リックは息を荒げながら、振りかぶった剣を鞘に収めた。まるで現実感のない戦いだった。自分の手が敵を一人殺したという事実が信じられなかった。
やがてリックは思い出したかのように、ゆっくりと振り返った。ジョネスは思わずびくりと背筋を震わせた。
「別にお前をどうこうするつもりはねえよ」
ジョネスはあからさまに肩の力を抜いて、壁にもたれかかった。
「……こんな事をして、恩を売ったつもりかよ？」
ジョネスは日頃の悪態を微かに蘇らせて、鼻につく口調でリックに言った。先ほどまでの情けない態度はどこ吹く風だ。
「恩を売ったんじゃねえ。助けたいから助けたんだ、勘違いするなよ」
リックは平然とした表情で言った。
ジョネスは呆然と瞬(まばた)きを繰り返していた。目の前にいる少年が、いつも殴っていた乞食と同じには見えなかったのだ。今までのリックとは何かが大きく違っていた。
「とっとと逃げろよ」
言い残して、リックは去ろうとした。しかし、その足は一歩も進まなかった。

リックは頬を擦(さす)ってから、ジョネスに向き直った。
「そうだ、お前――」
「よし、北西門じゃな？」
ジラードは伝令に聞き返した。
「はい、指揮官殿は北西門から脱出しろと」
ブランキッドに南西門を閉鎖されてしまった以上、残された脱出口は北西門しかない。敵主力部隊が北東門で戦っているとはいえ、アーケ川によって東西は両断されている。北西門から民衆を避難させる事に問題はないだろう。
ジラードは南西門の前で騒然としている避難民達に向かって高々と告げた。
「北西門から脱出するぞ！　遠回りだが辛抱してくれ！」
民衆達は不安の色を隠さなかった。不審げな顔付きで警備兵やジラードを見ている。目の前で警備隊の隊長に裏切られたばかりのだ。その不信感は計りしれないものがあるだろう。
ジラードは小さく溜息をついてから、民衆を安心させるために笑顔を見せた。
「なあに、お主等には一切被害は出させん！　仮にも儂は王国騎士じゃ。国王陛下の名に賭けて、お主等を無事に避難させる事を誓おう！」
親しげでありながら凛としたジラードの物言いに、民衆達の不信感は静まっていった。少なくともジラードに反論する気はないようだった。それだけの貫禄がジラードにはあったのだ。
ジラードはブランキッドに取り残された警備兵達を集めて叱咤激励し、避難民の周囲を守る配置に付かせた。警備兵達は自分達の隊長が民衆を見捨てて逃げ出したことに、少なからずの衝撃を受けているようだった。どことなく警備兵達は虚ろな表情をしていた。
いよいよもってジラードの両肩に責任が重く圧し掛かってきた。
この状態で敵に襲われたら、まともに民衆を守りきれない。それ

はれっきとした事実である。使える戦力に比して、民衆の規模が大きすぎる。そもそも警備兵は戦力としては心許(こころもと)ない。危険が迫った際にはジラードが踏ん張るしかないのだ。

北西門へと民衆を誘導しながら、ジラードは考える。

現在の戦況ならば、そう不安に思うことはない。敵はアーケ川で食い止められているのだ。このまま進めば敵と遭遇することもなく、無事に北西門に辿り着く事ができるだろう。

実際、ジラードは何の問題もなく北西門に面する住宅街にまで辿り着いた。拍子抜けするほどあっけない道程だった。

ジラードは一旦、民衆の足を止めた。視界が悪い霧の中では先に何が待っているのか分からない。先に走らせた斥候が返ってくるまで見通しのよい広場で待つことにしたのだ。

「ジラード様！」

そこに、斥候として放った警備兵が息を切らせて戻ってきた。そのただ事ではない顔付きに、自然とジラードの顔も厳しいものになる。

「どうしたんじゃ？」

「敵です！　霧の向こうから足音が！」

「なんじゃとう！」

ジラードは思わず歯を剥いた。

「アーケ川を渡る手段など無かったはずじゃ！」

警備兵は眉をひそめてから、一つの考えを口に出した。

「街の北部の森林の中まで行くと、川が浅くなっている場所があります。恐らくは――」

ジラードは最後まで聞かず、歯軋りをした。

「ええい、伝令じゃ！　指揮官に状況を伝えろ！　ジラードはそのまま敵を迎え撃つとな！」

「はい！」

勢い良く返事をして、警備兵は駆け出していった。

ジラードは警備兵の半分を避難民の警護に残し、半分を連れて北

西門へと進んでいった。
ジラードの視界に薄っすらと北西門が見えてきた。目と鼻の先に出口があるのだ。
ここまで来たというのに――。
「うわっはっはっはぁ――！」
北西門の方角から猛々しい笑い声が響いてきた。背後に付いてきていた警備兵達が怖気だったのをジラードは肌で感じ取った。
やがて霧の向こうから、ぬっと巨大な影が姿を現した。
「さあて、どいつもこいつも逃がしやせんぞォ！」
見間違えようのない三メートルはあろうかという見上げるほどの巨体。二十人はいる警備兵を一呑みにするかのような凄まじい迫力だ。ジラードは気付かぬうちに生唾を飲み込んでいた。
「ミチハタイナゴが――、本命が北西じゃとう！」
北西門に待ち受けていたのは魔軍四天王、道端蝗だった。
完全に想定外だった。敵の最大の戦力である道端は北東門で兵を率いているのだとばかり考えていた。だからアイリスとベルグ、王国騎士を二人も北東門に配置したのだ。
「ひぃい！」
背後で一人の警備兵の悲鳴が上がった。続けて、慌てて駆け出していく足音。道端に対する恐怖のあまり、逃げ出したのだろう。その気持ちも分からないではなかった。
道端は値踏みするように警備兵達を睥睨（へいげい）した後、一人だけ毛色の違うジラードに目をつけた。じっと目を細めて観察した後、にやと豪快な笑みを浮かべる。
「おうおう、ようやくマシな相手と戦えるみてえだなあ！」
道端の鬼のような形相がジラードを圧迫した。また一人、警備兵が武器を放り出して逃げ出した。他の警備兵も完全に道端の迫力に呑まれていた。
驚きで目を丸くしていたジラードも、やがて口元を歪めてにいっと笑った。

沸々と血が滾(たぎ)ってくる。久しく感じていなかった高揚感が満ちてくる。
普段の柔和な顔付きとは一変、見る者が腰を抜かすような恐ろしい笑みがジラードの顔に浮かんだ。
「がっはっはっはっはっ、――面白い！」
ひとしきり激しく笑った後、ジラードは道端をねめつけた。
「王国騎士ジラード・ラウンデル、ここにありじゃ！　戦場の鬼神の妙技、とくと味合わせてくれよう！」
ジラードは戦斧をぐるりと大きく回転させて正面に構えた。相当な重量のあるそれを、ジラードは微動だにさせず空中で留めた。腕の筋肉が木の幹のように盛り上がっていた。
「いいねえジジイ！　いい覇気だ！　うわっはっはっは！　魔軍四天王が一人、ミチハタイナゴ、行くぜぇ！」
道端が楽しげな笑みを浮かべて大きな一歩を踏み出した。ジラードは微動だにせず待ち受ける。その眼光はそれだけで人を殺し得る力を放っていた。
ここに、今日のカシャワックにおける最強の戦力同士の戦いが始まった。出口を失って取り残された民衆を守るため、ジラードは一歩たりとも退くわけにはいかなかった。

続く

第一章　第五話（最終話）『来い、リック！』（第二稿）

第一章　カシャワック・ミートアゲイン

第五話　来い、リック！

1

「北西にミチハタが現れました！　現在、ジラード様が迎え撃っております！」

北東商店街に駆けつけた伝令を、アイリスは剣を振るいながら聞き入れた。走り疲れた伝令を庇いながら、周囲の敵を軽々と切り伏せていく。

「ミチハタが北西だと？　くそ、脱出口が完全に失われたか――」

事態は悪化の一途を辿っている。北東の防衛線は押し進み、北東方面の半分以上はこちらの手に取り戻した。南東方面も一旦は崩れかけたが、シルバが根気強く戦線を立て直し、ほとんど敵の殲滅は目前だという報告も入っていた。しかし、肝心要の民衆の避難が終わらなければアイリス達の不利は変わらない。何よりも敵の首領、道端蝗はいまだ健在なのだ。

アイリスは次々と変化していく戦況に、休む間もなく頭を巡らす。

優先すべきは民衆の避難だ。何があろうともそれだけは達成しなくてはならない。

その為にどうするべきなのか。どういう指示を出すべきなのか。

一通りの敵を片付け、剣についた血を振り払いった。

状況を頭の中で整理する。動かせる駒は限られているが、決して少ないわけではない。

「南東、シルバへ伝えろ。なんとしてでも敵別働隊を突っ切って南

東門から外に出て、外部から南西門を開放しろとな。最後の血路を開かせろ」
南東門で優勢に立っているシルバに、避難民の脱出口を開かせる。外からしか門が開けられない以上、誰かが外に出て唯一安全な南西門を開く必要があるのだ。それには足の速いシルバほどうってつけの人材は居ない。
「まだ待て」
アイリスは走り出そうとした伝令を止めた。まだ出すべき指示がある。アイリスはちらりと北東門を見やり、はるか前線で善戦しているベルグの姿を見つめた。
「ベルグにも伝令を出せ。南東に回って、シルバの穴を埋めるように伝えろ。恐らくシルバを欠いて押し戻されるだろう防衛線を建て直させるんだ。絶対にアーケ川を越えさせるなよ」
アイリスは続けて、もう一つ指示を出す。
「北西、ジラード殿へも伝令だ。民衆を再び南西門より脱出させる。現在シルバが南西門の開放に向かっている。その間、敵を食い止めろとな」
アイリスは三人の騎士に対して一つずつ指示を出して、伝令を走らせた。これでまた戦況は動くだろう。後手に回った感はあるが、まだ十分挽回は可能だ。騎士の配置をスライドさせ、シルバに南西門を開かせる。考えた上では何の問題もないのだ。
アイリスは一人頷き、そして北東門に向き直った。
問題があるとすればここだ。
アイリスとベルグ、二人の王国騎士のよって支えられてきた敵主力に接する前線が、ベルグを南東方面に回すことにより、アイリス一人で支えなくてはならない事になる。苛烈な戦いになるだろう。
――アンタは自分が変わったと思っているのか？
ふと昨夜のリックの言葉が蘇った。胸を深く抉った、忘れられない一言だ。
大丈夫。私はもう『下っぱアイリス』じゃないんだ。アイリス小

隊の隊長なんだ。
　アイリスは目蓋を閉じ、一つ呼吸をしてから目を開いた。開いた時には、その表情に迷いはなかった。
「北東門さえ閉鎖できれば、戦況は好転する――」
　アイリスは呟き、そして駆け出した。
　眼下に広がる風景には大勢の魔族。ベルグはすでに南東方面に向かったのか、その姿はなかった。アイリスは走りながら、多くの敵を切り倒していく。しかしそれでも敵は次から次へと姿を現す。敵の増援は北東門から絶える事無く送られてくるのだ。
「警備兵！　誰でもいい！　なんとしてでも北東門に辿り着け！」
　叫びながら、アイリスはついに立ち止まった。見渡す限りの魔族に囲まれてしまったのだ。
　見ると、周囲の警備兵達も魔族に取り囲まれ、道を塞がれていた。アイリスは敵の武器を的確に捌いていきながら、、傷一つ負う事無く相手の頭数を減らしていった。
　アイリスには敵を無理に捻じ伏せていく突破力は無かった。かつて未熟だったアイリスは自身の非力さを受け入れ、敵の攻撃を完全に防御しきるパリィングの能力を磨き上げたのだ。敵の攻撃を堅実に捌き、防御し、生まれた隙を逃す事無く確実に攻撃する。そうして一対一においては無類の強さを誇るようになったアイリスだったが、集団戦の中では、その丁寧な戦いぶりによって時間を浪費してしまうのだった。
　北東門を視界に捉えながら、周囲を囲う敵たちの攻撃を的確に捌いていく。もどかしい気持ちを必死に抑えながら、アイリスは魔族を一人ずつ倒していった。
　そうしている間にも敵の増援は止まない。北東門を巡る戦いは一進一退を続けていた。
「ちいっ！　きりが無い！」
　アイリスは忌々しげに洩らした。
　次から次へと襲いくる魔族に、アイリスは根気強く剣を合わせて

いった。しかし、視界の隅では次々に警備兵達が倒れていっていた。このままここで粘っていては、やがては全滅してしまうかもしれない。

撤退するべきなのか？

弱気な考えが首をもたげる。北東門が目の届くところにあるというのに、どうしても手が届かない。打開策の見当たらないまま、時間だけが流れていく。

悪い報せは来てほしくない時にほど来る。

そうこうしている内に、蒼白な顔をした伝令がアイリスの元に駆けつけた。

「指揮官殿！　北西方面苦戦！　ほぼ全滅です！」

「なんだと！」

突如もたらされた凶報に、アイリスは思わず伝令に怒鳴り返した。

「ジラード殿はどうした！」

「孤軍奮闘しておられるとの事です！」

「ミチハタ相手にか――」

アイリスはほぞを噛んだ。ジラードに苦戦を強いるほどの敵が、改めて脅威に思われてくる。アイリスはジラードが苦戦したことなど、今まで聞いた事もなかったのだ。

「ええい、南西門の開放はまだか！」

「まだ報告が入ってきておりません！」

シルバは手間取っているのか。いや、決して手間取っているわけではない。どれほど急いでも南西門に辿り着くにはまだかかるだろう。そして南西門が開かれなければ民衆は避難できない。

失敗だったのか？　アイリスの脳裏に暗い考えが過ぎった。

民の脱出を優先してアイリス小隊の戦力を割いてしまったことが失策だったのか。

状況は好転しない。北西門で道端を止められなければ今までの苦労が全て水の泡となってしまう。

何か手を打たなくてはならない。

しかし、駒が足りなかった。
北西門。道端と戦うジラードに今すぐにでも救援が必要だ。
南西門。民衆にとって唯一の出口の開放が必要だ。
南東門。放置はできない敵別働隊の防衛が必要だ。
北東門。敵の増援を絶つためにも、一刻も早い北東門の閉鎖が必要だ。
北西門のジラードの元に誰かを向かわせなくてはならないのに、その為の駒が残っていなかった。騎士達の誰一人として動かす事のできない場所に配置されているのだ。
「くそっ！」
せめて一騎。小隊の誰か一人でも任務を果たしてくれたなら……！
アイリスは考えに集中するあまり、現実への注意が疎(おろそ)かになっていた。
一人の魔族が迫る。
気配に気付いて顔を上げた時には遅かった。背後から迫ってきた魔族に剣を弾き飛ばされてしまった。
失態だった。王国騎士として有るまじき粗末な失敗だ。
隙だらけとなったアイリスを目がけて、魔族が剣を振り上げた。時間の感覚が遅くなる。魔族が振りかざした剣を防ぐ手立てなど彼女にはなかった。避けようがない目前の死を、彼女は静かに覚悟した。
剣がアイリスに迫る。
アイリスはその身に背負った多くのものが、ふっと消え失せていくのを感じた。
ここで終わり。道は半ばで、何事も為さずに絶えていく。
アイリスは緩やかな時間の中で、ゆっくりと目を閉じた。
その時、闇の中で剣がすらりと鞘を滑る音が響いた。
そして、その音に魔族の悲鳴が重なった。
アイリスははっと目を開けた。アイリスの目の前で、あんぐりと口を開けた魔族が剣を振りかぶったまま立ち尽くしていた。やがて、

思い出したように魔族は崩れ落ちる。
「どうした、アイリス。それが王国騎士のザマなのかよ？」
早朝から続いていた霧が晴れていく。斜めに差す眩い太陽に照らされ、カシャワックの街並みが鮮やかに照らしだされる。
アイリスは眩しい逆光に目を細めながら、目の前に立つ少年を眺めた。少年の剣はたった今斬った魔族の血で濡れている。栗色の髪、純朴そうな太い眉。小さな背丈と生意気そうな強い眼光。少年の顔はアイリスにとって見間違えようのないものだった。
アイリスの目の前には、リックが不敵な笑みを浮かべて立っていたのだ。
「リック、どうしてここに……！」
「さあな。とにかく人手がいるんだろ？　俺を使え」
アイリスの胸中に複雑な感情が入り乱れた。それは自分でも把握できない感情の渦だった。
アイリスは沸きあがる感情を噛み殺し、隊長の表情に戻った。
「使えと言ったってな――」
アイリスは顎に手を当てて、リックを値踏みする。
ただの乞食だ。戦闘経験などろくにないはずだ。そこらの兵のほうがよっぽど有用な駒だろう。昨日の屋根の上での格闘を思い返しても、とてもじゃないが戦力にはならない。いくら駒が足りないからといって――。
ふと、アイリスの目がリックの目に止まった。
堂々と物怖じすることなく輝く瞳。揺らぐことなく、まっすぐにアイリスを見据えている。
アイリスは肌に電気を感じた。ぴりぴりと空気を伝って痺れる感覚だ。
今のリックには熱さがあった。昨日や今朝のリックとは違う、見る者を震え上がらせるほどの熱い魂があった。
アイリスは、はっと目を見開いた。
あの日のリックがここにいる。

いつか私の背中を押した、あの日の少年が今ここに。
アイリスは、ようやくあの日の少年と再会したのだ。
「……俺にはアンタ達が持っていないものが一つだけある」
「なんだ？」
リックはにいと笑みを浮かべた。
「俺には地の利がある。ここにいる誰よりも、俺はこの街を知っている」
リックの言わんとすることを理解したアイリスは、リックに微笑みを返した。
アイリスは決断した。
「――いいだろう。以後、私の命令に従え」
「おう！」
アイリスは北東門へと視線を移した。つられてリックもそちらを見やった。
アイリス達の居場所から北東門までの距離は遠く、その間には百人前後の魔族がいまだに待ち構えている。王国騎士といえど、真正面から突破するには時間がかかるだろう。
「行けるか？」
アイリスはちょっと散歩でもどうだ、とでも言うような軽い調子でリックに尋ねた。
「行けるさ」
リックもまた、何の問題もないかのように平然と答えた。
「よし、ならば今すぐ走って、邪魔な客を閉め出してこい！」
「よっしゃ、任せろ！」
リックは頷き、勢い良く走り出した。建物の影を縫い、路地裏へと姿を消していく。その背中をアイリスは頼もしげに見つめた。
事態は変わる。リックが門を閉じれば、北東門の増援は絶えて戦いに余裕がでる。そうなれば、アイリスが北西門で道端と戦っているジラードの救援に駆けつけることができる。
「頼むぞ、リック」

アイリスは呟いてから、警備兵達を攻め立てている敵陣に切り込んでいった。
カシャワックを巡る戦いは一気に収束していく。

2

リックは走る。路地裏を抜けて、角を曲がり、裏通りを駆け抜けていく。
時折聞こえてくる戦場の音から付かず離れず、誰にも見咎められることなく北東門へと進んでいく。敵に見つかるわけにはいかなかった。もしも何人もの魔族に襲われたら、とてもじゃないが太刀打ちできない。
すでに敵陣の中心には入っているはずだった。広く深く伸びた戦場の中を、静かに深く突き進んでいく。
リックの目に不安の色はなかった。自分が敵に見つかることはないと確信していた。
実力や経験では敵わなくとも、地の利だけは戦場に居る誰よりもあったから。
飛び込んだ家の狭い窓から這い出し、リックは狭い小路で身体を水平にして通り抜けていった。背中と胸を壁に擦りながら、誰も知らない道を行く。視界は壁と壁に遮られ、それ以外の何も見る事はできない。
やがて壁が絶え、視界が開けた。
ちょうどそこは、見上げるほどの北東門と目の鼻の先の場所だった。リックの頭の中に張り巡らされた地図は、リックを一直線にここまで導いたのだ。
リックは首だけを壁から伸ばし、周囲の様子を観察した。敵陣の中心だけあって多くの魔族が徘徊していたが、前線から離れていることもあってか、誰もが警戒をしていなかった。

リックは物音を立てぬよう注意しながら、北東門の管理小屋に忍び寄った。

その瞬間、滑車の回る大きな音が北東商店街に響き渡った。人間も魔族も音の出所が分からず、戸惑ったように視線を巡らせた。

「門だ！　北東門が閉まっている！」

額から血を流し、仲間の肩に身を預けている一人の警備兵が叫んだ。

アイリスは思わず北東門へと振り返った。

忌々しげに何度も睨みつけてきた北東門が、ゆっくりと鈍い音を立てながら閉まり始めていたのだ。周囲の魔族達も事態に気付き動揺していた。

アイリスの顔に明るい色が差し込んだ。

「やったか、リック！」

リックがやってくれたのだ。並居る敵軍を突破して、北東門を閉鎖する勇気を示してくれたのだ。アイリスは内心の喜びを抑え切れなかった。

「いいか、勇士の活躍を無駄にするな！　私は今から北西門へ救援に向かう！　お前達で孤立した敵を掃討するんだ！」

おお、と警備兵達の雄叫びが上がる。薄れかけていた警備兵達の士気が今、再び熱く燃え上がっていた。

永い間開放され続けてきた北東門がついに閉まった。魔族達はその光景を、指を咥えてみている事しかできなかった。

弾みのついた警備兵達の快進撃が始まった。増援も退路も断たれた魔族達はこれ以上ないほど動揺していた。戦況は一気に好転したのだ。次々に戦果が上がってくる。

敵の主力部隊なだけあって、まだまだ敵の数は多い。殲滅するには時間がかかりそうだ。しかし、時間をかけさえすれば達成できることだろう。

アイリスは勇敢に魔族達と戦う警備兵達を誇りに思いながら、北

西門へと駆け出した。
北西門には、この戦いにおいて最も重要な敵が待っている。
アイリスは一刻も早くジラードの元に駆けつけなくてはならなかった。

リックは北東門が閉まり出すと同時に、管理小屋から抜け出した。いつまでも留まっていれば簡単に敵に見つかってしまうだろう。役目を果たした以上、一刻も早く逃げる必要があった。リックは北東門が閉まりきる前に、再びカシャワックの中に舞い戻った。
しかし、閉まり出した北東門に注目していた魔族達は多く、当然ながら彼等の視界には管理小屋から勢い良く飛び出してきたリックの姿も映っていた。
「あいつだ！　あいつがやりやがったんだ！」
気付いた魔族がリックを指差した。血気盛んな一人の魔族が、剣を抜いてリックへ向かって駆け出していく。やがて堰を切ったように、十数人の魔族がリックに殺到しはじめた。
「嘘だろ……！」
リックは血の気が引いていくのを感じた。
目の前に迫る魔族達を見ながら、わざわざカシャワックの内部に舞い戻ってしまった自分の愚かさを思い知った。門を閉めたらそのまま、街の外へと逃げていけばよかったのだ。
「うわああ！」
リックは情けない声を上げながら、泡を食って駆け出した。怒涛のような足音がリックの背中を追っていく。
リックは一目散に建物の間に飛び込んでいく。狭い路地へと入り組んだ路地裏へと、持ちうる全ての地の利を費やして、魔族から逃げ延びようと必死になって走っていった。

山門は目の前で起こった事態が信じられなかった。
北東門を人間に閉じられてしまったのだ。街の外に残っていた増

援も、自分達の退路も断たれてしまった。それもこれもたった一人の人間のせいだ。
「追いなさい！　あの人間を生かして帰さないように！」
山門は逃げ出したリックを殺すように部下達に指示を出しながら、徐々に劣勢に追い込まれていく魔族の前線を忌々しげに振り返った。互いの主力同士が激突する北東商店街。そこでは瓦礫が飛び散り、死体が重なり、激しい戦いの光景が繰り広げられていた。
ふと山門は、先ほどまで北東商店街で脅威となっていた一人の人間が姿を消している事に気付いた。傷一つ負うことなく、何十人もの同胞を斬り伏せた忌々しい王国騎士だ。
あの女がいないのであれば、戦況は容易に覆せる。ここに残っている人間は雑魚ばかりだ。
山門は人知れず、陰湿な笑みを浮かべた。
「何を笑っている？」
突如かけられた言葉に、山門は面食らった。
「お前は！」
山門の前に立っていたのは、悠然と槍を構えたベルグだった。南東門で魔族の別働隊と戦っていたはずのベルグが、ぎらぎらと瞳を輝かせながらこの場に立っていたのだ。
その事実は、南東門に残っていた敵別働隊が全滅したことを意味していた。
「貰い損ねた首を受け取りに来た」
北東商店街の中心、魔族と人間の入り乱れる中での二度目の邂逅。山門とベルグが再びあいまみえた。
自分達の上司が敵と対峙しているのを見て、数十人の魔族がベルグに向かって詰め寄り始めた。並居る魔族達の中で、ベルグはたった一人だけ。そこには、いくら王国騎士といえども覆せない戦力差があった。
咄嗟に山門が後ろに飛びずさった。
両者の距離は大きく開いた。ベルグの槍が届きそうもない距離だ。

だというのに、ベルグは眉一つ動かさず、その場に立ち尽くしたままだった。迫りくる魔族達の姿も全く意に介していない。
山門は訝しげに思ったが構わずにさらに背後に飛んだ。宙を舞いながら愛用の弓を構え、ベルグに向かって矢をつがえる。後方へ移動しながらの射撃。それが山門の得意技だった。
「――術式展開」
ベルグがぽつりと呟いた。
狙いをつけようと弦を引き絞っていた山門は、突如膨れ上がった莫大な魔力に目を見張った。山門の見ている目の前で、ベルグが放つ魔力の量が急増していく。
「――魔力変換。魔術装填」
ベルグがかざした右手に、魔力が集中していく。
「魔術か！」
ベルグの行動を察した山門は先手を打って矢を放った。放たれた矢は勢い良く、ベルグへ向かって飛んでいく。
「術式完了。魔術行使――――」
ベルグがかっと目を見開いた。
「〈ファイヤーストリーム〉」
その瞬間、空気が枯れた。
枯野に小さな火種が落ちたかのように、ぼうっと微かな音がした。
山門は息を呑んだ。
火種は一気に爆発した。ベルグの手元から発動した魔術が、爆炎となって迸った。
ベルグの前方、五十メートルは続く石畳の道。ベルグに対峙する山門を含め、数十人の魔族が立っているその道を、炎が激しい勢いで駆け広がっていった。凄まじい火炎だった。
ベルグの目前までに達していた矢は空中で蒸発し、その延長線上で立ち尽くしていた山門も炎に呑みこまれた。すさまじい轟音がその悲鳴をかき消していた。山門を焼き尽くした炎はそれで満足する事無く、そのまま数十人の魔族を一気に焼き尽くしていった。

ベルグは熱気に頬を火照らせながら、魔力を炎に放出し続けた。

カシャワックの北東商店街、北東門を覆う近辺は一気に業火に包まれた。激しく燃え上がる炎は、南西門から避難する人々の目にもはっきりと見る事ができた。民衆は不安そうな顔付きで北東の空を見上げていた。

シルバは北東で燃え上がる炎を瞳に写しながら、避難民の誘導を警備兵に託し、再び走り出した。

やがて最後の一滴まで魔力を振り絞ったベルグは、右手を振り払った。魔術は消え、周囲を焼き尽くしていた炎も次第に勢いを無くしていき、やがては完全に消え去った。

そこにいたはずの多くの魔族は焼き尽くされ、黒焦げた死体と化していた。炎は住宅に延焼する事は無く、かすかに外壁に煤焦げた後だけを残しただけだった。

炎の奔流。これがベルグの持つ最大級の魔術だ。日属性の魔術の中でも上級の、王国に存在する魔術師でも限られた者しか扱えない規模の大魔術だった。

ベルグは魔力を使い果たし、軽い立ちくらみを覚えて膝を突いた。忌々しげに舌打ちしたが、体力の消耗は誤魔化しきれない。ベルグは膝を突いたまま立ち上がる事ができず、そのまま意識を失ってしまった。

この魔術をベルグが多用できない理由がここにあった。たった一度の使用で、ベルグは凄まじい消耗をしてしまうのだ。危険が大きすぎる。

やがて我に返ったように、警備兵達の歓声が上がりだした。ベルグの魔術を目の当たりにした警備兵達は興奮の色を隠しきれなかった。たった一つの魔術で、数十の敵を葬り去ったのだ。感動もひとしおだった。ベルグを助け起こそうと何人かの警備兵が駆け寄っていく。

北東方面の敵は半壊した。ベルグが疲労しつくしたとはいえ、今の炎を目にした魔族達の士気は地に落ちていた。残された警備兵達だけでも容易に敵を殲滅させることができる。
戦いの終わりは確実に近付いていた。

「うわあああ！」
「待ちやがれッ！」
リックは情けない悲鳴を上げながら、路地裏を走っていた。その背後から三人の魔族が目を血走らせながら追いかけてきている。
最初は十人前後だった追手も、リックの複雑な逃走経路によって徐々に脱落していき、三人の猛者だけが残っていた。リックと三人の追手は北東商店街の裏通りを縦横無尽に駆け回っていた。
走り続けて十分は経っただろうか。リックの体力はもう限界に近かった。本来ならばとっくに追手を振り払っているはずの距離を全力疾走しているのだ。肺が千切れそうに痛むし、太腿を持ち上げるのも億劫になってきていた。
流石の魔族も、やはり疲労困憊しているようだ。リックの背後からはぜえぜえという荒い呼吸が聞こえてきていた。
しかし、動けなくなったのはリックの方が先だった。
不意にもつれた足が絡まり、リックは派手に頭から地面に転がってしまった。強く打ち付けた頭で、視界がぐらぐらと揺れた。
「はあ――、ようやく――、捕まえたぜえ」
魔族が必死の形相でリックの元に辿り着いた。ぽたぽたと汗が滴っている。
リックは倒れたまま、剣を抜き放とうとした。しかし、その腕を魔族が上から踏みつけた。抜かれそこなった剣が虚しく大地に跳ねた。
「いまさら――抵抗しようなんて――、考えるなよ？」
リックは胸を大きく上下させながら、死を覚悟した。
魔族は深く息を吸ってから、自分の剣を抜き放った。

「あば――」
あばよと言いかけた魔族の口はそこで止まった。訝しげに眉をひそめたリックが見ている前で、魔族はぐらりとバランスを崩し、そのまま勢い良く地面に倒れた。
倒れた魔族の後頭部には一本の短剣が突き刺さっていた。
「なんだ、お前は！」
残された二人の魔族が、突如現れた乱入者に向かって叫んだ。
リックは壁を支えにして上半身を起こし、路地裏の先に立つシルバの姿を認めた。
リックはごくりと生唾を飲み込んだ。
剣を抜き抜き、シルバに向かって走り出した魔族達。仲間を目の前で殺された怒りに駆られているのか、リックの事など眼中には無いようだった。
リックはただ見ている事しかできなかった。
シルバは一本の短剣を右手に構え、弾むように大地を蹴った。
それは見る者を魅了する華麗な舞踊（ぶよう）だった。
するりとすれ違った魔族の首から鮮血が吹き出し、逆上した残りの魔族の攻撃をくるりとかわし、そのまま魔族を背後から愛しく抱きしめるように短剣を滑らせ、首を切った。
あっという間の出来事だった。
リックは呆気にとられて、ただ呆然とシルバの立ち振る舞いを傍観していた。
圧倒されていたのだ。
「……なぜあなたがここにいるの？」
だからシルバが自分の傍に寄ってきていたことに、リックは気付かなかった。
シルバの冷たい視線が鋭く突き刺さる。目の前で見せ付けられたシルバの実力に劣等感を強く感じたリックは、感謝の言葉を言う余裕すらなかった。
「……アイリスの命令で、北東門を閉めに行ったんだよ」

シルバは怪訝そうに眉をひそめた。
リックとアイリスの事情を知らないシルバは、なぜアイリスが拘置所に入れられていたはずの乞食に命令を出したのか分からなかったようだ。
「隊長があなたを逃がしたの？」
「ああ、そうだよ。何か文句あんのか？」
リックは意固地に答えた。どうにもシルバに対しては、つっけんどんな態度をとってしまう。
「そう」
シルバは納得したのか、それだけ言ってリックに背を向けた。
昨日の騎士団支部で陰険な関係になった二人だ。リックはシルバに負い目があるし、シルバはリックの事を許すつもりもないのだろう。それ以上続く会話があるはずも無かった。
リックはシルバの冷たい態度に怒りかけたが、すぐに自分が悪いのだと思い出した。シルバの服から所持品まで盗み、恐らくは大切なものであっただろうペンダントを紛失してしまったのだ。たった今助けてくれた事が、普通ならありえないことなのだと理解する。
あの小さい胸と違って、シルバには大きい器がある。自分が忌み嫌う相手も当然のように助けることができる。やはり、シルバも王国騎士なのだ。リックは思い知らされた。
シルバの背中が小さくなっていく。リックの胸に後悔が芽生える。
このまま、ちっぽけな自分を見せたままでいいのか。
言わなければならないこと、伝えなければならないことがあるんじゃないのか。
「おい、シルバ！」
無意識に言葉が口をついて出ていた。
シルバがすっと立ち止まった。
リックはふらつく足でなんとか立ち上がって、シルバの元へと近付いていった。
シルバは相変わらずの無表情のまま、静かにリックを見つめてい

る。
「……悪かった」
リックは心底から申し訳なさそうに言った。
「――何を言おうと、私はあなたを許すつもりは無い」
シルバはじっとリックを見返した後、淡々と告げた。
リックはシルバの冷たい言葉に胸を痛めながら、それでも意に介することなく口を開いた。
「お前に返すものがあるんだ」
リックは懐を探って、そして銀のペンダントを取り出した。
シルバがリックにびんたを振るった原因となったあのペンダントだ。
「……それは」
「取り返してきた。金とか他の持ち物は取り返せなかったけど、これだけは取り返してきたんだ」
リックは悪童ジョネスを助けた後、すぐに彼を問い詰め、リックがシルバから盗んだものを返すように脅した。魔族に襲われて気弱になっていたジョネスはすぐに観念し、リックに頭を下げながらこのペンダントしか残っていないと言ったのだ。
ジョネスが売り払うことすらできなかった二束三文の安物のペンダント。それでも――。
「宝物なんだろ？　悪かったな」
リックは立ち尽くしたシルバの手にペンダントを握らせた。シルバは信じられないように自分の手の中に視線を落とした。
リックはシルバの叱責を待った。何を言われようとも仕方がないと決めていた。
しかし、その時見せたシルバの反応に、リックはたじろいでしまった。
シルバは心から大切そうにペンダントを胸に抱き寄せ、優しくにっこりと微笑んだのだ。いつもの憮然とした表情からは考えられない、とても柔らかい表情だった。

リックは泡を食った。かあっと頬に血が昇っていったのを感じた。
しかし、シルバの笑顔も一瞬だった。リックが瞬きをした次の瞬間には、すでにシルバの表情はいつもの冷たい無表情に戻っていた。
度肝を抜かれて、唖然としたリックに向かってシルバは言う。
「……ありがとう。それでも、私はあなたを許すつもりはない」
シルバはすぐにペンダントを首に提げ、リックに背を向けた。
呆然と立ち尽くしたままのリックをおいて、シルバは走り去っていった。
やがて、ようやく我に返ったリックは、ぶんぶんと首を振って、今の笑顔を忘れようと努めた。あれは反則だった。いつも硬い表情をしている分だけ、あの笑顔は強烈にリックの胸を打ったのだ。
あんなに微笑むという事は、よっぽど大事なペンダントだったんだな。
リックは改めてシルバに申し訳なさを感じながら、視線をゆっくりと北西へと移した。

カシャワックの北西門で、老将と四天王は他を寄せ付けぬ凄まじい戦いを繰り広げていた。
道端が振り回す巨大な鉄棍とジラードが振り回す戦斧が、唸りをあげて衝突を繰り返していく。空気すら砕けそうな豪快な攻撃が次々に重ねられていった。
「やるじゃねえか、ジジイ！　久々に楽しくなってきたぜ！」
「ふん、抜かせ。儂の底力はまだまだこんなものじゃないわい！」
道端とジラードは軽口を叩き合った。戦いの中で当人同士にしか分からない奇妙な絆のようなものが二人に芽生えていた。お互い、戦っていることが楽しくて仕方なかったのだ。
道端が振り下ろした鉄棍をジラードは横っ飛びに回避した。打ち付けられた鉄棍が石畳を叩き割った。この時、道端に決定的な隙が生まれた。それを逃すジラードではない。
即座に一歩踏み出し、ジラードは戦斧を横薙ぎに振るった。空気

ごと押し潰すような一撃だった。
道端は咄嗟に振り下ろした鉄棍を持ち上げ、不完全ながらジラードの戦斧を防御した。目を見張るような反応だった。道端以外の相手ならば防ぐ事ができずに一刀両断されていたであろう。
しかし、ジラードの優位は変わらない。道端の剛腕でも無理に持ち上げた鉄棍を支えきることはできなかった。ジラードの戦斧によって鉄棍ははるか彼方へと弾き飛んでしまった。
「ほう、やるじゃねえか、ジジイ！」
道端は巨大な口に笑みを浮かべながら、ジラードを褒め称えた。しかしその笑顔は即座に消えた。
「――だが、まだよ！」
道端は言って、その巨大な腕を傍にあった家の壁に突っ込んだ。砕け散った壁の瓦礫の中から、道端はその家の柱の一本を無理矢理に掴みとっていた。
そして道端は柱を勢い良く振り払った。
長い。5メートルはあろうかという柱だ。すさまじい遠心力がその先端に働いている。
「なにをォ！」
ジラードは即座に戦斧を振るった。全体重を乗せた渾身の一撃だ。
轟音と共に柱が折れる。ジラードの戦斧が見事に柱を砕いたのだ。戦斧はそのまま石畳を破壊して大地に埋まった。
その瞬間、巨大な掌がジラードの顔面を覆い尽くした。
「うわっはっはっはっは！」
道端が凄惨な笑みを浮かべながら、ジラードの身体を持ち上げた。頭蓋骨がきりきりと万力で締め上げられるようだった。ジラードの手から戦斧がするりと離れた。
地力の差がここで出た。道端の飛びぬけた怪力が、ジラードの練達した技術を上回ったのだ。
道端はそのまま大きく振りかぶり、その剛腕でジラードを投げ飛ばした。

ジラードは成す術もなく宙を飛び、勢い良く地面に叩きつけられた。
「ぬうっ」
衝撃で石畳にひびが入った。
鎧が砕け、覗いた肌着が赤い血に染まっていた。ジラードは顔の皺をさらに深くし、苦悶の表情で苦痛を堪えている。
「――楽しかったぜ、ジジイ。だがそろそろ終わりにしようや」
道端が晴れ晴れとした表情で、鉄棍を持ち直しながらジラードに迫ってきていた。道端が一歩歩くたびに、大地が震え、埃が舞った。
ジラードは歯を食いしばりながら立ち上がろうとした。しかし、震える身体が悲鳴を上げた。
道端が徐々に距離を縮めてくる。
ジラードは観念したかのように、ふっと力を抜いた。
「じゃあな、ジジイ」
道端の巨大な影が落ちた。
ジラードは横たわったまま、道端の鉄棍が振り下ろされる時を待ち受けた。その表情に恐怖の色はなかった。ただあるがまま、泰然とした表情がそこにはあった。
道端が鉄棍をゆっくりと振り上げた。
道端は勝利を確信したように、満足気な笑みを浮かべた。
「――お前の名前を聞かせてもらおう！」
不意に凛々しい声が響いた。
「なんだァ？」
道端は背後から聞こえた声に、訝しげに振り返った。
その時、東の空に炎が上がった。ベルグの魔術だ。燃え上がる炎に照らされて道端の影が長く伸びた。
「答えられぬならそれでいい！　どうせ名もない小物だろうが！」
「なんだとォ！」
あからさまに侮辱されたことに、道端は怒りを顕わにした。生意気な口を叩いた相手の姿を探し、視線を動かす。

そして道端の目が一人の女性に留まった。石畳の上で腕を組み、堂々と立っている一人の女性だ。彼女は道端を睨み据えながら、一呼吸して威を発する。

「我が名はアイリス・ヘリオトロープ！　アルマニアの王国騎士だ！」

アイリスが名乗りを上げ、空気が震えた。

カシャワックで争う二つの勢力の代表が、遂にあいまみえたのだ。

ジラードはその隙に、ゆっくりと身体を起こした。道端を挟んで、アイリスと視線を交わした。一対一では劣っていても、二体一なら分からない。

「いいだろう！　かかってこい、王国騎士！」

道端は怒鳴り返し、鉄棍を振り上げながらアイリスに向かって駆け出した。

空を覆い尽くすような巨体がアイリスに迫っていった。

その体格差は絶望的だった。ジラードのように力の強い人間ならまだしも、アイリスのような力の弱い人間はまともにぶつかっても勝ち目は無い。木の幹のような太い腕で簡単に握りつぶされてしまうだろう。

それでもアイリスは退く気は無かった。騎士としての矜持もあったし、多くの兵を殺した相手への怒りもあった。だが、それよりも何より、アイリスは自分を信じていた。

どんな相手だろうとも負ける事が無い剣の技術を、今日まで磨いてきたのだから。

アイリスはごくりと生唾を飲み込んでから、剣を構えた。

「うぉら！」

道端が唸りながら鉄棍を振り下ろした。アイリスは地を蹴り、鉄棍は虚しく大地を砕いた。砂利ごと鉄棍を持ち上げた道端に、アイリスが接近する。

アイリスは道端の懐に踏み込んだ。しかし、視界の端から道端の

太い足が飛んできた。
「――っ！」
鈍重そうな見かけとは異なり、素早い蹴りだった。アイリスは咄嗟に地面を転がり、間合いとって道端の蹴りをかわした。鼻先を通り過ぎていった足の轟音が、耳から離れなかった。
凄まじい力だ。一度でも食らえば、簡単に骨が砕けてしまうだろう。
「女にしてはなかなかやる！　だが、ジジイほどじゃねえ！」
道端はアイリスを見下すように言い放ち、アイリスへ鉄棍を振り払った。
そこに戦斧を構えたジラードが割って入った。鉄棍を戦斧で受け止め、弾き飛ばす。
「でかいだけの奴が偉そうに！」
「きたなぁ、ジジイ！」
負傷しているとはいえ、老将は健在だった。傷から血を流しながら、強い眼光で道端を睨み飛ばしている。
アイリスはジラードの背中から飛び出し、道端に切りかかった。
「ジラード殿に及ばなくとも構わん！　私はお前を倒してみせる！」
道端は鋭く踏み込んできたアイリスの斬撃を受けた。剣は道端の身体の表面を滑っていった。
浅かった。
道端はアイリスに鉄棍を振るいながら笑い出した。
「うわっはっはっは！　そんな非力な剣で、俺を倒そうなどと笑わせてくれる！　お前には圧倒的に――」
道端が魔力を解き放った。アイリスは危険を察知したが、あまりにも道端に接近しすぎていた。とうていかわしきれる距離ではない。
「パワーが足りねぇッ！」
魔力によって爆発的に膨れ上がった腕の筋肉。ぴんと張り詰め、今にも弾けそうな両腕で持ち上げた鉄棍を、道端は凄まじい勢いで大地に叩きつけた。

「いかん！」
ジラードが飛び出した。
轟音と共に、大地が割れた。石畳が砕かれ、地割れが一直線に走っていった。
「ぬおっ！」
その衝撃をジラードが真正面から受け止めた。
一気に弾き飛ばされたジラードが背後の建物へと叩きつけられた。口から血を吐き、唸りながら瓦礫の中に崩れ落ちた。
アイリスもまた、かわしきれなかった。ジラードが庇ってくれたとはいえ、至近距離から衝撃を受けたのだ。激しく吹き飛ばされ、地面を二転三転と転がった。
背中をどんと打ちつけ、衝撃が全身に走った。そのまま大地に膝をつく。そのまま意識を失いそうになったが、歯を食いしばって堪えた。
私が盾になれば、ジラード殿は確実に道端に攻撃できた。私の不用意な攻撃が彼に傷を負わせたのだ。
それでもジラードは自分を守ったのだ。その意味を、その責任を考えれば、ここで倒れるわけにはいかなかった。
アイリスはゆっくりと立ち上がった。

その背中を、リックは魅入られたように見つめていた。
北東門から逃げ延び、勇みこんで北西門へ駆けつけたのはよかったが、リックは道端の姿を見た途端、恐怖で腰を抜かしてしまった。
リックが怯えて建物の影に隠れている間に、吹き飛ばされたアイリスがゆっくりと立ち上がった。相当な痛手を被っているはずなのに、アイリスの表情に苦悶の色はなかった。
とてもじゃないが敵いっこない。あんな敵にどうやって勝てると言うんだ。
アイリスは全身の痛みを意に介さず、ゆっくりと一歩踏み出した。その腕から一筋の血が伝っているのが見える。体の節々に擦り傷が

ある。汚れきって、打ちのめされて、もう勝ち目などないはずの彼女がしかし、燃え滾(たぎ)る何かで輝いて見えた。
その背中を、リックは魅入られたように見つめていた。
見ていることしかできなかった。
目の前に広がる光景は、自分などでは到底及ぶべくもない本物の騎士の戦場だった。

道端は至近距離で衝撃を受け、相当な激痛を受けたであろうアイリスを睨みつけた。真正面から食らったジラードが倒れたのはいい。当然のことだ。しかしアイリスが今の一撃を食らってもまだ立っていられる事が信じられなかった。
アイリスは痛みに顔を歪ませながら、剣を振りかぶって気合を入れた。
「例え、非力な剣だとしても――」
アイリスはきっと道端を睨みつけ、叫んだ。
「気合があれば、何だって貫ける！」
「気合だァ？」
道端は呆れ気味に呟いた。
「そうだ！　気合だッ！」
叫んで、アイリスは駆け出した。道端の巨体に尻込みすることなく、前のめりに突っ走っていく。
「はっ！　おもしれえ！　悪くねえぞ、女ァ！」
道端はアイリスの気概を受けて、心から楽しそうに笑みを浮かべた。
暗い空気がアイリスに圧し掛かった。不意に放たれた道端の魔力だ。アイリスは警戒しながらも、足を緩めることなく道端へと接近していく。
「行くぜぇ、マウンテン――クラッシャァア！」
体内を巡る魔力を腕に集中し、莫大な破壊力に変換して武器を振り下ろす道端の必殺技だ。腕の中で何かが爆発したかのように膨ら

んだ道端の剛腕が、唸りを上げて鉄棍を振り下ろす。
アイリスの目の前に鉄棍が叩きつけられる。
道端の鉄棍がカシャワックの大地を砕いた。同時に大量の土砂が飛散し、轟音と共に石畳が吹っ飛んだ。アイリスが踏み込んだ場所ごと、地面が円形に消失した。
凄まじい勢いで舞い上がった土砂によって視界は完全に土煙に包まれた。
道端は大量の魔力を消耗した後の気だるい虚脱感を覚えながら、アイリスの気配を探った。
アイリスの魔力はどこにも感じられなかった。
「ふん、これで終わりだな」
どれほど腕が立つ相手だろうとも、この一撃を食らって生きていられた者はいない。
退屈続きの遠征だったが、この都市ではそれなりに楽しむことができた。
後は適当に人間どもを皆殺しにして、浴びるほどの酒を呑むだけだ。
「……オーバーヒートォ！」
不意に、背後に魔力が生まれた。
何も無かったはずの空間に、突然現れた魔力。それは凄まじい速度で増幅していく。
あっという間に増幅し、恐ろしいまでに膨れ上がった魔力の源に対して、道端は勢い良く振り返った。
道端の背後に、爆発的な魔力を放っているアイリスが剣を斜めに、腰を落として立っていた。
悪寒が走った。
なんなんだ、この魔力量は――！
尋常ではなかった。道端が発することのできる魔力の出力量をはるかに上回った魔力が溢れている。一度にこれほどの出力ができる者は四天王にもいないはずだ。

この小さな身体のどこにこれだけの魔力が眠っていたのか。いや、眠っていたどころではない。
先ほどまで道端はアイリスの魔力を全く感じることができなかった。魔力に頼らずに戦うジラードからすら魔力の流れを感じ取っていたというのに。
そのことの異常性に、今になって道端は気が付いた。
人間だろうと魔族だろうと変わらず、魔力は身体を巡っているものだ。それが弱者だろうと強者だろうと変わらない。意識せずとも身体の働きとして自然に魔力は流れていくものなのだ。
それが全く感じられないなんて、ありえるはずがない。
現に道端たちは大軍から漏れる魔力を隠すために、わざわざ隠蔽魔術をかけて進軍しているのだ。魔力を隠すことは簡単なことではない。
しかしアイリスは、魔力を完全に消していたのだ。
魔力を消す。そんなことができる者はいない。少なくとも、魔族にそんな技術を持った者はいないはずだ。
自然と流れている魔力を何にも使わず、身体を巡ることすらさせない技術を持っている者がいるとすれば――。
その魔力はどこにいく？
堰き止められた川は徐々に水かさを増していき、やがてほんの一点の穴から、一気に爆発したように流れ出す。下流にある全てのものを一息に飲み込む怒涛の流れとなる。
目の前にあるのはまさにそれだった。
アイリスの翡翠色の瞳が、道端を強く睨みつけていた。
道端は咄嗟に鉄棍を振り払おうとした。それは、恐怖からの行動だった。
アイリスが左足を力強く滑らせた。ざざと砂塵が舞い上がる。
全体重を乗せた左足を軸足にして、アイリスは道端の懐で身体を捻る。
「アクセルターン――――」

回転した勢いに乗って、アイリスは道端の数倍以上の魔力を解放した。
「――――バースタァァァ！」
道端が払った鉄棍を潜り抜け、アイリスの剣が振り払われた。剣を横薙ぎに一回転させた勢いと、刀身が爆発しそうなほどの魔力が加わり、凄まじいまでの破壊力が発生する。
空の果てまで吹き飛んでしまいそうな衝撃が道端を襲った。
魔力の爆発が起こり、無色の衝撃が空に昇った。爆心地に発生した真空に、荒々しい風が吹き込んでいく。アイリスの前髪が風によって舞い上がった。
アクセルターンバースター。それがアイリスのたった一つの必殺技だった。長い鍛錬の日々の中でようやく編み出した誰よりも強力な一撃だった。
爆発が止んだ。
一陣の春風が吹いてきた。
「……どこにそんな魔力隠してやがった？」
「気合だ」
砕け散り、荒れ果てた北西門前の道。不意に訪れた静寂の中で、道端はその大きな身体で膝をついていた。傷だらけだったが、その瞳の光は薄れていなかった。
「私には力もないし、魔力の出力も多くない。だから魔力を溜めることを覚えた。それぐらいしかできなかったんでな」
アイリスは静かに剣を鞘に収めた。
「今のが私の一ヶ月分の魔力だ。これでまだ息があるとは、さすがは魔族の四天王だな。私はもう打ち止めだ」
一ヶ月分の魔力。想像するだけで恐ろしい量だ。それだけの期間、魔力を溜め続けるなど、並の人間にできることではない。
「ふん、俺ももう立てねえよ」
道端は凄惨な笑みを浮かべながら言った。どこか満足気な表情だった。

「――アイリス・ヘリオトロープ。覚えておいてやる。そこのジジイも含めて、次に会った時に決着をつけてやる」
そう言うと、道端は大きく息を吸い込んだ。
「全員、聞けぇいッ！」
カシャワック中に響き渡る大音声だった。アイリスは思わず耳を塞いだ。
「俺達の負けだァッ！　逃げるぞォッ！」
遠くからおお、という雄叫びが返ってきた。
言う口の渇かぬうちに、道端はアイリスに背を向けて都市の外へと駆け出した。体力も魔力も使い果たしたアイリスは、それを追うことができなかった。灰色の巨体が北西門をくぐっていくのを見送った。

「もう出てきていいぞ」
アイリスは瓦礫の上で、あらぬ方を見つめながら言った。
視界の端、建物の影からばつが悪そうにリックが姿を現した。
「……終わったのか？」
「ああ」
アイリスは魔力を使い果たした後の気だるい倦怠感に包まれながら、リックに向き直った。
二人はしばし見つめあった。さらさらと流れる春風の中、静かな時間が流れていく。
やがてリックが頬をかきながら言った。
「アンタは変わってないな」
アイリスは悲しげに目を伏せた。昨夜の橋の上で言い返すことができなかった記憶が蘇る。押し黙ったアイリスに、リックは続けて言い重ねた。
「――安心したよ」
「え？」アイリスは顔を上げた。
リックはふっと優しげな笑みを浮かべ、静かに言う。

「アンタはあの日の騎士のまま。俺の目に焼きついた本物の騎士の姿のままで、変わる事なくここにいる」
「……そうか」
柔らかい春風がアイリスの髪をふわりとなびかせた。舞い上がる砂塵が目に入らぬよう、アイリスは静かに目を閉じた。
あの日に信じた確かな夢を、私は今も変わらず信じている。
時間は流れて境遇は変わった。時と共に成長し、色々なものが変わっていった。
それでもずっと変わらないものがあった。
その事を、誇りこそすれ恥じる必要などあるのだろうか。
「――そう言うお前も変わってないな」
アイリスはにやりとしながらリックに言った。リックは不機嫌そうにふん、と鼻で笑ったが、その態度はどこか、まんざらでもなさそうだった。
音一つしない静かな時間。優しい静寂がリックとアイリスを包み込んでいた。

3

太陽が正午を過ぎた頃、カシャワックで繰り広げられた戦いは、静かに幕を閉じた。
アイリスとジラードに倒された道端の号令によって、魔族達はカシャワックから逃げ出していった。戦場となった北東、北西、南東の三つの門の周辺は荒らされていたが、それでも被害は最小限に抑えられたといってよかった。これもアイリス小隊と名も無き警備兵達の奮闘の賜物(たまもの)である。
アルマニアの王国史にアイリス小隊の名が記されるのは、このカシャワックの戦いが初めである。王国史に燦然(さんぜん)と輝くアイリス小隊の戦いの記録はここから続いていくのだ。

後世に語り継がれる英雄譚（えいゆうたん）の始まりである。

戦いが終わり、勝利の余韻に浸りながら、戦士達が一堂に介していた。

カシャワック中央の警備隊本部。この戦いにおいても作戦本部の役割を果たしていたこの広場で、生き残った約三百人の警備兵と四人の騎士が勝利を祝していた。

広場に戻ったアイリスはどこかへ去ってしまったリックの姿を探していたが、どこにも見当たらないうちに、周囲に流されるように宴会の席に座らされてしまったのだ。

広場では避難から戻ってきた民衆達も入り混じった大宴会が始まっていた。

宿屋や酒場から机や椅子が並べられ、多種多様なご馳走が用意されている。さながら立食パーティーだった。人々は入り乱れ、酒を呑み、笑いあい、楽しい時間を過ごしていった。

その中でもアイリス小隊の四人の王国騎士への待遇は別格だった。カシャワックで最高級の酒が惜しげもなく振舞われ、次々と新鮮な料理が彼等の元に運ばれていった。

包帯で全身を覆われたジラードと、魔力を使い果たして蒼白な表情で座っているベルグの二人を置いて、体力の残っているアイリスとシルバが豪快に食事を口に運んでいた。

アイリスはこんがり焙った牛肉にがぶりと噛み付きながら、ジョッキに入った酒を喉を鳴らして飲み干した。そして休む間もなく次々に口の中に食事を運んでいく。戦いの中でアイリスの凛々しい姿を見てきた警備兵達の淡い恋心を打ち消すには十分な貫禄だった。

シルバはもぐもぐとひたすらに口を動かしている。酒は全く手をつけていないが、すでに積み重なった空き皿が、シルバの胃袋の大きさを証明していた。シルバはもぐもぐとリスのように頬を膨らませながら無言で皿を空けていく。

ジラードとベルグは、呆れ顔で女二人の食事風景を眺めていた。

あまり仲の良くない二人だったが、この時ばかりは深く共感していたといえる。
「あはははッ。呑めー、呑めー」
アイリスは顔を真っ赤にしながら、緩みきった表情でシルバに酒を勧めていく。アイリスは笑い上戸だった。いつもの凛と張り詰めた様子はまるで無く、何もかもが楽しそうに笑顔を浮かべていた。
シルバはアイリスに注がれた酒をじっと見つめた。その間も、もぐもぐと咀嚼（そしゃく）を続けている。空き皿は休む事無く積み重ねられていく。
シルバはごくりと食料を飲み込んでから、恐ろしいものを見ているかのような表情で酒を睨み続けていた。シルバは酒を苦手としているのだ。
「アイリス様！」
そこに、一人の警備兵が駆けつけてきた。アイリスは火照った顔を警備兵に向けた。
「どうした？」
「ブランキッド隊長が戻ってきました」
その名を聞いたアイリスの顔から、酔いがすうっと退いていった。

アイリス小隊の面々――安静にしてなくてはならないジラードを除いた三人の王国騎士は厳しい表情を浮かべてブランキッドの待つ天幕へと足を運んだ。
「いやあ、流石は王国騎士の皆々様！　素晴らしいご活躍でした！」
ブランキッドは宴会場の一角に設けられていた天幕の中で、腰を低くしながら嫌らしい笑みを浮かべていた。
ベルグは自分の表情が冷たくなっていくのを感じた。
ブランキッドは戦いが終わってから都合よくカシャワックに戻ってきたのだった。自分の命欲しさに、民を置いて我先に逃亡を図った愚か者だ。
突き出た腹を揺らしながら、恥じ入ることなく目の前に立ってい

るブランキッドの姿に、ベルグは静かな怒りを覚えていた。
「――それでですね、早速ですが、都市全体が被った被害額についてお話を」
ベルグはブランキッドのにやけた顔に我慢ができずに、詰め寄った。
「貴様！　よくも抜け抜けと顔を出すことができたなッ！」
ベルグの凄まじい剣幕にブランキッドはたじろいだ。
なおも言い重ねようと口を開きかけたベルグの肩に、アイリスがぽんと手を置いた。
振り返ったベルグの視線とアイリスの視線が絡み合う。アイリスは気持ちは分かるが落ち着け、とでも言いたげにベルグに頷いてみせた。
ベルグは聞こえよがしに舌打ちをした。確かに、この程度の下劣な男にいちいち腹を立てるのは無駄なことだ。ベルグは自分の激情を押さえ込み、隊長の意向に従った。
それにしても、随分と大人になったものだな。
ベルグは驚いたようにアイリスを見つめた。ベルグはてっきり、この中でもブランキッドに最も怒りを覚えているのはアイリスだと思っていたのだ。
ブランキッドはベルグを押し留めたアイリスに対して、感謝の気持ちを表すように下卑た笑みを浮かべてみせた。まるでベルグの振る舞いこそが無粋だとでも言いたげな表情だった。
アイリスはブランキッドの粘ついた笑みに、にこりと笑って返した。
緊張した空気が緩んだ。
そしてアイリスは笑顔で右拳を大きく振りかぶった。
「へ――？　……ぶへぇっ！」
アイリスの拳がめりこんだブランキッドの顎の骨がごきりとあり得ない音を立てて砕ける。そして机ごとひっくり返ったブランキッドが地面を一回転し、派手な音を立てた。

「恥を知れ、ブランキッド・カーン。貴様の様な下種(げす)が生きているということ自体許されないことだ。お前を警備隊から追放する。二度とこの町の土を踏めると思うな」
アイリスは無様に倒れたブランキッドを見下しながら言った。
前言撤回だ。ベルグは苦い表情で考えた。
アイリスは大人になんてなっていなかった。

リックはカシャワックの北部の森林の中に佇んでいた。そばで流れている支流の音だけが聞こえていた。
いつも水浴びをしている通い慣れた場所だ。この街でリックが一番気に言っている場所でもある。
リックは額の汗を拭った。その顔は土に汚れてしまっている。
目の前にあるのは、こんもりと盛り上がった土の山だ。リックはその上に魔族の死体から奪った剣を突き立てた。
「じゃあな、ローじいさん」
リックは一人でローを埋葬していたのだ。
剣を墓標とするのは戦士の墓だが、リックにとってはどうでもよかった。
リックは安らかな気持ちでローの墓を眺めていた。悲しみは不思議と湧いてこなかった。
「俺、頑張ることにしたから」
枝が揺れて、陽光が瞬いた。
静かな森の空気の中、リックはローに背を向けて歩き出した。
街に戻ると、遠くから歓声が聞こえてきた。宴会が盛り上がっているようだ。
リックは一つ溜息をつくと、アーケ川に沿って歩き出した。この川を境にして、数時間前までは死闘が繰り広げられていたのだ。
「おい、乞食野郎」
不意に、リックの前にジョネスが現れた。なぜか盾を持っている。
リックは思わず身構えた。

「なんだよ？」
ジョネスはあらぬ方向を見つめながら口を開いた。
「行くのか？」
「ああ」
「そうかよ」
ジョネスは素っ気ない口調で言った。しかし、いつものような刺々しさはあまり感じられなかった。
アーケ川から冷たい春風が吹き込んできた。
「じゃあな」
リックはジョネスが何も言おうとしないので、そのまま横を通り過ぎようとした。
「待て」
ジョネスがリックの背中を呼び止めた。リックは足を止めた。
「持ってけ」
振り返ったリックに、ジョネスが面倒臭そうに盾を差し出していた。
「は？　なんだよ、これ」
「ウチの家宝だ」
「そうじゃなくて」
ジョネスは忌々しげに舌打ちをした。
「……礼だよ、礼。そんぐらい察しろよ」
言いながら、無理矢理リックの胸に盾を押し付けた。
リックは初めて出会ったかのようにジョネスをまじまじと見つめた。
そして、その頬を勢い良く殴りつけた。
「てめえ、なにしやがるッ！」
ジョネスは怒鳴り返してきたが、殴り返してくることはなかった。
「うるせえ！　今までよくもやってくれたな！」
リックはジョネスの盾を持ちながら言った。
「今の一発とこの盾でちょうどいいくらいだ！」

「はん、そうかよ！」
二人はそこで押し黙って互いを見つめあった。
四年間、良くも悪くも顔をつき合わせてきた同士だ。
それなりに、感慨もあった。
「じゃあな。もう二度と会うこともねえだろうよ」
リックは言って、背を向けた。
「リック」
ジョネスが初めてリックの名を呼んだ。
それは、妙に耳にくすぐったい響きだった。
決して友達とはいえない。口が裂けてもそんなことはいえない。
思い返して、憎らしさや怒りしか感じない関係だ。
それでも――。
「なれよ」
何に、とは言わない。
「ああ」
それだけで十分伝わる。
「行ってくる」
そして二人は別れを告げた。

カシャワックの北東門は主戦場となったせいでひどく荒れ果てていた。
リックはローの剣を腰に差し、ジョネスの盾を背中に背負いながら門の下で立っていた。
やがて、二頭の荷馬を連れた四人の王国騎士が姿を現した。
瓦礫の撤去作業をしている警備兵がアイリス小隊に感謝を告げていた。ジラードが鷹揚（おうよう）に警備兵に笑いかけていた。しかし、隊長のアイリスはどこか浮かない顔をしている。
やがてシルバがこちらに気付き、立ち止まった。つられてアイリス小隊の全員が足を止める。
リックの心は決まっていた。

驚いたように息を呑んだアイリスに向かって、一歩を踏み出す。
夢に向かって一歩を踏み出す。
「俺を騎士にしてくれ」
リックは強い口調で言った。そこに迷いも後悔もなかった。まっすぐにアイリスを見据えている。
「ふん、乞食の盗人が何を言うかと思えば――」
ベルグがぐいと一歩踏み出した。アイリス小隊を代表するように騎士達の前に立ち、リックに告げる。
「お前程度の力量で騎士になれるとでも思っているのか？　第一、王国騎士を任命できるのは国王陛下だけだ」
冷たく言い捨てたベルグの言葉に、リックは打ちひしがれて顔を伏せた。
ベルグの言うことはもっともだ。自分の力量はよく分かっているし、ましてやただの乞食が国王に認められるはずがない。
やはり駄目なのか。俺なんかじゃ騎士になれないのか。
足を踏み出そうにも、分厚い壁に遮られているのか。
「そういえば」
不意に、アイリスが口を開いた。ベルグの言葉など素知らぬ顔で、リックの前に一歩踏み出した。
「――そういえば、ちょうど雑用夫が逃げ出してしまっていたな」
アイリスがわざとらしく声を高げた。
リックはゆっくりとアイリスに顔を向けた。
アイリスはにやりとした笑みをみせた。
「リック、どこかにちょうどいい雑用夫がいないか知らないか？　そうだな――、騎士になる為ならなんだってやり遂げるような気概を持った奴がいい」
リックは不敵な笑みを浮かべた。
「それならちょうどアンタの目の前に一人いるぜ？」
「ほう、それはどこのどいつだ」
リックは堂々と胸を張った。

「リック・クロビス。アンタよりすげえ騎士になる男だ」
「よし――」
アイリスは晴れ晴れとした表情でリックに笑みを返した。
「来い、リック！　私がお前を騎士にしてやる！」
ジラードはふむ、と面白そうに頷いてみせた。
シルバは無表情のまま、冷たい視線でリックを見つめる。
ベルグは顔を歪め、忌々しげに溜息をついた。
一陣の春風が流れた。青々と晴れた空の下、爽やかな空気が騎士達の間を通り抜けていく。
「行くぞ！」
アイリス小隊隊長の号令の下、王国騎士達は歩き始めた。
一人の雑用係を加え、五人となったアイリス小隊が、北東門をくぐり抜けて開放都市カシャワックを後にする。
王暦三一三年四月十六日。四天王の一人を倒したアイリス小隊の、魔王討伐への長い旅は始まったばかりだった。

踏み出した足が一段目に届いた。
目の前にあったのは壁ではない。遥か高みへ続く階段だった。
目には見えない遥か遠くに、いつか見た背中が立っている。
そこまで続く階段を、今ゆっくりと昇り始めた。

第一章　完

第一章　第五話（最終話）『来い、リック！』（第二稿）（後書き）

【後書き】

申し訳ありません。しばらく実生活が大変なので、続きを書く目処がなかなか立ちません。

第二章は、ジラードがメインのお話になる予定です。

工業都市デュランタに到着したアイリス小隊は、一泊してすぐに発つことにします。

しかし翌朝、目が覚めるとひとりの姿が消えていました。

足止めを食らってしまったアイリス小隊。

夜な夜な徘徊する『黒騎士』と呼ばれる殺人鬼。

そして自分の実力を思い知るリック。

たぶん、こんな感じになる予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0782d/

アルマニアナイツ

2010年10月10日22時58分発行